

水 戸 市

中 遺 跡  
寺 遺 跡  
大 遺 跡  
舟 塚 古 墳 群

主要地方道石岡城里線バイパス整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和5年1月

茨城県水戸土木事務所  
公益財団法人茨城県教育財団



水 戸 市

中寺大舟 遺道塚 古跡  
寺内城 遺跡墳 群

主要地方道石岡城里線バイパス整備  
事業地内埋蔵文化財調査報告書

令和5年1月

茨城県水戸土木事務所  
公益財団法人茨城県教育財団



## 序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県などの各事業者からの委託を受けて埋蔵文化財の調査と整理作業を実施することを主な目的として、昭和52年に調査課が設置されて以来、数多くの遺跡の調査を実施し、その成果として調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県水戸土木事務所による主要地方道石岡城里線バイパス整備事業に伴って実施した、水戸市中道遺跡、寺内遺跡、大城遺跡、舟塚古墳群の調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、古墳・奈良・平安・室町・安土・桃山・江戸時代の集落跡や墓域を確認し、遺跡の一端が明らかになりました。中道遺跡の奈良・平安時代の道路跡、寺内遺跡と大城遺跡の掘立柱建物跡や堀跡、舟塚古墳群では奈良・平安時代の火葬墓は、当時の土地利用を知る上で、欠くことのできない貴重な資料となります。

本書は、これらの調査の成果をまとめたものです。本書が、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上の一助として、かつ学術的な研究資料として、御活用いただければ幸いです。

最後になりますが、調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県水戸土木事務所に対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、水戸市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和5年1月

公益財団法人茨城県教育財団  
理事長 小泉元伸



## 例　　言

- 1 本書は茨城県水戸土木事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が令和元年度、令和2年度に調査を実施した、茨城県水戸市牛伏町140-9ほかに所在する中道遺跡、同市牛伏町271-2ほかに所在する寺内遺跡、同市牛伏町266-8ほかに所在する大城遺跡及び同市大足町1327-4ほかに所在する舟塚古墳群の調査報告書である。
- 2 調査期間及び整理期間は以下のとおりである。  
調査 令和2年1月6日～3月31日  
令和2年4月1日～7月31日  
整理 令和4年4月1日～9月30日
- 3 調査は、令和元年度が副参事兼調査課長白田正子のもと、首席調査員兼班長櫻井完介、次席調査員田村雅樹、調査員宮内良隆、令和2年度は、調査課長酒井雄一のもと、首席調査員兼班長櫻井完介、首席調査員獅子内一成、調査員仙波亨が担当した。
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理課長本橋弘巳のもと、調査員近江屋成陽が担当した。
- 5 本書の作成にあたり、舟塚古墳群第1～3号火葬墓、第6号土坑の火葬骨の自然化学分析は、国立科学博物館筑波研究施設人類研究部・人類史研究グループ研究主幹坂上和弘、同研究員梶ヶ山真理、中山なな氏に分析及び原稿執筆を依頼した。また、火葬骨の保管については同博物館筑波研究施設で保管している。中道遺跡第1号掘立柱建物跡柱穴から出土している柱材の樹種同定についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、結果については、付章で掲載した。
- 6 当遺跡の出土遺物及び実測図・写真等は、茨城県埋蔵文化財センターで保管している。

## 凡　例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅹ系座標に準拠し、X = + 43,640 m、Y = + 47,200 mの交点を、基準点（A 1a1）とした。なお、この原点は、世界測地系（測地成果2011）による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40 m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10 等分し、4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3、…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1a1区」のように呼称した。

2 実測図・遺構一覧・遺物一覧等で使用した記号は次のとおりである。

遺構 HT - 方形堅穴遺構 P - ピット PG - ピット群 SA - 柱穴列 SB - 掘立柱建物跡 SD - 溝跡・堀跡 SE - 井戸跡 SF - 道路跡 SI - 堪穴建物跡 SK - 土坑・土坑墓・火葬墓  
土層 K - 搾乱

3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は 400 分の 1、各遺構の実測図は原則として 60 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として 3 分の 1 の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

■ 燃土・施釉・道路跡硬化面 ■ 火床面・黒色処理・繊維土器断面  
■ 瓯部材・粘土範囲 ■ 桂痕跡・柱当たり・炭化物・煤（石鉢のみ） ■ 須恵器断面  
● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品 ■ 瓦 - - - 硬化面

4 土層解説と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物の量、粘性・総まりの表示は、次のとおりである。

ローム-ロームブロック 燃土-燃土ブロック 粘土-粘土ブロック

A - 多量・強い B - 中量・普通 C - 少量・弱い D - 微量

サイズは「大・中・小・粒」で、炭化材については「材・物・粒」で表記した。

粘 - 粘性 緩 - 緩まり

5 遺構・遺物の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位はm、cm、gで示した。なお、現存値は（ ）を、推定値は〔 〕を付して示した。

(2) 遺物番号は遺構毎の通し番号とし、本文、挿図、挿表、写真図版に記した番号と同一とした。

(3) 遺物一覧の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

6 堪穴建物跡の「主軸」は、炉・竈を通る軸線とし、主軸方向は、遺構の長軸（径）方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N - 10° - E）。

整理の段階で遺構名を変更したもの及び欠番にしたものは、次のとおりである。

## 中道遺跡

変更 SK 1 → 第 1 号土坑墓

欠番	新番号	欠番	新番号
PG1-P3	SB2-P18	PG1-P24	SB2-P15
PG1-P9	SB2-P19	PG1-P33	SB2-P14
PG1-P14	SB2-P20	PG1-P27	SB2-P13
PG1-P20	SB2-P17	PG1-P41	SB2-P12
PG1-P22	SB2-P16	PG1-P42	SB3-P11

## 寺内遺跡

変更 SD 7 → 第 1 号堀跡 SK 1 → 第 1 号方形堅穴遺構 (略号 SK 1 (欠番) → HT 1 )

欠番	新番号	欠番	新番号	欠番	新番号	欠番	新番号
SK 2	PG1-P1	SK18	PG1-P11	SK32	PG1-P21	SK32	PG1-P31
SK 6	PG1-P2	SK20	PG1-P12	SK36	PG1-P22	SK33	PG1-P32
SK 7	PG1-P3	SK21	PG1-P13	SK41	PG1-P23	SK54	PG1-P33
SK 8	PG1-P4	SK22	PG1-P14	SK43	PG1-P24	SK55	PG1-P34
SK 9	PG1-P5	SK23	PG1-P15	SK46	PG1-P25	SK56	PG1-P35
SK12	PG1-P6	SK24	PG1-P16	SK47	PG1-P26	SK57	PG1-P36
SK13	PG1-P7	SK25	PG1-P17	SK48	PG1-P27	SK58	PG1-P37
SK14	PG1-P8	SK27	PG1-P18	SK49	PG1-P28	SK59	PG1-P38
SK15	PG1-P9	SK28	PG1-P19	SK50	PG1-P29	SK60	PG1-P39
SK17	PG1-P10	SK30	PG1-P20	SK51	PG1-P30	SK66	PG1-P40

## 大城遺跡

変更 SI 1 → PG 1 SI 3 → PG 2 SI 4 → PG 2 SI 5 → PG 2

欠番	新番号	欠番	新番号	欠番	新番号	欠番	新番号
SB1-P5	SA3-P3	SB2-P11	PG3-P13	SK51	PG1-P7	SK96	PG3-P2
SB1-P7	SA2-P1	SB2-P13	PG3-P14	SK55	PG1-P8	SK97	SB1-P7
SB1-P8	SA2-P3	SB2-P14	PG3-P6	SK56	PG1-P9	SK98	SA3-P1
SB1-P9	SA2-P2	SB2-P15	PG3-P10	SK57	PG1-P10	SK99	PG3-P5
SB1-P10	SA3-P2	SB2-P16	PG3-P9	SK61	PG1-P6	PG1-P1	SA1-P1
SB1-P11	SA4-P1	SB2-P17	PG3-P7	SK71	PG1-P11	PG1-P2	SA1-P2
SB1-P12	SA4-P2	SK34	PG1-P5	SK82	PG2-P97	PG1-P3	SA1-P3
SB1-P13	SA4-P3	SK41	PG1-P1	SK83	PG2-P116	PG1-P4	PG1-P24
SB2-P5	PG3-P8	SK42	PG1-P3	SK88	PG3-P4	PG1-P5	PG1-P25
SB2-P9	PG3-P12	SK43	PG1-P4	SK94	PG2-P126		
SB2-P10	PG3-P11	SK49	PG1-P2	SK95	PG3-P3		

欠番 SB1-P14 SK11 SK12 SK16 SK17 SK19 SK20 SK21 SK22 SK23  
 SK24 SK25 SK29 SK30 SK31 SK33 SK35 SK36 SK37 SK38  
 SK39 SK44 SK45 SK48 SK64 SK65 SK66 SK67 SK68 SK69  
 SK90 SK92 SK100 PG3-P1

## 舟塚古墳群

変更 SK 8 → 第 1 号火葬墓 SK 9 → 第 2 号火葬墓 SK23 → 第 3 号火葬墓

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 位置と地形	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 中道遺跡	10
第1節 調査の概要	10
第2節 基本層序	10
第3節 遺構と遺物	12
1 古墳時代の遺構と遺物	12
(1) 据立柱建物跡	12
(2) 土 坑	14
2 奈良・平安時代の遺構と遺物	15
道路跡	15
3 室町・安土桃山時代の遺構と遺物	18
井戸跡	18
4 江戸時代の遺構と遺物	19
土坑墓	19
5 その他の遺構と遺物	19
(1) 据立柱建物跡	19
(2) 土 坑	21
(3) 井戸跡	22
(4) 溝 跡	23
(5) ピット群	25
(6) 遺構外出土遺物	27
第4節 総 括	28
第4章 寺内遺跡	33
第1節 調査の概要	33
第2節 基本層序	33
第3節 遺構と遺物	34
1 奈良時代の遺構と遺物	34
堅穴建物跡	34
2 室町・安土桃山時代の遺構と遺物	43
堀 跡	43
3 その他の遺構と遺物	45
(1) 方形堅穴遺構	45

(2) 土 坑	45
(3) 井戸跡	48
(4) 道路跡	48
(5) 溝跡	49
(6) ピット群	50
(7) 遺構外出土遺物	51
第4節 総 括	52
第5章 大城遺跡	55
第1節 調査の概要	55
第2節 基本層序	55
第3節 遺構と遺物	56
1 平安時代の遺構と遺物	56
堅穴建物跡	56
2 江戸時代の遺構と遺物	58
土 坑	58
3 その他の遺構と遺物	59
(1) 挖立柱建物跡	59
(2) 土 坑	61
(3) 井戸跡	67
(4) 溝 跡	67
(5) 柱穴列	68
(6) ピット群	70
(7) 遺構外出土遺物	74
第4節 総 括	75
第6章 舟塚古墳群	78
第1節 調査の概要	78
第2節 基本層序	78
第3節 遺構と遺物	79
1 奈良・平安時代の遺構と遺物	79
火葬墓	79
2 その他の遺構と遺物	82
(1) 土 坑	82
(2) ピット群	85
(3) 遺構外出土遺物	89
第4節 総 括	90
付 章 自然科学分析	91
写真図版	PL1~16
抄 錄	
奥 付	

# 挿図目次

第1図	中道遺跡・寺内遺跡・大城遺跡・舟塚古墳群周辺 遺跡分布図	4	第42図	第1号道路跡実測図	49
第2図	遺跡位置図	7	第43図	その他の溝跡実測図	49
第3図	中道遺跡調査区設定図・A区遺構全体図	8	第44図	第1号ピット群実測図(1)	50
第4図	中道遺跡B・C区遺構全体図	9	第45図	第1号ピット群実測図(2)	51
第5図	中道遺跡基本土層図	11	第46図	遺構外出土遺物実測図	51
第6図	第1号掘立柱建物跡実測図	12	第47図	大城遺跡調査区設定図・遺構全体図	54
第7図	第3号掘立柱建物跡・出土遺物実測図	13	第48図	大城遺跡基本土層図	55
第8図	第4号土坑・出土遺物実測図	14	第49図	第2号豎穴建物跡実測図	56
第9図	第1号道路跡実測図(1)	15	第50図	第2号豎穴建物跡出土遺物実測図	57
第10図	第1号道路跡実測図(2)	16	第51図	第9号土坑・出土遺物実測	58
第11図	第1号道路跡出土遺物実測図	17	第52図	第79号土坑・出土遺物実測図	59
第12図	第3号井戸跡・出土遺物実測図	18	第53図	第1号掘立柱建物跡実測図	60
第13図	第1号土坑墓・出土遺物実測図	19	第54図	第2号掘立柱建物跡実測図	61
第14図	第2号掘立柱建物跡実測図	20	第55図	その他の土坑実測図(1)	61
第15図	第2・3・5～11号土坑実測図	21	第56図	その他の土坑実測図(2)	62
第16図	第1号井戸跡実測図	22	第57図	その他の土坑実測図(3)	63
第17図	第2号井戸跡実測図	23	第58図	その他の土坑実測図(4)	64
第18図	第1号溝跡実測図	23	第59図	その他の土坑実測図(5)	65
第19図	第2～6号溝跡実測図	24	第60図	第1号井戸跡実測図	67
第20図	第1号ピット群実測図	26	第61図	第1号溝跡実測図	67
第21図	第2号ピット群実測図	27	第62図	第2・3号溝跡実測図	68
第22図	遺構外出土遺物実測図(1)	27	第63図	第1号柱穴列実測図	68
第23図	遺構外出土遺物実測図(2)	28	第64図	第2号柱穴列実測図	69
第24図	遺構外出土遺物実測図(3)	30	第65図	第3号柱穴列実測図	69
第25図	寺内遺跡調査区設定図・遺構全体図	32	第66図	第4号柱穴列実測図	69
第26図	寺内遺跡基本土層図	33	第67図	第1号ピット群実測図	70
第27図	第1号豎穴建物跡実測図	34	第68図	第2号ピット群実測図	72
第28図	第1号豎穴建物跡出土遺物実測図	35	第69図	第3号ピット群実測図	73
第29図	第2号豎穴建物跡実測図	36	第70図	遺構外出土遺物実測図	74
第30図	第2号豎穴建物跡出土遺物実測図	37	第71図	舟塚古墳群調査区設定図・遺構全体図	77
第31図	第3号豎穴建物跡実測図	38	第72図	舟塚古墳群基本土層図	78
第32図	第3号豎穴建物跡出土遺物実測図	39	第73図	第1号火葬墓・出土遺物実測図	79
第33図	第4号豎穴建物跡・出土遺物実測図	40	第74図	第2号火葬墓・出土遺物実測図	80
第34図	第5号豎穴建物跡・出土遺物実測図	41	第75図	第3号火葬墓・出土遺物実測図	81
第35図	第6号豎穴建物跡実測図	42	第76図	その他の土坑実測図(1)	83
第36図	第6号豎穴建物跡出土遺物実測図	43	第77図	その他の土坑実測図(2)	84
第37図	第1号掘跡・出土遺物実測図	44	第78図	第1号ピット群実測図(1)	85
第38図	第1号方形豎穴遺構実測図	45	第79図	第1号ピット群実測図(2)	86
第39図	その他の土坑実測図(1)	46	第80図	第2号ピット群実測図	88
第40図	その他の土坑実測図(2)	47	第81図	第3号ピット群実測図	89
第41図	第1号井戸跡実測図	48	第82図	遺構外出土遺物実測図	89

## 挿 表 目 次

第1表 中道遺跡・寺内遺跡・大城遺跡・舟塚古墳群周辺 遺跡一覧	5	第25表 第1号ビット群ビット一覧	51
第2表 第3号掘立柱建物跡出土遺物一覧	14	第26表 道構外出土遺物一覧	52
第3表 古墳時代掘立柱建物跡一覧	14	第27表 第2号堅穴建物跡出土遺物一覧	58
第4表 第4号土坑出土遺物一覧	14	第28表 第9号土坑出土遺物一覧	58
第5表 第1号道路跡出土遺物一覧	17	第29表 第79号土坑出土遺物一覧	59
第6表 第3号井戸跡出土遺物一覧	18	第30表 江戸時代の土坑一覧	59
第7表 第1号土坑墓出土遺物一覧	19	第31表 その他の掘立柱建物跡一覧	61
第8表 その他の土坑一覧	22	第32表 その他の土坑出土遺物一覧	66
第9表 その他の井戸跡一覧	23	第33表 第1号溝跡出土遺物一覧	67
第10表 その他の溝跡一覧	25	第34表 その他の溝跡一覧	68
第11表 第1号ビット群ビット一覧	25	第35表 その他の柱穴列一覧	70
第12表 第2号ビット群ビット一覧	26	第36表 第1号ビット群ビット一覧	70
第13表 道構外出土遺物一覧	28	第37表 第2号ビット群ビット一覧	71
第14表 第1号堅穴建物跡出土遺物一覧	36	第38表 第3号ビット群ビット一覧	73
第15表 第2号堅穴建物跡出土遺物一覧	38	第39表 道構外出土遺物一覧	74
第16表 第3号堅穴建物跡出土遺物一覧	39	第40表 第1号火葬墓出土遺物一覧	79
第17表 第4号堅穴建物跡出土遺物一覧	41	第41表 第2号火葬墓出土遺物一覧	80
第18表 第5号堅穴建物跡出土遺物一覧	42	第42表 第3号火葬墓出土遺物一覧	81
第19表 第6号堅穴建物跡出土遺物一覧	42	第43表 奈良・平安時代土坑一覧	82
第20表 奈良時代堅穴建物跡一覧	43	第44表 その他の土坑出土遺物一覧	82
第21表 第1号掘跡出土遺物一覧	44	第45表 第1号ビット群ビット一覧	86
第22表 その他の土坑一覧(1)	45	第46表 第2号ビット群ビット一覧	88
第23表 その他の土坑一覧(2)	48	第47表 第3号ビット群ビット一覧	89
第24表 その他の溝跡一覧	50	第48表 道構外出土遺物一覧	89

## 写真図版目次

PL 1 中道・寺内・大城遺跡・舟塚古墳群遠景（南から） 中道遺跡全景（南東から）	PL 4 第1号井戸跡 第2号井戸路上層断面 第2号井戸跡 第6号土坑 第1号溝跡 第2～4・6号溝跡 第5号溝路上層断面 第5号溝跡
PL 2 A区全景（南から） B区全景（北から） C区全景（北から） 第1号掘立柱建物跡 第1号掘立柱建物跡柱材出土状況	PL 5 第3号掘立柱建物跡・第4号土坑・第1号道路跡 第3号井戸跡・第1号土坑墓・道構外出土遺物
PL 3 第1号道路跡 第1号道路跡遺物出土状況(1) 第1号道路跡遺物出土状況(2) 第1号道路跡掘方 第2号掘立柱建物跡 第3号井戸跡 第1号土坑墓遺物出土状況（人骨） 第1号土坑墓遺物出土状況（錢貨）	PL 6 寺内遺跡遠景（北東から） 寺内遺跡全景（南東から） PL 7 テストビット 土層断面 第1号堅穴建物跡遺物出土状況(1) 第1号堅穴建物跡遺物出土状況(2) 第1号堅穴建物跡 第2号堅穴建物跡遺物出土状況

	第2号竪穴建物跡	PL12 第2号竪穴建物跡遺物出土状況（1）
	第3号竪穴建物跡遺物出土状況（1）	第2号竪穴建物跡遺物出土状況（2）
	第3号竪穴建物跡遺物出土状況（2）	第2号竪穴建物跡
PL 8	第3号竪穴建物跡遺物出土状況（3）	第1号掘立柱建物跡
	第3号竪穴建物跡遺物出土状況（4）	第2号掘立柱建物跡
	第3号竪穴建物跡遺物出土状況	第9号土坑
	第3号竪穴建物跡	第79号土坑
	第4号竪穴建物跡遺物出土状況	第1号溝跡
	第4号竪穴建物跡	PL13 第2号竪穴建物跡
	第5号竪穴建物跡	第9・79号土坑・遺構外出土遺物
	第6号竪穴建物跡遺物出土状況（1）	PL14 舟塚古墳群遠景（北から）
PL 9	第6号竪穴建物跡遺物出土状況（2）	舟塚古墳群全景（南東から）
	第6号竪穴建物跡	PL15 第1号火葬墓土層断面・遺物出土状況（1）
	第1号掘跡土層断面（1）	第2号火葬墓遺物出土状況（2）
	第1号掘跡土層断面（2）	第1号火葬墓
	第1号方形竪穴道構	第2号火葬墓土層断面・遺物出土状況
	第5号土坑	第3号火葬墓遺物出土状況
	第62号土坑	第3号火葬墓・第3号ピット群P5
	第64号土坑	PL16 第1～3号火葬墓出土土器
PL10	第1・2・3・6号竪穴建物跡・第1号掘跡・遺構外出土遺物	
PL11	大城道路遠景（南から）	
	大城道路全景（南東から）	

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成29年5月12日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに主要地方道石岡城里線バイパス整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成29年6月7日に現地踏査を実施し、平成30年10月16・17日、平成31年1月15日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。令和31年1月29日（中道遺跡・舟塚古墳群）、平成31年11月7日（寺内遺跡）、平成30年11月7日、平成31年1月29日（大城遺跡）、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに事業地内に中道遺跡・寺内遺跡・大城遺跡・舟塚古墳群が所在することと、取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

平成31年2月8日（中道遺跡・寺内遺跡・大城遺跡）、令和2年2月7日（舟塚古墳群）、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知を提出した。令和31年2月14日（中道遺跡・寺内遺跡・大城遺跡）、令和2年2月21日（舟塚古墳群）、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、現状保存が困難であることから記録保存のための調査が必要であると決定し、工事着手前に調査を実施するように通知した。

平成31年2月19日（中道遺跡）、令和2年2月21日（寺内遺跡・大城遺跡・舟塚古墳群）、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに主要地方道石岡城里線バイパス整備事業に係る埋蔵文化財調査の実施について協議書を提出した。平成31年2月19日（中道遺跡）、令和2年2月25日（寺内遺跡・大城遺跡・舟塚古墳群）、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに以上の4遺跡について、調査の範囲及び面積などについて回答し、併せて調査機関として公益財団法人茨城県教育財團を紹介した。公益財団法人茨城県教育財團は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財調査事業について委託を受け、令和2年1月6日から3月31日（中道遺跡）まで、令和2年4月1日から7月31日（寺内遺跡・大城遺跡・舟塚古墳群）まで調査を実施した。

## 第2節 調査経過

中道遺跡の調査は、令和2年1月6日から3月31日までの3か月間、寺内遺跡、大城遺跡、舟塚古墳群の調査は令和2年4月1日から7月31日の4か月にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。

### 中道遺跡

#### 令和元年度

工程	期間	1月	2月	3月
調査準備 表土除去 遺構確認				
遺構調査				
遺物洗浄 注写真整理				
補足調査 撤収				

## 寺内遺跡

令和2年度

工程	期間	4月	5月	6月	7月
調査表 遺構確認	準備	■			
遺構調査		■	■		
遺物洗浄 写真整理		■	■		
補足調査 撤収			■		

## 大城遺跡

令和2年度

工程	期間	4月	5月	6月	7月
調査表 遺構確認	準備			■	
遺構調査				■	
遺物洗浄 写真整理				■	
補足調査 撤収				■	

## 舟塚古墳群

令和2年度

工程	期間	4月	5月	6月	7月
調査表 遺構確認	準備				■
遺構調査					■
遺物洗浄 写真整理					■
補足調査 撤収					■

## 第2章 位置と環境

### 第1節 位置と地形

中道遺跡は茨城県水戸市牛伏町 140 - 9 ほか、寺内遺跡は同市牛伏町 271 - 2 ほか、大城遺跡は同市牛伏町 266 - 8 ほか、舟塚古墳群は同市大足町 1327 - 4 ほかに所在している。

水戸市は、県のほぼ中央部に位置し、東は東茨城郡大洗町、西は笠間市、南は東茨城郡茨城町、北はひたちなか市、那珂市、東茨城郡城里町に接している。

水戸市の地形は、北部から東部に流れる那珂川とその支流の桜川支谷より構成される沖積層の低地、東茨城台地の北東部をなす水戸台地（上市台地・緑岡台地等）と呼ばれる洪積層の台地及び、八溝山地の中央部にあたる鶴足山塊の外縁部をなす第三紀の丘陵に分けられる<sup>1)</sup>。

遺跡の立地する東茨城台地は、約 13 万年頃の下末吉海進の際の古東京湾の浅海域が陸化して誕生した。基盤は、第三紀の水戸層、その上を第四紀の厚さ 10 m 以上の見和層と呼ばれる海成砂層、茨城粘土層と呼ばれる灰白色粘土層、鹿沼バシス・今市スコリア層などの火山灰質ローム層の順に堆積している<sup>2)</sup>。

当遺跡群は、水戸市の西部、桜川右岸の標高 38 ~ 54 m の台地上に立地し、西側の那珂川の支流である桜川に開析された樹枝状の台地上に位置している。調査前の現況は、宅地、山林、畠地、水田である。

### 第2節 歴史的環境

当遺跡群のある水戸市内原地区は、旧石器時代から江戸時代にかけての遺跡が所在している<sup>3)</sup>。ここでは、『茨城県遺跡図』に登録されている内原地区の主な遺跡を中心に概観する。

旧石器時代は、現在のところ 1 遺跡のみである。遺跡群の東側約 1 km の台地の縁辺部に所在する飯島向原遺跡<sup>4)</sup>では、昭和 48 年の水戸市教育委員会の調査で、尖頭器が出土している<sup>4)</sup>。

縄文時代になると、遺跡数が急激に増え、当該期の遺跡は北側の丘陵部から台地上と南部の沖積地に沿った台地縁辺部に立地しているが、当地域の調査例は少ない。飯島向原遺跡で中期後半の堅穴建物跡（加曾利 E Ⅲ式期）が 1 棟が確認されている<sup>5)</sup>。

弥生時代では、飯島向原遺跡で、中期の堅穴建物跡（女方・クロマタギ式期）が 3 棟、後期の堅穴建物跡（十王台式期）が 8 棟確認されている<sup>6)</sup>。ほかに、一戦塚遺跡（9）や加倉井富士山遺跡（16）などの包蔵地が台地上に点在している。

古墳時代になると、当遺跡群周辺には、多くの古墳が築造されている。北側には一戦塚古墳（10）、牛伏古墳群（7）、南側には、二所神社古墳（39）が存在し、舟塚古墳群（④）は台地の西端に位置している。

牛伏古墳群は、平成 7 年に史跡公園整備に伴う調査が旧内原町教育委員会によって行われた。調査の結果、前方後円墳 6 基、帆立貝式古墳 1 基、円墳 9 基からなり、5 世紀後半から 6 世紀後半にかけて南北 300 m、東西 200 m の狭い範囲に築造されていることが判明した<sup>7)</sup>。現在、保存整備され、くれふしの里古墳公園として市民の憩いの場となっている。舟塚古墳群には全長約 80 m、後円部径約 40 m で、埴輪を伴う舟塚古墳のほか、径 28 m で幅広いテラスを伴う二段築成の円墳である舟塚 2 号墳（鹿島塚）と、後円部幅約 25 m、前方部幅約 15 m の前方後円墳と推定される舟塚 3 号墳が確認できる<sup>8)</sup>。集落遺跡では、当遺跡群から東約 1 km の松原遺跡（26）からは、前期の堅穴建物跡 2 棟、後期の堅穴建物跡 5 棟を確認している<sup>9)</sup>。（ほかに、数多くの古墳や包蔵地が台地上に点在している。）

奈良・平安時代になると、当遺跡群を含む地域は、那珂郡茨城郷に属していた。平安時代中期に学者源順によって編さんされた『倭名類聚抄』によると、茨城郷は現在の笠間市友部地区の小原、市原、水戸市内原地区的三湯、内原、中原、牛伏、小林、大足、赤尾、鯉淵、五平等の範囲に及んだとされる<sup>10)</sup>。また、江戸後期に国学者中山信名によって編さんされた『新編常陸国誌』によると、「茨城郷は、かつて茨城郡に属し、郡家が置かれた」としている<sup>11)</sup>。



第1図 中道遺跡・寺内遺跡・大城遺跡・舟塚古墳群周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000分の1「笠間」「水戸」）

第1表 中道遺跡・寺内遺跡・大城遺跡・舟塚古墳群周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代						
		旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・桃山	江戸	旧石器	繩文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・桃山	江戸
①	中道遺跡			○	○	○	○	○	49	東ノ前遺跡	○	○			○
②	寺内遺跡		○	○		○	○		50	内田遺跡	○		○		
③	大城遺跡		○	○	○	○	○	○	51	論田塚古墳群			○		
④	舟塚古墳群		○		○	○			52	山王遺跡	○	○	○		
5	長鷲遺跡				○	○	○		53	赤尾閑館跡				○	
6	大足城跡					○			54	赤尾閑東遺跡	○		○		
7	牛伏古墳群			○					55	赤尾閑塚群					○
8	牛伏塚群					○			56	赤尾閑西遺跡	○	○	○		
9	一戦塚遺跡	○	○	○	○	○			57	江川南遺跡	○		○		
10	一戦塚古墳			○					58	新田山遺跡	○		○		
11	三野輪古墳群			○					59	江川遺跡	○		○		
12	田島権現台遺跡			○	○				60	江川十三塚群					○
13	田島古墳群			○					61	道下遺跡	○	○	○		
14	立野遺跡			○					62	館遺跡					○
15	加倉井古墳群	○	○	○	○				63	江川館跡					○
16	加倉井富士山遺跡	○	○	○	○				64	トソ遺跡	○	○	○		
17	榎巷遺跡	○	○	○	○				65	下坪遺跡					
18	楸巷遺跡	○	○	○					66	内原南遺跡	○	○	○		
19	三本松古墳群			○					67	スワ遺跡	○		○		
20	田島城跡					○			68	竹ノ内遺跡	○	○	○		
21	仲坪遺跡			○	○				69	小林館跡					○
22	妙徳寺付近古墳群			○					70	竜閑遺跡	○		○		
23	加倉井館跡					○			71	西川遺跡	○	○	○		
24	加倉井原遺跡			○					72	舞台遺跡	○		○		
25	松山古墳群				○				73	神明戸遺跡					○
26	松原遺跡	○	○	○	○				74	向原遺跡					○
27	一本松遺跡	○	○	○					75	速台遺跡	○	○	○		
28	峯山古墳			○					76	中原館跡					○
29	毛勝谷原遺跡		○	○					77	八幡神社周辺古墳群		○	○		
30	毛勝谷原古墳群			○					78	鷹ノ巣遺跡	○		○		
31	向井原遺跡	○	○	○	○				79	鷹ノ巣古墳					○
32	稻荷塚古墳群			○					80	鷹ノ巣南古墳					○
33	松山東遺跡			○	○				81	有賀宿遺跡	○	○	○		
34	南仲坪遺跡			○	○				82	速台古墳					○
35	大塚新地遺跡			○	○				83	塚原城跡					○
36	金谷遺跡			○	○				84	有賀台古墳群					○
37	根崎遺跡			○	○				85	有賀金山遺跡					○○
38	合ノ田遺跡		○	○	○				86	駒來遺跡					○
39	二所神社古墳				○				87	有賀台塚群					○
40	沖前遺跡	○			○				88	駒来台古墳群			○		
41	仙光内遺跡			○	○				89	打越窯跡群			○		
42	飯島町古墳群			○					90	四又入窯跡群			○		
43	飯島向原遺跡	○	○	○	○				91	細田窯跡			○		
44	後原北遺跡					○			92	太鼓塚遺跡	○	○	○		
45	後原西遺跡	○							93	中久保窯跡			○		
46	坊ノ内遺跡						○		94	高取山窯跡群			○		
47	蓮沼遺跡	○	○	○	○				95	郷中遺跡			○		
48	原ノ内遺跡	○	○	○	○				96	坂下遺跡			○		

那珂郡は『倭名類聚抄』によると 22郷あり、常陸の他の郡と比べると、郷の最も多い郡であったと記載されている。当該期の遺跡は、北部の丘陵部に立地する木葉下窯跡群をはじめ、打越窯跡群(89)、四又窯跡群(90)、細田窯跡群(91)、高取山窯跡群(94)などの生産遺跡が集中している。また、那珂川の支流である桜川流域の台地上に當まれた長崎遺跡(5)、一戦塚遺跡(9)、田島権現台遺跡(12)、横巷遺跡(17)などの集落遺跡を結ぶ現況の道が、丘陵部の生産遺跡まで続いており、当時の陸路の存在を示している。旧内原町の調査によると、中道遺跡(①)の南側から、8世紀中葉の堅穴建物跡1棟などが確認されている<sup>12)</sup>。さらに、当遺跡群と谷を挟んで西側の遠台遺跡(75)では、稚兒持を待ち、軒先が二段構成の特徴を持つ8世紀前半の瓦塔片が採取されている<sup>13)</sup>。

また、遠台遺跡に隣接する有賀宿遺跡(81)では、宝冠如来坐像と呼ばれる金銅仏をはじめ、平安時代の須恵器片、円面鏡片、瓦片が採取されている。黒澤彰哉氏は、斜格子叩きによる平瓦の存在から古渡里庵寺創建期と同種のものとし、8世紀第2四半期に位置付けている。また、建物跡などは明らかでないが、金銅仏と平瓦の存在から、小規模な仏教に係わる施設があったと述べている<sup>14)</sup>。

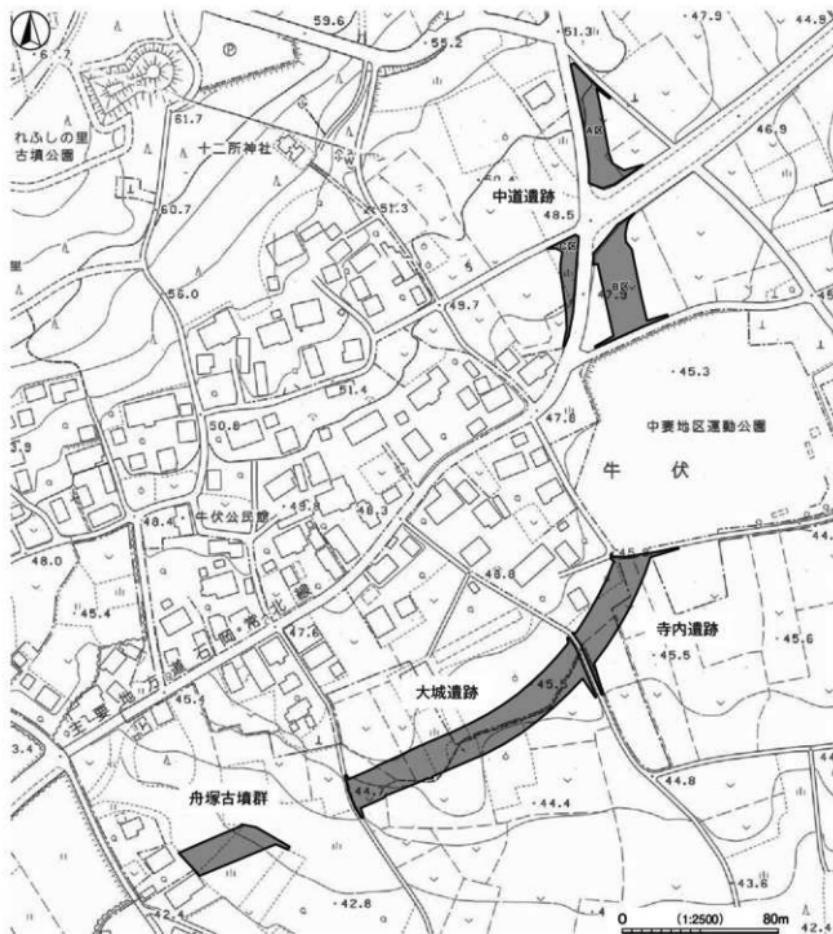
鎌倉～桃山時代になると、大足城跡(6)、田島城跡(20)、加倉井館跡(23)、江川館跡(63)、小林館跡(69)、中原館跡(76)、塙原城跡(83)などの城館跡が、河川沿いや交通路の要衝となる拠点に点在している。また、当地域は江戸氏の支配下にあり<sup>15)</sup>、寺内遺跡(②)や大城遺跡(③)と連続する大足城跡は、江戸氏の初期からの家臣であった外岡伯耆守の居城といわれている。城内と考えられる地区では、低い土塁と幅5mほどの堀の一部が確認されている<sup>16)</sup>。旧大足村に建立されていた稻荷社の永禄9年(1566)年の棟札には、「大檀那当城主外岡伯耆守平朝臣広重」の名が残っている。寺内遺跡や大城遺跡は、その城内に含まれると考えられる。また、大足城跡から谷津を挟んで東側約1.2kmの台地上の加倉井館跡は、外岡氏と同様の有力家臣であった加倉井氏の館といわれている。館跡は東西220m、南北110mの不規則な長方形の形状を呈しており、館の東限には南に高さ2mほどの土塁と北に高さ12～22mの二重の土塁と堀が現存している。特に北限の堀は、旧状に近い形態と考えられており、二重の土塁形式から築造時期は、天文年間(1532～1555年)から天正期(1573～1592年)の戦国時代後期と推測されている<sup>17)</sup>。また、館跡の曲輪内には、加倉井氏の外護によって創建された鷲見山高在妙徳寺(日蓮宗)が現存している。天正18(1590)年の豊臣秀吉による小田原合戦への参戦を怠ったことにより、江戸氏の立場は急変する。同年、豊臣政権の大名となった佐竹義宣は秀吉から常陸一国を安堵され、江戸氏の本拠地である水戸城の明け渡しを要求したが、これを江戸氏が拒否し、戦となり落城した。この後、水戸城主江戸重通は男の結城晴朝を頼って結城に落ち伸びた。有賀金山遺跡(85)は、天正期に豊臣秀吉の命を受け、佐竹義宣が開発した金鉱山跡である<sup>18)</sup>。

江戸時代になると、関ヶ原の役で豊臣方に付いた佐竹氏は慶長7年(1602)年5月、徳川家康に秋田への転封を命じられた。当遺跡群の周辺は水戸藩領となった。江戸時代の遺跡は、牛伏塚群(8)、赤尾閑塚群(55)、江川十三塚群(60)など、交通や信仰に係わる塚を中心とし、台地の縁辺部に点在している。

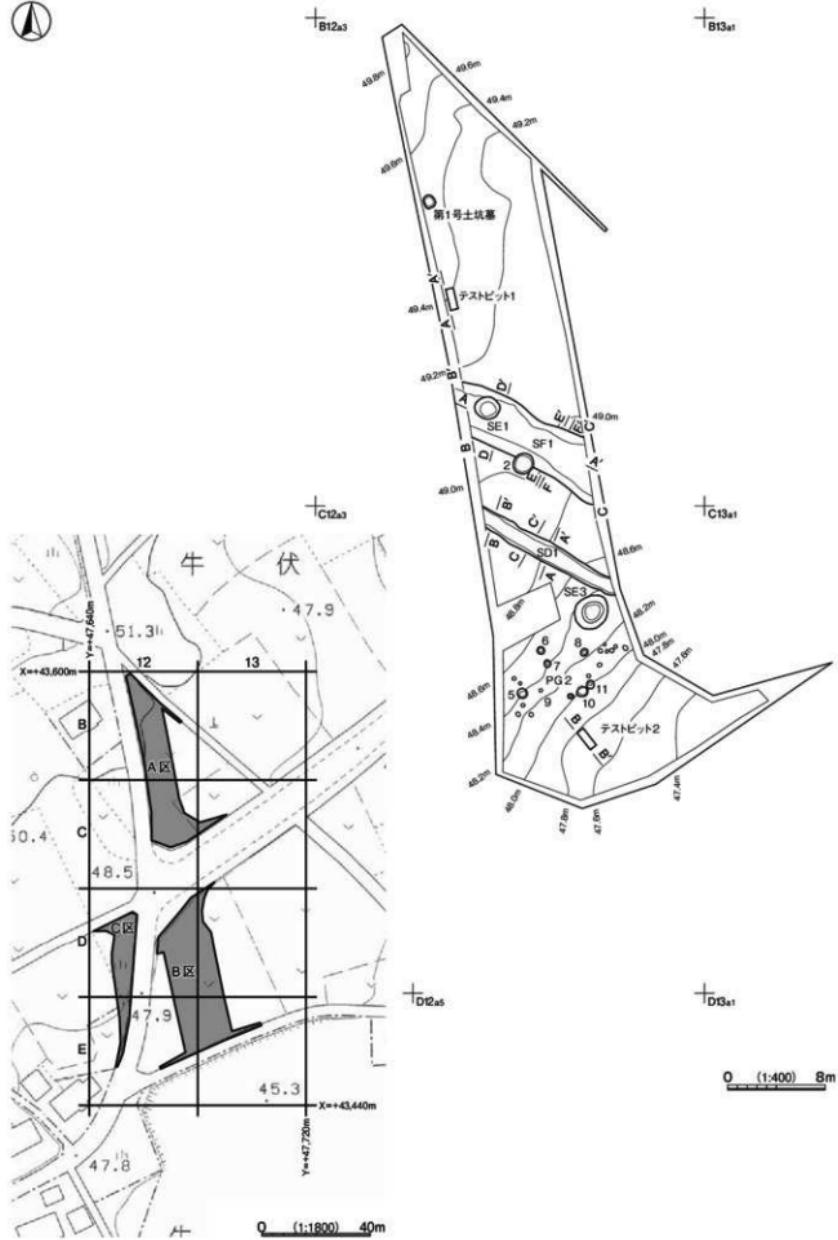
## 註

- 1) 水戸市史編さん委員会「水戸市史」上巻 水戸市 1963年10月
- 2) 日本の地質「関東地方」編集委員会「日本の地質3 関東地方」共立出版 1986年10月
- 3) 茨城県教育文化課編「茨城県遺跡地図」茨城県教育委員会 2001年3月
- 4) 茨城県水戸市教育委員会「水戸市埋蔵文化財分布調査報告書」平成10年版 1999年3月
- 5) a 伊藤重敏、「向原遺跡発掘報告書」水戸市教育委員会 1974年3月  
b 水戸市教育委員会「水戸市埋蔵文化財分布調査報告書」昭和58年度版 1984年3月
- 6) 5)と同じ
- 7) 内原町教育委員会「牛伏古墳群の調査」1999年9月
- 8) 7)と同じ
- 9) 石井 勝、「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」茨城県教育財团文化財調査報告書 1981年3月
- 10) 内原町史編さん委員会「内原町史」通史編 内原町 1996年3月
- 11) 同じ
- 12) 能島清光・鰐淵和彦「横巷遺跡・中道遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)」内原町横巷遺跡発掘調査会 2003年2月
- 13) 市毛美津子「遠台遺跡採集の瓦について」「内原町町史研究」第5号 内原町編さん委員会 1996年3月
- 14) 黒澤彰哉「茨城県有賀宿遺跡出土の宝冠如来坐像について」「茨城考古学会誌」第7号 茨城県考古学会 1995年5月

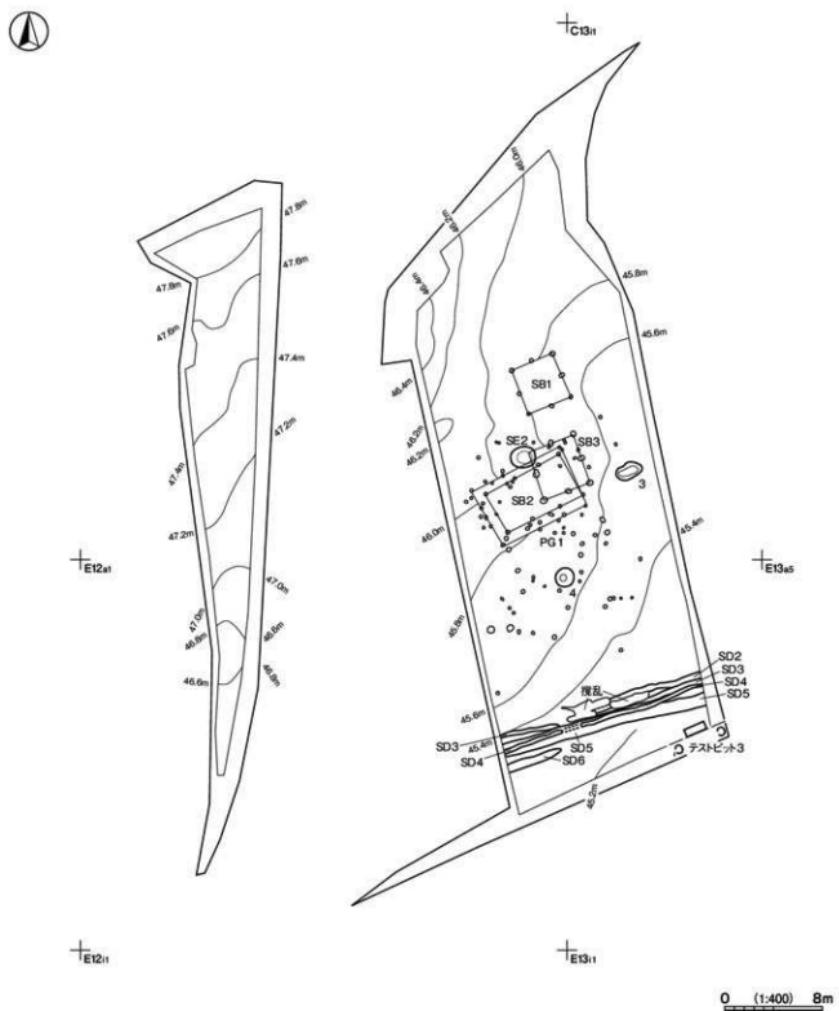
- 15) 1)と同じ
- 16) a 伊東多三郎「水戸市の付近の城と館」水戸市史上巻 水戸市 1963年10月  
b 何久津 久「加倉井館」日本城郭体系 4 茨城・栃木・群馬 新人物往来社 1980年11月
- 17) 10)と同じ
- 18) 1)と同じ



第2図 遺跡位置図



第3図 中道遺跡調査区設定図・A区遺構全体図



第4図 中道遺跡B・C区遺構全体図

## 第3章 中道遺跡

### 第1節 調査の概要

中道遺跡は、水戸市の北西部に位置し、桜川右岸の標高約38～54mの台地上に立地している。調査面積は2,004m<sup>2</sup>で、調査前の現況は、宅地、山林、畑地、水田である。

調査の結果、掘立柱建物跡3棟（古墳時代2、時期不明1）、井戸跡3基（室町・安土桃山時代1、時期不明2）、道路跡1条（奈良・平安時代）、土坑墓1基（江戸時代）、溝跡6条（時期不明）、土坑10基（古墳時代1、時期不明9）、ピット群2か所（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に6箱出土している。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（広口壺）、土師器（壺・高壺・壺・壺）、須恵器（壺・高台付壺・蓋・盤・長頸瓶・壺）、磁器（青磁碗）、土製品（埴輪）、石器（砥石・石鉢）、銭貨（寛永通寶）などである。

### 第2節 基本層序

調査区中央部の台地上の平坦部（C12a4区）、斜面部（C12e8区）、低地部（E13d4区）の3か所にテストピットを設定し、基本土層（第5図）の観察を行った。

第1層は黒褐色や灰褐色を呈する表土と擾乱層である。粘性・締まりは普通で、層厚は14～118cmである。

第2層はにぶい褐色を呈する旧耕作土である。ローム粒子を多量に含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は4～12cmである。

第3層は黒褐色土を呈する埋没谷の覆土である。にぶい褐色土ブロックを少量含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は8～12cmである。

第4層は極暗褐色を呈する埋没谷の覆土である。ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量に含み、粘性・締まりとともに普通で、層厚は10～22cmである。

第5層は黑暗褐色を呈する埋没谷の覆土である。褐灰色粘土ブロックを少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量に含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は8～22cmである。

第6層は極暗褐色を呈する埋没谷の覆土である。ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を微量に含み、粘性・締まりとともに普通である。層厚は2～24cmである。

第7層は黒色を呈する埋没谷の覆土である。ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・白色粒子を微量に含み、粘性・締まりとともに普通で、層厚は10～22cmである。

第8層はにぶい橙色を呈するローム層と鹿沼軽石層の漸移層である。鹿沼軽石粒・赤色粒子を微量含む、粘性は普通で、締まりが強い。層厚は4～32cmである。

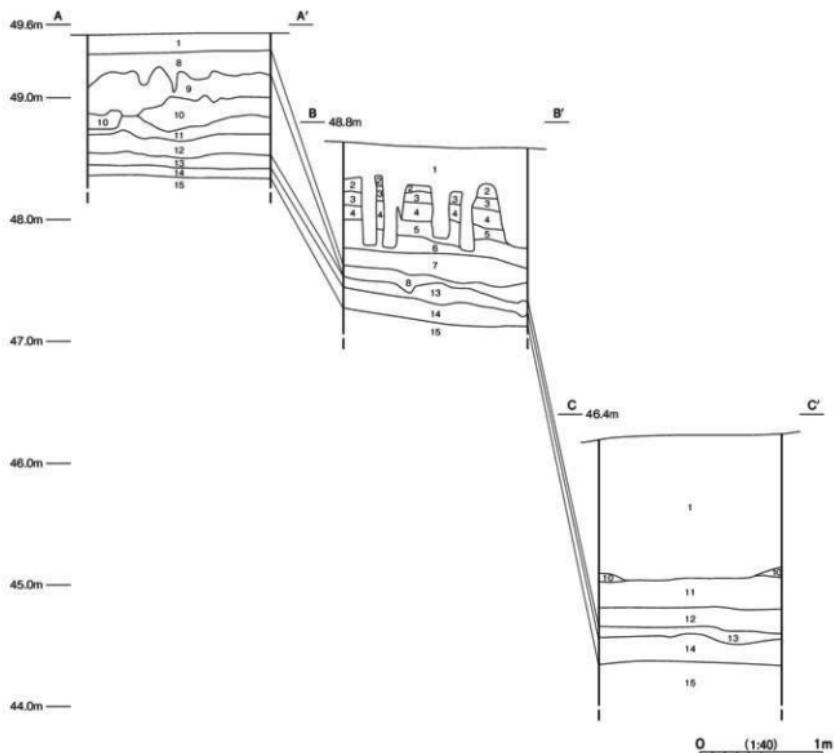
第9層は浅黄橙色を呈する鹿沼軽石層である。粘性弱く、締まりは極めて強い。層厚は4～36cmである。

第10層は、にぶい褐色を呈するハードローム層である。鹿沼軽石粒を少量、赤色粒子を微量含み、粘性・締まりとともに強い。層厚は8～28cmである。

第11層は黄橙色を呈するハードローム層で、酸化鉄少量、鹿沼軽石粒微量に含み、粘性・締まりともに強い。層厚は6～28cmである。

第12層は橙色を呈するハードローム層で、鹿沼軽石微量に含み、粘性・締まりともに強い。層厚は14～18cmである。

第13層は、にぶい橙色を呈するハードローム層である。鉄分が沈殿、鹿沼軽石粒・赤色粒子を微量含み、粘性・締まりともに強い。層厚は6～18cmである。



第5図 中道遺跡基本土層図（遺構全体図参照）

第14層は、浅黄橙色を呈するローム層と粘土層の漸移層で、酸化鉄少量、鹿沼軽石粒を微量含み、粘性・締まりともに強い。層厚は8~23cmである。

第15層は、灰白色を呈する茨城粘土層と考えられる。粘性・締まりとともに非常に強い。層厚は不明であるが、10~30cmまで確認した。

斜面部では、台地平坦部で確認した鹿沼軽石層の第9層とハードローム層の第10~12層を確認することができなかった。これは、斜面部の第13層上面が不整で凹凸が著しいことから、自然營力によって流失したものと考えられる。また、斜面部で確認した第8層は、台地平坦部における第8・9層の再堆積の可能性がある。

低地部では表土層が擾乱層により、第11層上面まで削平されている。

遺構は、台地平坦部と斜面部では第8層の上面、低地部では第10・11層上面で確認した。

### 第3節 遺構と遺物

## 1 古墳時代の遺構と遺物

掘立柱建物跡2棟、土坑1基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

#### (1) 据立柱建物跡

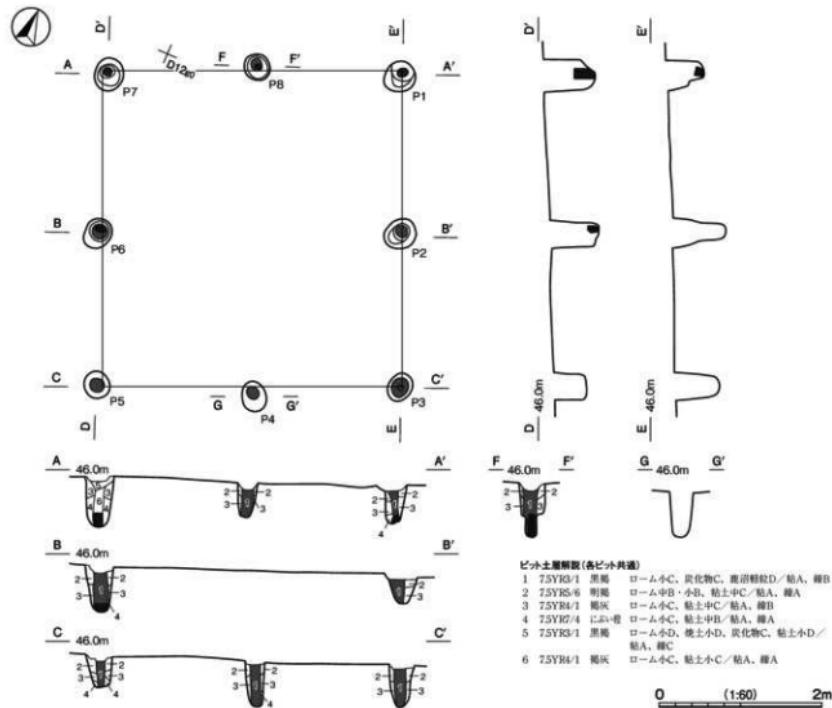
### 第1号掘立柱建物跡(第6図 第3表 PL 2)

**位置** 調査区南東部のD12g0区、標高46 mほどの台地平坦部に位置している。

**規模と構造** 術行2間、梁行2間の側柱建物跡で、術行方向N-24°-Wの南北棟である。規模は、術行385m、梁行3.65mで、面積は14.05m<sup>2</sup>である。柱間寸法は、東術行が北妻から1.95m、1.90m、西術行が北妻から1.95m、1.90m、南梁行が西妻から1.90m、1.90m、北梁行が西妻から1.90m、1.90mで、等間隔に配置され、柱筋は描っている。

**柱穴** 8か所。平面形は、円形や楕円形で、長径 35 ~ 45cm、短径 30 ~ 35cm である。深さ 34 ~ 65cm で、掘方の断面形は U 字状である。第 1 層は柱痕跡、第 2 ~ 4 層は掘方への埋土である。また、第 5・6 層は柱抜き取り後の流入土である。

**遺物出土状況** 混入した土師器片1点(甕)が出土している。また、P 1・P 6~P 8には柱根が遺存していた。柱根を探取し、自然科学分析での結果、樹種はモミ属マツ科と判明した(付章 自然科学分析参照)。



第6図 第1号掘立柱建物跡実測図

**所見** 本跡南側に隣接する第3号掘立柱建物跡と遺構の規模、軸や構造が似ており、間連が窺える。時期は、混入した遺物しか出土していないため、詳細は不明であるが、第3号掘立柱建物跡と同じ古墳時代後期で、性格は、形状から倉庫などと考えられる。

### 第3号掘立柱建物跡 (第7図 第2・3表 PL 2・5)

**位置** 調査区分東部のD120区、標高46mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 北西隅の柱穴が第2号井戸に掘り込まれている。第2号掘立柱建物跡との関係は柱穴同士の重複がないため、不明である。

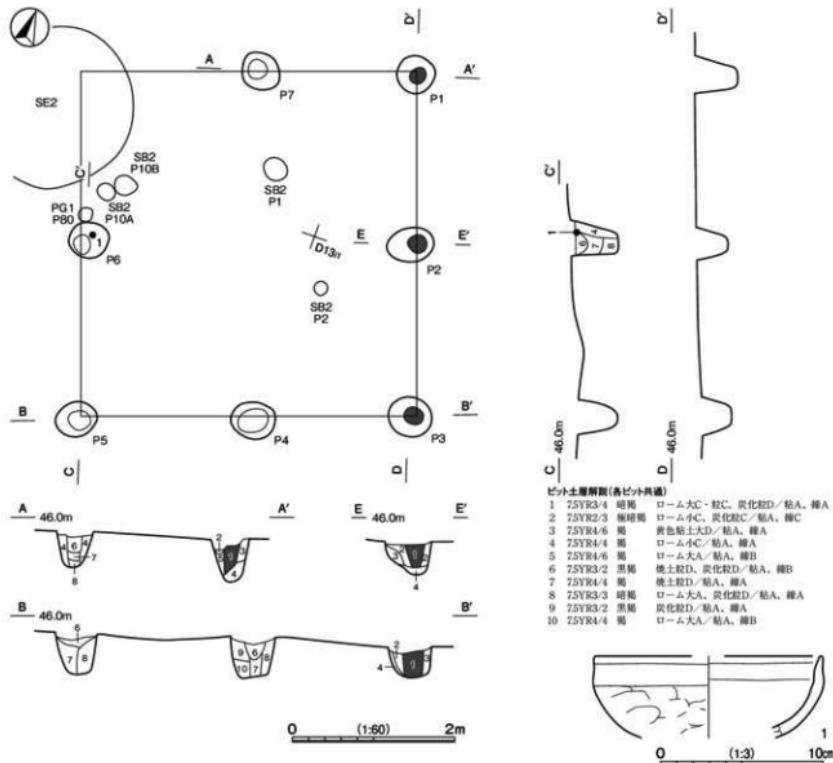
**規模と構造** 衍行2間、梁行2間の側柱建物跡で、衍行方向N-20°Wの南北棟である。規模は、衍行4.20m、梁行4.15mで、面積は約17.43m<sup>2</sup>である。柱間寸法は東衍行が北妻から2.1m、2.1m、西衍行が北妻から推定2.1m、2.1m、南梁行が西妻から2.1m、2.1m、北梁行が西妻から2.1m、2.0mで、ほぼ等間隔に配置され、柱筋は描っている。

**柱穴** 7か所。平面形は円形や楕円形で、長径54~58cm、短径45~48cmである。深さ35~60cmで、断面形はU字状や逆台形状である。第1層は柱痕跡、第2~5層は掘方への埋土である。第6~10層は柱抜き取り後の埋土である。

**遺物出土状況** 土師器片19点(环1・壺18)が出土している。ほかに、混入した須恵器片1点(壺)が出土している。

1はP6の柱抜き取り後の埋土から出土している。出土した壺はいずれも縞片のため図示できなかった。

**所見** 時期は、出土土器から6世紀前葉で、性格は、形状から倉庫などと考えられる。



第7図 第3号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第2表 第3号掘立柱建物跡出土遺物一覧（第7図）

番号	種別	器種	口径	厚さ	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	(13.8)	6.0	-	長石・石英・雲母・赤色粒子・細繩	橙	普通	口縁部外側横径のナデ 内面へラナデ 体部外側へラ削り後ナデ 内面ナデ	P6	30% PL 5

第3表 古墳時代掘立柱建物跡一覧（第6・7図）

番号	位置	柱行方向	柱間数		規 模		柱間寸法 (軒妻 間)	柱穴 (m)	柱穴寸法 (m)	柱 穴	主な出土遺物	時 期	備 考	
			軒妻	間	幅 × 奥 (m)	幅 (m)								
1	D12g0	N - 24° - W	2	2	3.85 × 3.65	14.05	1.90 ~ 1.95	1.90	8	円形・馬蹄形	34 ~ 65	土師器	6世紀代	
3	D12o	N - 20° - W	2	2	4.20 × 4.15	17.03	2.1	2.00 ~ 2.10	7	馬蹄形	35 ~ 60	土師器 頭飾	6世紀前葉	

## (2) 土坑

## 第4号土坑（第8図 第4表 PL 2・5）

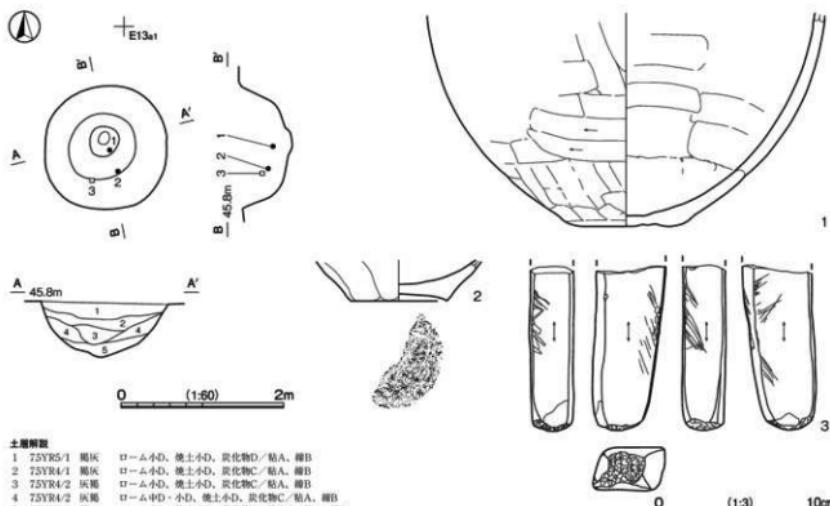
位置 調査B区南部のE12a0区、標高45.6mほどの緩斜面部に位置している。

規模と形状 径1.54mの円形である。深さ65cmで、壁は外傾している。底面は凸凹がある。

覆土 5層に分層できる。ロームブロックと焼土ブロックを含んでいることや、不規則な堆積していることから、人為堆積である。

遺物出土状況 土師器片66点（甕）、石器1点（砥石）が出土している。1～3は覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第8図 第4号土坑・出土遺物実測図

第4表 第4号土坑出土遺物一覧（第8図）

番号	種別	器種	口径	厚さ	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	甕	-	(13.1)	5.6	長石・石英・雲母・細繩	橙	普通	外周部のヘタ削り残骸のヘタ削り 内面横筋のヘタナデ	覆土中層	30% PL 5
2	土師器	甕	-	(2.5)	6.0	長石・石英・赤色粒子・細繩	明赤	普通	外周部削によるナデ 内面ヘタナデ	覆土中層	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重 量	材 質	特 徴	出 土 位 置	備 考
3	砥石	(10.1)	(4.3)	(2.7)	(212.8)	砂岩	片面欠損 四面砥 斜位の椎痕 椎面2面先の傷痕 先端敲打痕	覆土第3層	磨石兼用

## 2 奈良・平安時代の遺構と遺物

道路跡1条を確認した。調査の結果、2期にわたる構築面が確認できた。古い段階のものから第1期面とした。また、第1期面の下からも部分的な硬面を確認したが、短期間にわたる道路の補修と判断し、第1期面に含めた。以下、遺構と遺物について記述する。

### 道路跡

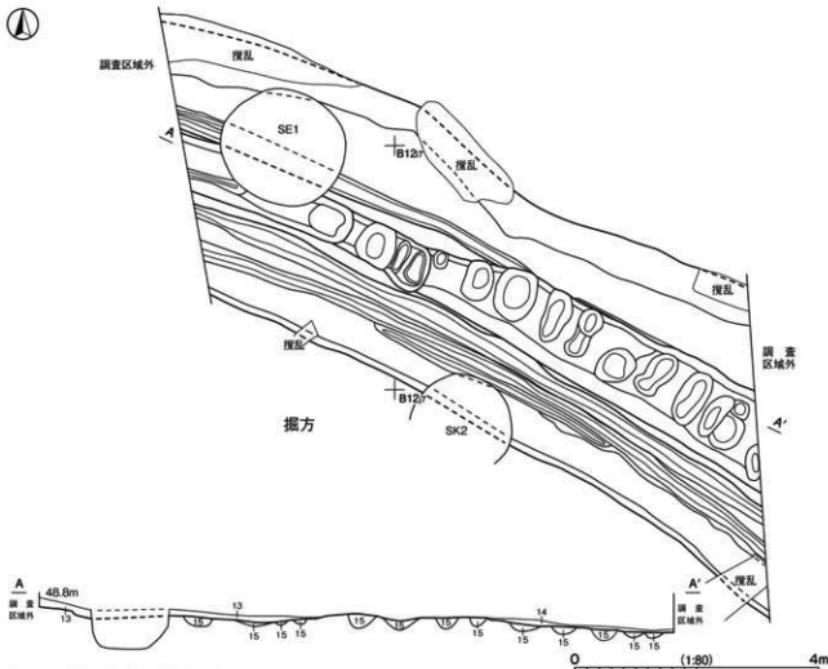
#### 第1号道路跡 (第9・10・11図 第5表 PL 3・5)

**位置** 調査A区中央部のC12a4区、標高48~49mほどの緩斜面部に位置している。

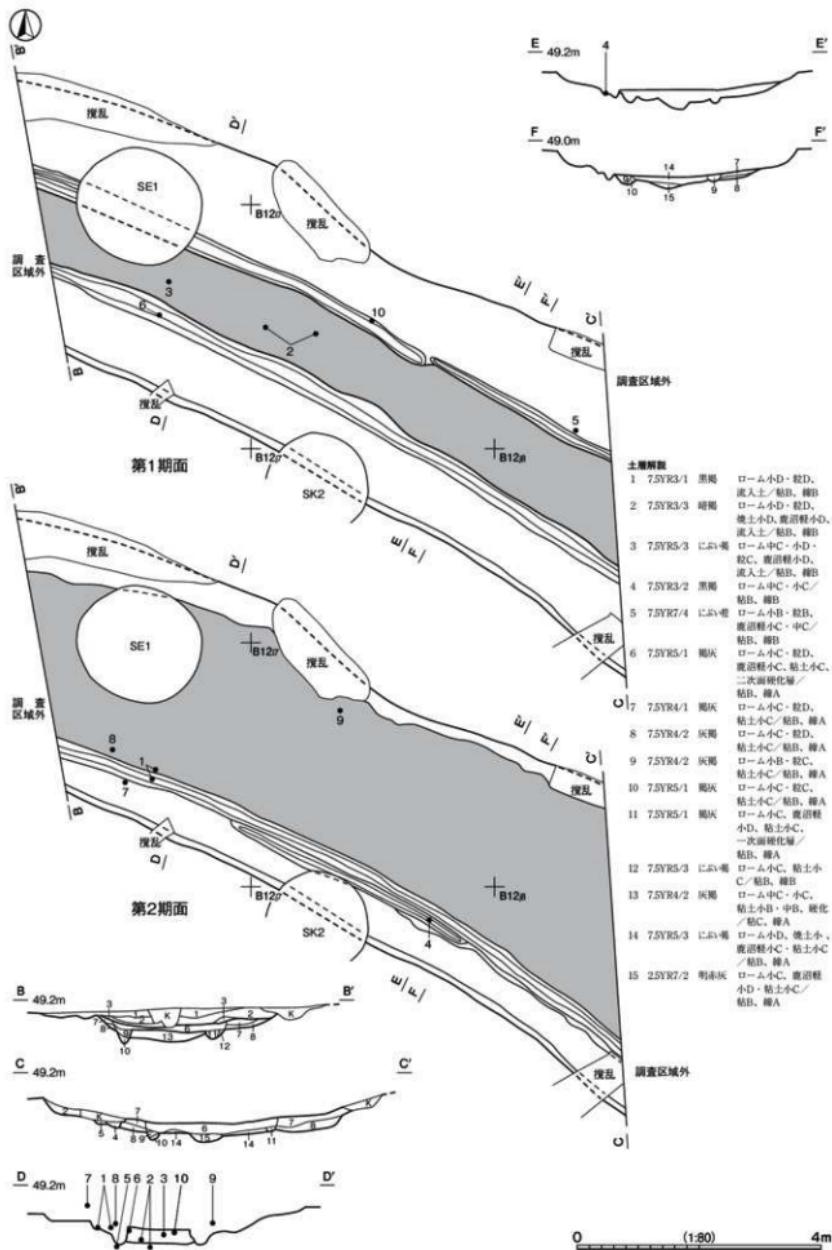
**重複関係** 第1号井戸、第2号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 確認できた範囲で切土によりハードローム層まで掘り込み、断面形は浅いU字状である。東西両側が調査区域外のため、確認できた長さは10.08m、第1期面の幅は0.98~1.30mで、平均1.14mである。第2期面の幅は210~290m、平均250mで、約1.90m拡張している。第1期面はほぼ直線状に延びているが、第2期面は南側へ緩やかに弯曲している。路面はほぼ平坦で、北西側から南東側に向かって緩やかに傾斜している。

**覆土・構築土** 第1~3層は第2期面の覆土で、含有物が少なくレンズ状に堆積していることから、自然堆積である。第4~5層は第2期面の側溝覆土である。ロームブロックが含まれていることから人為堆積で、側溝覆土上面が一部硬化していることから、側溝を埋め戻し、50cmほど拡張したと考えられる。第6~8層は第2期面の構築土で、層厚は6~12cmで締まりが強く硬い。第11~12層は第1期面側溝の覆土で、ロームブロックを含んでいることから、人為堆積である。第13~14層は第1期面の構築土で、層厚は8~18cmで締まりが強く硬い。それぞれ上面が路面である。また、第15層は波板状凹凸面の構築土である。確認できた凹みは17か所で、道路の方向とほぼ直交する長楕円形で、長径24~94cm、短径が16~58cm、深さ17cmほどである。10~35cmの間隔で掘り込まれている。



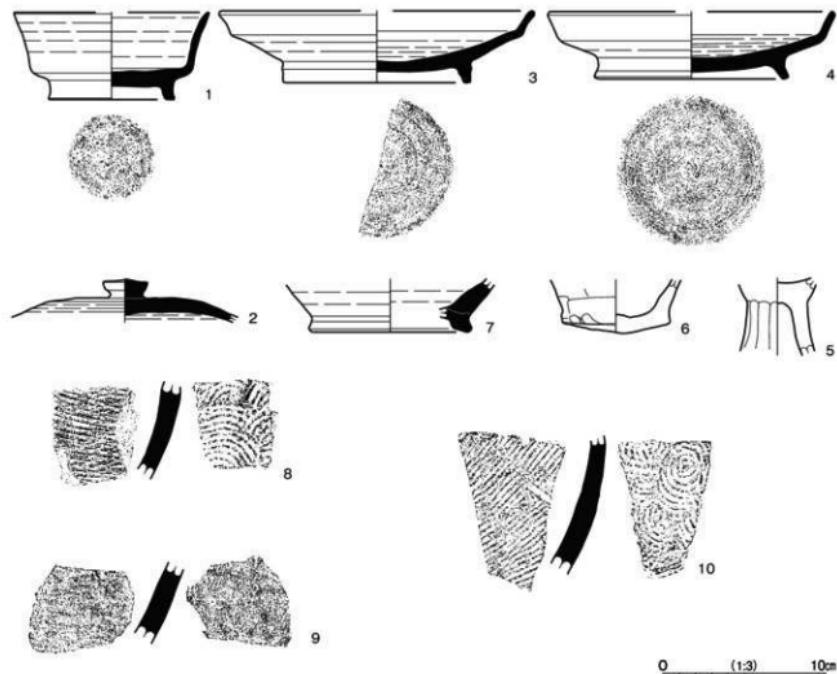
第9図 第1号道路跡実測図(1)



第10図 第1号道路跡実測図(2)

**遺物出土状況** 土師器片 210 点（环 14・高坏 4・鉢 6・甕 185・手捏土器 1）、須恵器片 719 点（环 155・高台付杯 63・蓋 69・皿 1・盤 6・高坏 1・鉢 1・甕 11・瓶 2・壺 410）が出土している。1・4 は南部の第 2 期面側溝の覆土中から、7～9 は第 2 期面の構築土中から、5・6・10 は第 1 期面側溝の覆土中から、2・3 は第 1 期面の構築土中からそれぞれ出土している。ほかに、混入した古墳時代の土師器片 6 点（甕 1・高坏 5）、須恵器片 2 点（長頸瓶・甕）、埴輪片 1 点（円筒埴輪）が出土している。

**所見** 構築の時期は、出土土器から第 1 期面が 8 世紀後葉、第 2 期面が 9 世紀前葉と考えられる。



第 11 図 第 1 号道路跡出土遺物実測図

第 5 表 第 1 号道路跡出土遺物一覧（第 11 図）

番号	種別	器種	口径	盤高	底径	胎	色調	施成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	高台付杯	[11.7]	5.4	7.1	長石・石英・黑色粒子・白色針状結晶物	灰	普通	底部回転へラ削り ヘラ記分判明不	第 2 期面 側溝覆土 PL. 5	60% 木葉下層 PL. 5
2	須恵器	蓋	-	[2.6]	-	長石・石英・白色 針状結晶物・繊維	灰白	普通	大井部回転へラ削り 捕み宝珠形	第 1 期面 構築土 PL. 5	40% 木葉下層 PL. 5
3	須恵器	甕	[19.0]	4.4	[11.4]	長石・石英・繊維	灰	普通	底部回転へラ削り	第 1 期面 側溝覆土 PL. 5	30% 木葉下層 PL. 5
4	須恵器	甕	[17.3]	4.2	11.4	長石・石英	灰	普通	底部回転へラ削り	第 2 期面 側溝覆土 PL. 5	60% 木葉下層 PL. 5
5	土師器	高坏	-	[4.7]	-	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	脚部外側へラ削り 内面ヘラナデ	第 1 期面 側溝覆土 PL. 5	10% 木葉下層 PL. 5
6	土師器	手捏土器	-	(3.3)	6.6	長石・石英・雲母 に赤褐色斑状物	普通	外側へラ削り後横証のヘラナデ	内面横位のヘラナデ	第 1 期面 側溝覆土 PL. 5	5% 木葉下層 PL. 5
7	須恵器	長頸瓶	-	(3.3)	[9.8]	長石・石英・黑色粒子・白色針状結晶物	褐灰	普通	高台貼付	第 1 期面 側溝覆土 PL. 5	5% 木葉下層 PL. 5
8	須恵器	甕	-	(5.8)	-	長石・石英・黑色粒子・白色針状結晶物	灰	普通	外側横位の平行叩き 内面同心円状の当て具痕	第 2 期面 側溝覆土 PL. 5	5% 木葉下層 PL. 5
9	須恵器	甕	-	(5.1)	-	長石・石英・黑色粒子・白色針状結晶物	褐灰	普通	外側横位の平行叩き 内面同心円状の当て具痕	第 2 期面 側溝覆土 PL. 5	5% 木葉下層 PL. 5
10	須恵器	甕	-	(8.7)	-	長石・石英・黑色粒子・白色針状結晶物	灰	普通	外側横位の平行叩き 内面同心円状の当て具痕	第 1 期面 側溝覆土 PL. 5	5% 木葉下層 PL. 5

### 3 室町・安土桃山時代の遺構と遺物

井戸跡 1 基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

#### 井戸跡

##### 第3号井戸跡 (第12図 第6表 PL 3・5)

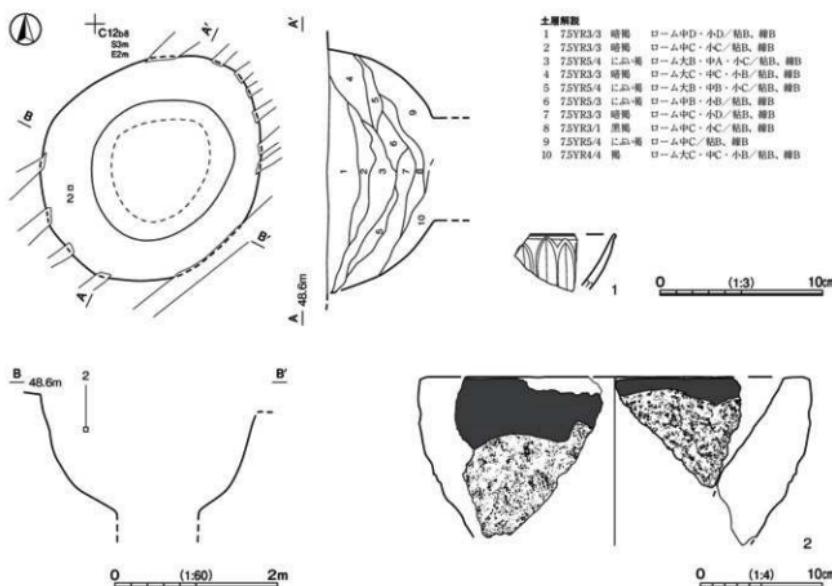
**位置** 調査 A 区南部の C12c8 区、標高 48 m ほどの緩斜面部に位置している。

**規模と形状** 長径 294 m、短径 266 m の楕円形で、漏斗状に掘り込まれている。長径方向は N - 34° - E である。湧水と崩落の恐れがあるため、確認面から深さ 140 m までとした。

**覆土** 10 層を確認した。ロームブロックを含んでいることから、人為堆積である。

**遺物出土状況** 磁器片 1 点(青磁碗)、石製品 1 点(石鉢)が出土している。ほかに混入した土師器片 15 点(壺 6・甕 9)、須恵器片 19 点(壺 5・高台付壺 3・蓋 1・長頸壺 3・甕 7)、鐵滓 5 点が出土している。1 は覆土中から、2 は南西部の覆土第 3 層中から、それぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土した青磁碗や石鉢から、おそらくも 16 世紀後半には廃絶していると考えられる。



第12図 第3号井戸跡・出土遺物実測図

第6表 第3号井戸跡出土遺物一覧 (第12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重 量	材 質	特 徴	釉薬	産 地	出 土 位 置	備 考
1	青磁	碗	-	(3.4)	-	906.76	緻密	鏡面文	青磁釉	龍泉窯	覆土	5% PL 5
2	石鉢	-	(13.8)	-	(906.76)	安山岩	内外面工具痕 面取り→仕上げ加工研磨 口縁部厚付着				質土第 3 層	10% PL 5

## 4 江戸時代の遺構と遺物

土坑墓1基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

## 土坑墓

## 第1号土坑墓 (第13図 第7表 PL 3・5)

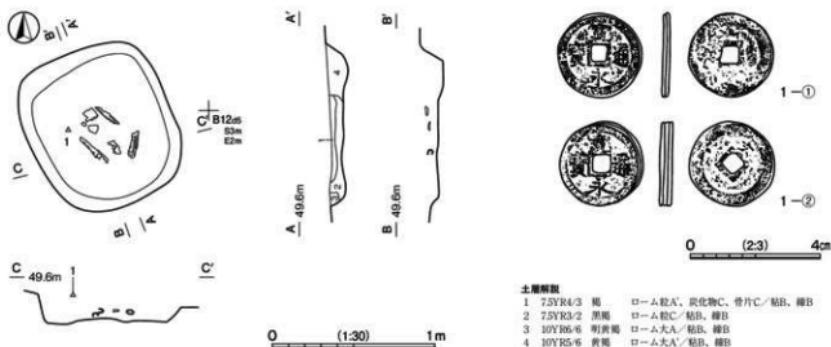
位置 調査A区北西部のB12d5区、標高49mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸1.00m、短軸0.88mの隅丸方形で、主軸方向はN-25°-Wである。深さは14cmで、底面は凸凹がある。壁は外傾している。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックを含んだ土で埋め戻している。

遺物出土状況 人骨片5点(上腕骨1・肩甲骨1・大腿骨3)、銭貨5点(寛永通寶)が出土している。1-①・②は北西部の覆土上層から5枚重なった状態で出土している。取り上げ時に2枚と3枚の2つに分離した。

所見 時期は、出土した銭貨の中に2期新寛永(文錢)が見られることから、17世紀後半以降と考えられる。



第13図 第1号土坑墓・出土遺物実測図

第7表 第1号土坑墓出土遺物一覧 (第13図)

番号	鉢種	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初調年	特徴	出土位置	備考
1-1	寛永通寶	2.6	0.5	0.3	6.75	銅	1636年	2枚重ね 1期古寛永(1636-1659年) 対面 背面無文	覆土上層	PL 5
1-2	寛永通寶	2.6	0.5-0.6	0.4	10.06	銅	1636年 1668年	3枚重ね 1期古寛永(1636-1659年) 対面 背面「文」 2期新寛永	覆土上層	PL 5

## 5 その他の遺構と遺物

時期や性格を明確にできなかった掘立柱建物跡1棟、土坑9基、井戸跡2基、溝跡6条、ピット群2か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

## (1) 掘立柱建物跡

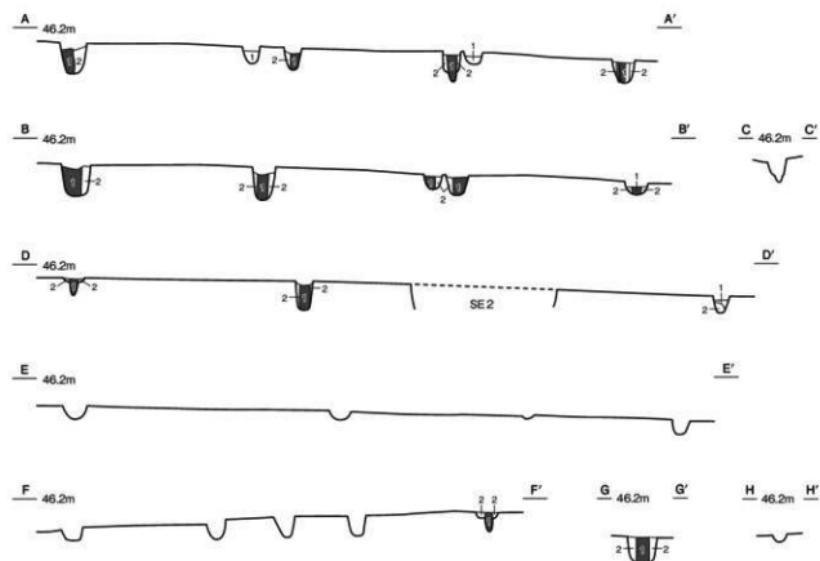
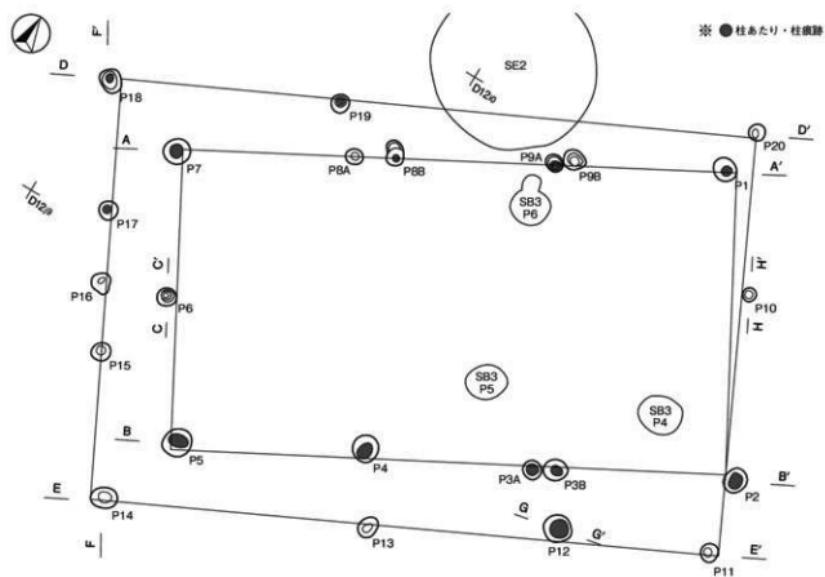
## 第2号掘立柱建物跡 (第14図 PL 3)

位置 調査B区中央部のD12i0区、標高46mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 北側の庇の柱穴が第2号井戸に掘り込まれている。第3号掘立柱建物跡との関係は柱穴同士の重複がないため、新旧は不明である。

規模と構造 桁行3間、梁行2間の南・北・西部に庇が付いた隅柱建物跡で、桁行方向N-59°-Eの東西棟である。規模は、桁行約6.88m、梁行約3.58mで、面積は24.63m<sup>2</sup>である。柱間寸法は、南桁行が西妻から2.30m、2.10~2.40m、2.20~2.50m、北桁行が西妻から2.20~2.70m、2.50~2.80m、1.80~2.10m、東梁行が北妻から1.40m、2.20m、西梁行が北妻から1.90m、1.90mで筋柱は描っている。

柱穴 23か所。平面形は円形で、長径26~35cm、短径22~35cmである。深さ18~42cmで、掘方の断面形はU字



ピット土壤断面(各ピット共通)

1 7.5TR2/2 黒鉛 ローム物C/粘C、線A  
2 7.5TR3/3 明鉛 ローム中B/粘B/粘C、線A

0 (1:60) 2m

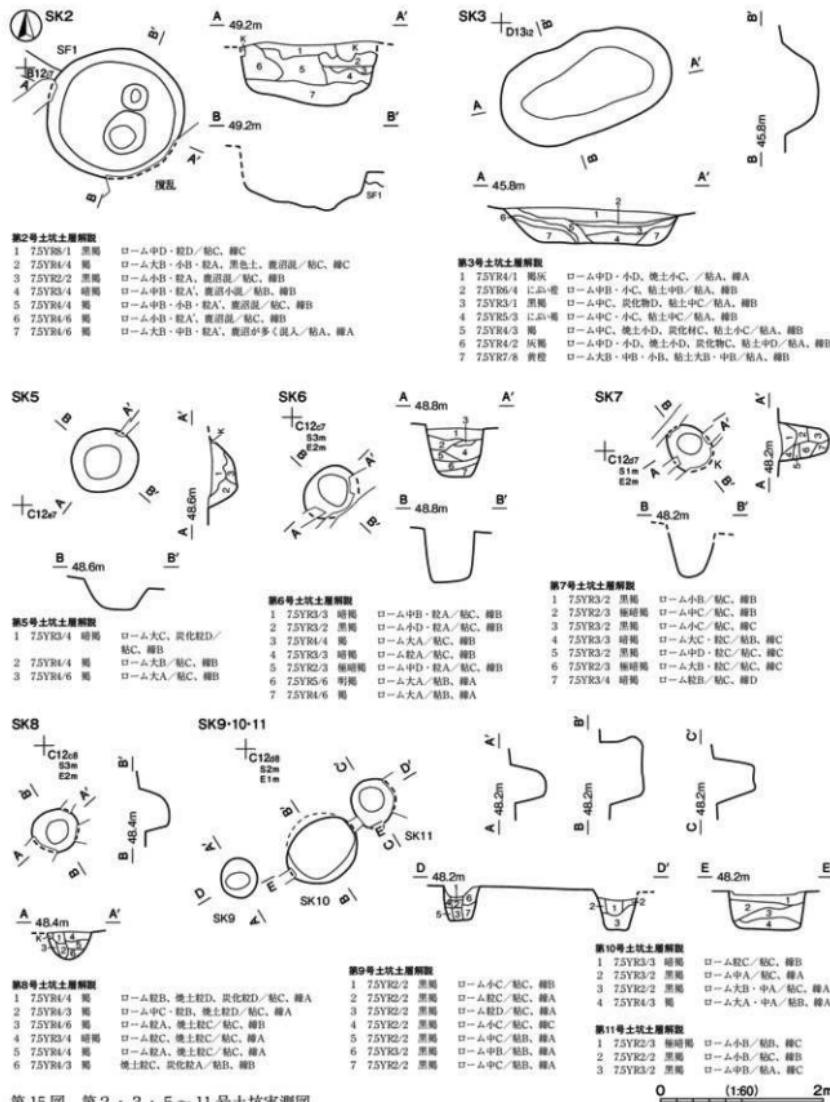
第14図 第2号掘立柱建物跡実測図

状である。第1層は柱痕跡、第2層は掘方への埋土である。

**所見** 出土遺物がないため、時期は不明である。平面形や規模などから居宅建物と考えられる。また、底部部分の軸がややずれているように見え、2棟の掘立建物の重複の可能性もある。

### (2) 土坑

土坑9基は、実測図(第15図)と一覧(第8表)を記載する。



第15図 第2・3・5~11号土坑実測図

第8表 その他の土坑一覧（第15図）

番号	位置	長径方向	平面形	規 格		東 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
2	B127	-	円形	1.70 × 1.60	75	外傾	凹凸	人為	弥生土器 土師器 瓢箪器	
3	D132	N-69°-E	椭円形	2.15 × 1.18	47	外傾	平坦	人為	土師器、瓢箪器	
5	C127	-	円形	0.82 × 0.78	37	外傾	平坦	人為	瓢箪器	
6	C127	N-52°-E	椭円形	0.72 × 0.60	64	垂直	平坦	人為	瓢箪器	
7	C127	N-37°-W	[円形]	(0.62) × (0.50)	67	外傾	U字状	人為	-	
8	C128	-	[円形]	(0.56) × (0.55)	35	外傾	平坦	人為	-	
9	C128	N-20°-W	椭円形	0.50 × 0.45	42	外傾	平坦	人為	-	柱穴跡
10	C128	N-62°-E	[椭円形]	(0.95) × (0.85)	50	外傾/内傾	平坦	人為	-	
11	C128	N-6°-W	[椭円形]	0.60 × (0.53)	50	外傾/垂直	平坦	人為	-	柱穴跡

## (3) 井戸跡

## 第1号井戸跡（第16図 第9表 PL 4）

位置 調査A区中央部西寄りのB12h6区、標高49mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号道路跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長径2.04m、短径1.86mの円形で、漏斗状を呈している。湧水と崩落の恐れがあったため、確認面から深さ150mまでの調査で終了した。

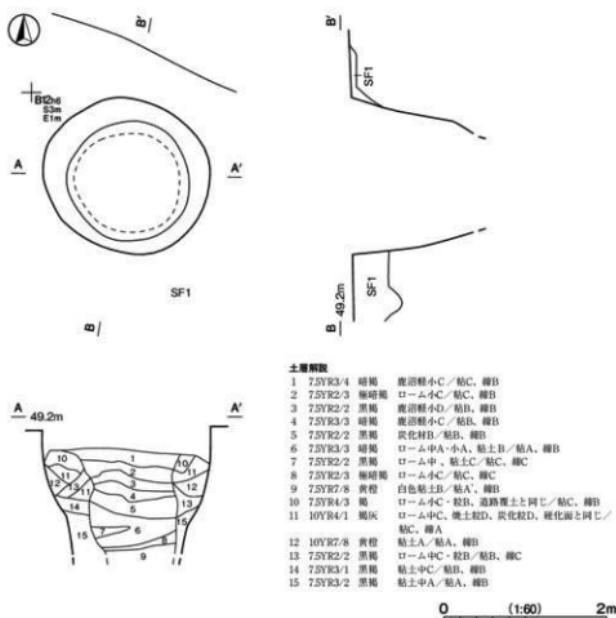
覆土・構築土 15層を確認した。第1～9層はロームブロックと粘土ブロックを含んでいることから、人為堆積である。第10～15層は掘方の埋土である。

覆土と掘方埋土の境が明

瞭であることから、木製の井戸枠が存在した可能性がある。

遺物出土状況 混入した弥生土器1点（広口壺）土師器片19点（环2・皿1・瓶1・甕15）、須恵器片32点（环5・高台付环4・蓋6・甕17）、石器1点（敲石）、鐵滓1点が出土している。本跡が、第1号道路跡を掘り込んでいることから混入と考えられる。

所見 時期は、混入した遺物しか出土していないことから詳細な時期は不明であるが、形状から中・近世と考えられる。



第16図 第1号井戸跡実測図

## 第2号井戸跡 (第17図 第9表 PL 4)

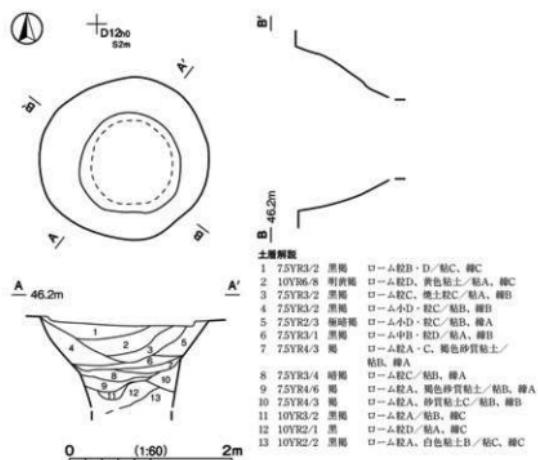
**位置** 調査B区中央部のD12h0区、標高46mほどの平坦な台地上に位置している。

**重複関係** 第2・3号掘立柱建物跡の柱穴を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径2.10m、短径2.00mの円形で、漏斗状を呈している。湧水と崩落の恐れがあったため、確認面から深さ1.10mまでの調査で終了した。

**覆土** 13層を確認した。いずれもロームブロックを含んでおり、これらが堆積である。

**所見** 出土遺物がないため、詳細な時期は不明であるが、形状から中・近世の井戸と考えられる。



第17図 第2号井戸跡実測図

第9表 その他の井戸跡一覧 (第16・17図)

番号	位置	長径方向	平面形	規 格		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	B12h6	-	円形	2.04 × 1.86	(150)	漏斗状	-	人為	弦生土器 土師器 須恵器 石器 鉄滓	-
2	D12h0	-	円形	2.10 × 2.00	(110)	漏斗状	-	人為	-	-

## (4) 溝跡

溝跡6条は、特徴のある第1・5号溝跡は本文で記述するほか、全体図(第2図)と実測図(第18図)及び一覧(第10表)で記載する。

## 第1号溝跡 (第18図 第10表 PL 4)

**位置** 調査A区南部のC12a6～C12b9、標高48～49mほどの緩斜面部に位置している。

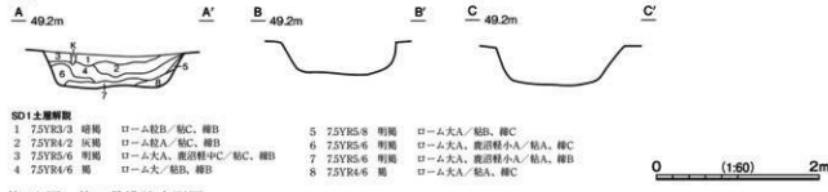
**規模と形状** 調査区域外のC12a6区から緩斜面部の等高線に沿って南東方向(N-60°-E)へ直線状に延びている。確認できた長さは11.70mで、上幅1.24～1.72m、下幅0.90～1.04m、深さ34～37cmで、東側へ傾斜している。断面形は逆台形状で、底面は凸凹がある。

**覆土** 8層に分層できる。ロームブロックが多量に含まれていることや不規則な堆積状況から人為堆積である。

**遺物出土状況** 混入した土師器片43点(甕)、須恵器片6点(壺2・蓋2・甕2)、石英製剝片1点が出土している。

**所見** 混入した遺物しか出土していないため、詳細な時期は不明であるが、形状から中・近世の溝と考えられる。

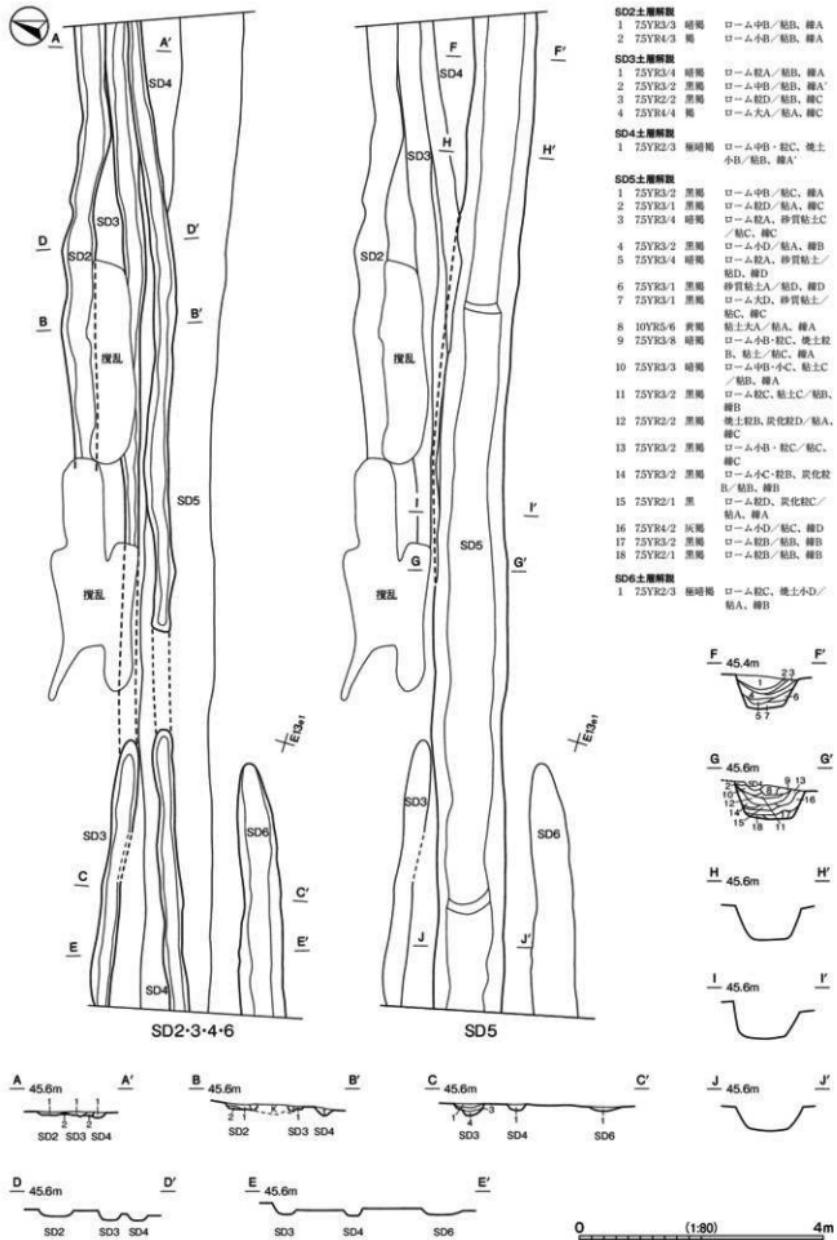
## SD1



第18図 第1号溝跡実測図

## 第5号溝跡 (第19図 第10表 PL 4)

**位置** 調査B区中央部のE12d9～E13c3、標高45～46mほどの緩斜面部に位置している。



第19図 第2～6号溝跡実測図

**重複関係** 第4号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 調査区域外のE12d9区から緩斜面部の等高線に沿って東方向（N - 74° - E）へ直線状に延びている。確認できた長さは16.42mで、上幅0.98~1.20m、下幅0.56~0.78m、深さ56~78cmで、東側へ傾斜している。断面形は逆台形状で、底面は階段状である。

**覆土** 18層に分層できる。第1~16層はロームブロックと粘土ブロックを含んでいることや不規則な堆積状況をしていることから、人為堆積で、17~18層は周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

**遺物出土状況** 混入した土器片2点（甕）、須恵器片5点（坏3・甕2）が出土している。

**所見** 混入した出土遺物しかないと、詳細な時期は不明であるが、形状から中・近世の溝と考えられる。

第10表 その他の溝跡一覧（第18・19図）

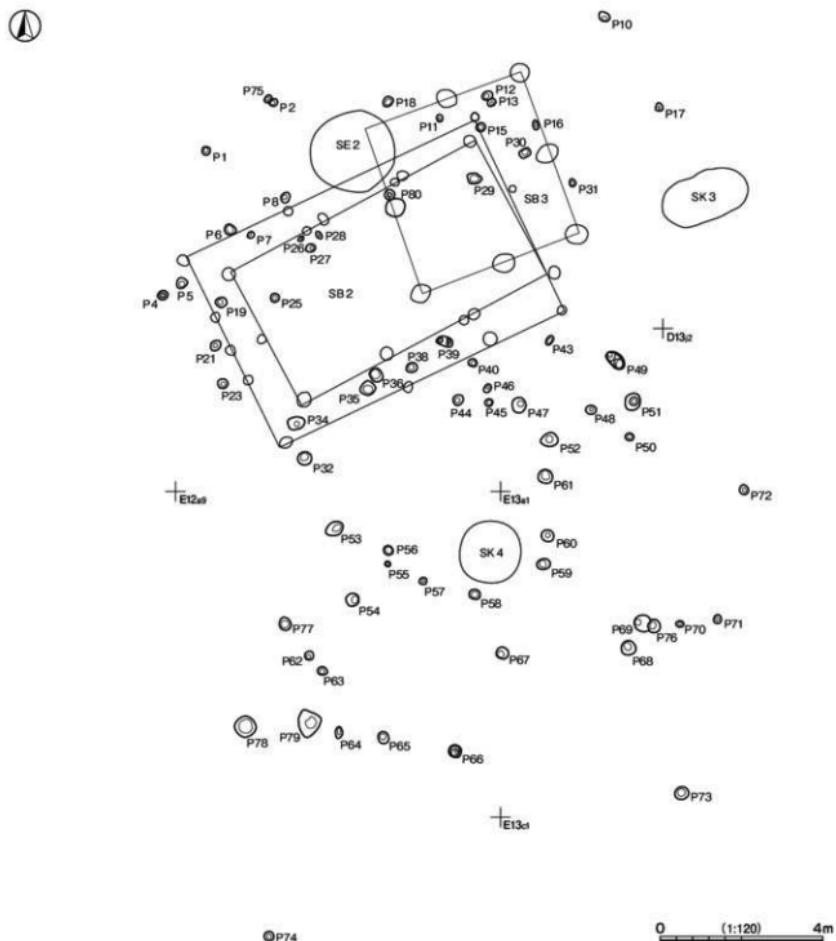
番号	位置	方向	平面形	規 格				底面	壁面	覆土	主な出土遺物		備考	
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)							
1	C12a6 ~ C12a9	N - 60° - E	直線状	(11.70)	1.24~1.27	0.90~1.04	34~47	平坦	外傾	人為	土器片 須恵器 石英製調片	-		
2	E13c1 ~ E13c3	N - 74° - W	直線状	(7.08)	0.96~1.05	0.22~0.72	6~12	平坦	外傾	人為	須恵器	本跡→SD 3 PL 4		
3	E12a9 ~ E13c3	N - 76° - E	直線状	東部(3.39) 西部(4.42)	0.90~0.94	0.46~1.05	8~30	平坦	外傾	人為	-	SD 2 ~ 4 → 本跡 PL 4		
4	E12a9 ~ E13c3	N - 73° - E	直線状	東部(3.38) 西部(4.67)	0.26~0.42	0.08~0.24	8~12	平坦	外傾	人為	土器片 須恵器	SD 5 → 本跡 → SD 3 ~ PL 4		
5	E12a9 ~ E13c3	N - 74° - E	直線状	(16.42)	0.98~1.20	0.56~0.78	56~78	階段状	外傾	人為 / 自然	須恵器	本跡→SD 4		
6	C12a6 ~ C12a9	N - 72° - E	直線状	(4.20)	0.38~0.72	0.24~0.30	8~12	平坦	外傾	人為	-	PL 4		

### (5) ピット群

ピット群は2か所を確認した。平面図（第20・21図）と一覧（第11・12表）で記載する。

第11表 第1号ピット群ピット一覧（※欠番は第2号掘立柱建物跡の柱穴に変更したピット）

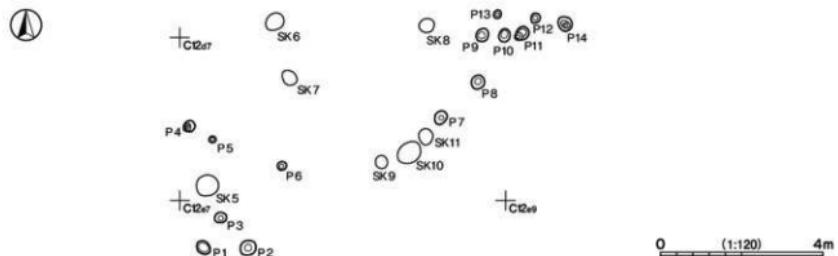
番号	位置	平面形	規 格 (cm)			番号	位置	平面形	規 格 (cm)			番号	位置	平面形	規 格 (cm)		
			長径(奥)	短径(横)	深さ				長径(奥)	短径(横)	深さ				長径(奥)	短径(横)	深さ
1	D12a9	円形	20 × 20	20	-	31	D13a1	椭円形	20 × 15	9	-	59	E13a1	椭円形	33 × 26	22	-
2	D12a9	椭円形	20 × 18	18	-	32	D12a9	円形	34 × 34	30	-	60	E13a1	椭円形	32 × 28	16	-
4	D12a8	円形	25 × 23	25	-	34	D12a9	椭円形	42 × 30	23	-	61	D13a1	円形	35 × 34	33	-
5	D12a9	円形	27 × 25	17	-	35	D12a9	円形	42 × 40	30	-	62	E12a9	椭円形	22 × 22	13	-
6	D12a9	椭円形	30 × 25	17	-	36	D12a9	椭円形	35 × 30	18	-	63	E12a9	椭円形	25 × 20	10	-
7	D12a9	椭円形	18 × 15	23	-	38	D12a9	椭円形	28 × 23	21	-	64	E12a9	椭円形	30 × 18	10	-
8	D12a9	椭円形	28 × 20	19	-	39	D12a9	椭円形	41 × 24	20	-	65	E12a9	椭円形	31 × 25	18	-
10	D13a1	椭円形	30 × 23	21	-	40	D12a9	椭円形	22 × 20	12	-	66	E12a9	椭円形	33 × 30	23	-
11	D12a9	椭円形	19 × 15	9	-	43	B13a1	椭円形	25 × 16	8	-	67	E13a1	円形	30 × 30	16	-
12	D12a9	円形	25 × 23	27	-	44	D12a9	椭円形	28 × 25	26	-	68	E13a1	円形	35 × 35	25	-
13	D12a9	椭円形	22 × 18	17	-	45	D12a9	円形	19 × 18	22	-	69	E13a1	円形	41 × 40	20	-
15	D12a9	椭円形	24 × 21	13	-	46	D12a9	椭円形	23 × 15	22	-	70	E13a2	椭円形	39 × 15	7	-
16	D13a1	椭円形	25 × 13	8	-	47	D13a1	椭円形	40 × 33	30	-	71	E13a2	椭円形	39 × 18	15	-
17	D13a1	椭円形	20 × 18	21	-	48	D13a1	椭円形	27 × 23	18	-	72	D13a2	椭円形	25 × 22	14	-
18	D12a9	椭円形	26 × 23	26	-	49	D13a1	椭円形	55 × 31	18	-	73	E13a2	椭円形	34 × 30	23	-
19	D12a9	椭円形	30 × 25	20	-	50	D13a1	円形	21 × 20	30	-	74	E12a9	円形	24 × 24	15	-
21	D12a9	椭円形	30 × 22	10	-	51	D13a1	円形	41 × 39	30	-	75	D12a9	椭円形	23 × 15	15	-
23	D12a9	円形	25 × 24	23	-	52	D13a1	椭円形	43 × 33	35	-	76	E13a1	円形	32 × 32	27	-
25	D12a9	椭円形	24 × 20	20	-	53	E12a9	椭円形	46 × 33	35	-	77	E12a9	椭円形	32 × 28	45	-
26	D12a9	椭円形	16 × 10	15	-	54	E12a9	椭円形	33 × 30	38	-	78	E12a9	円形	53 × 52	14	-
27	D12a9	椭円形	25 × 19	31	-	55	E12a9	円形	15 × 14	8	-	79	E12a9	椭円形	63 × 54	48	-
28	D12a9	椭円形	21 × 12	17	-	56	E12a9	椭円形	25 × 22	14	-	80	D12a9	椭円形	23 × 17	30	-
29	D12a9	椭円形	37 × 27	18	-	57	E12a9	椭円形	23 × 20	14	-						
30	D13a1	椭円形	28 × 21	12	-	58	E12a9	椭円形	29 × 25	18	-						



第20図 第1号ピット群実測図

第12表 第2号ピット群ピット一覧

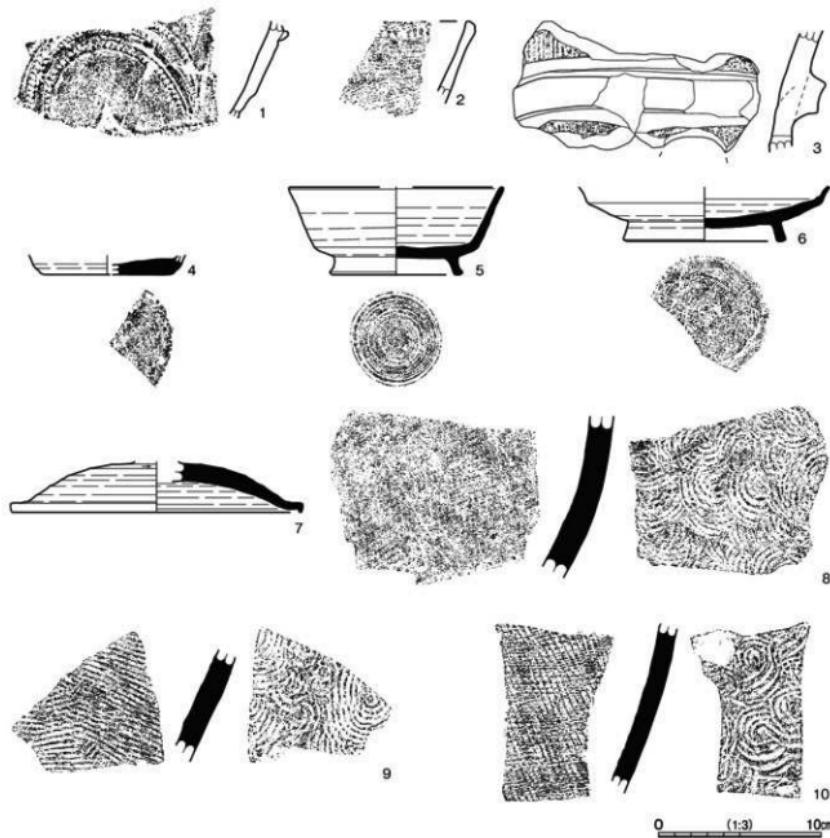
番号	位置	平面形	規 模 (cm)			番号	位置	平面形	規 模 (cm)			番号	位 置	平面形	規 模 (cm)		
			[長径] × [短径]	[高さ]	[深さ]				[長径] × [短径]	[高さ]	[深さ]				[長径] × [短径]	[高さ]	[深さ]
1	C12e7	楕円形	37 × 30	23		6	C12d7	円形	22 × 21	23		11	C12c9	楕円形	37 × [20]	36	
2	C12e7	円形	38 × 35	22		7	C12d8	〔楕円形〕	36 × [28]	20		12	C12c9	楕円形	36 × 23	45	
3	C12e7	楕円形	30 × 25	22		8	C12d8	〔楕円形〕	36 × 32	31		13	C12c8	楕円形	21 × 18	21	
4	C12d7	楕円形	30 × 27	43		9	C12c8	〔円形〕	34 × [31]	39		14	C12c9	〔楕円形〕	[38] × 32	43	
5	C12d7	円形	12 × 11	43		10	C12c8	〔楕円形〕	32 × [27]	47							



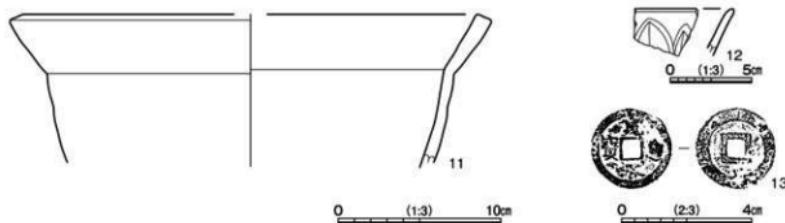
第21図 第2号ピット群実測図

## (6) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、出土遺物実測図（第22・23図 PL.5）と出土遺物一覧（第13表）で記載する。



第22図 遺構外出土遺物実測図(1)



第23図 遺構外出土遺物実測図(2)

第13表 遺構外出土遺物一覧 (第22・23図)

番号	種 別	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	焼成	特 徴	出土位置	備 考
1	縫文土器	深鉢	-	(6.0)	-	長石・石英・雲母 細粒	褐	普通	円形の隆起胎台後縁部に沿って角押文で施文	表土 5% PL 5 約15cm	
2	強生土器	広口盤	-	(6.0)	-	長石・石英・雲母 細粒	にぶい褐	普通	口唇部側突文 口縁部櫛歯状工具による波状沈線文	SE2 5% PL 5 強生後期	

番号	器 種	高さ	幅	厚さ	重 量	胎 土	色 調	焼成	特 徴	出土位置	備 考
3	円筒埴輪	(7.5)	(15.3)	1.4	(266.97)	長石・石英・雲母 赤色粒子	にぶい褐	普通	外面凸帯内贈気味 縦方向のハケ目 内面ヘラナデ	SP1 5% PL 5	

番号	種 別	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	焼成	特 徴	出土位置	備 考
4	須恵器	壺	-	(1.2)	(8.0)	長石・石英・黒色 粒子・辺付柱頭 粒子	暗灰	普通	底部ヘラナデ 底部ヘラ書「メ」	SD5 木造下窓	5% PL 5
5	須恵器	高台付杯	[13.2]	5.4	[8.1]	長石・石英・黒色 粒子・辺付柱頭 粒子	灰	普通	底部削輪へラ削り 高台部貼付 前面頭部削輪にぶつ切	B区表土 5% PL 5	木造下窓
6	須恵器	壺	-	(3.0)	[9.8]	長石・石英・黒色 粒子・辺付柱頭 粒子	灰	普通	底部削輪へラ削り 高台部貼付	SE1 30% 木造下窓	木造下窓
7	須恵器	壺	[17.8]	(3.1)	-	長石・石英・黒色 粒子・辺付柱頭 粒子	暗灰黄	普通	天井部削輪へラ削り	SE1 20% 木造下窓	
8	須恵器	壺	-	(9.9)	-	長石・石英・黒色 粒子・辺付柱頭 粒子	灰	普通	外面斜削から腰部の平行叩き 内面同心円状の当て具 痕	SE1 5% 木造下窓	
9	須恵器	壺	-	(6.8)	-	長石・石英・黒色 粒子・辺付柱頭 粒子	暗灰	普通	外底削位の平行叩き 内面同心円状の当て具痕	SE1 5% 木造下窓	
10	須恵器	壺	-	(10.4)	-	長石・石英・黒色 粒子・辺付柱頭 粒子	暗灰	普通	外面部子目の平行叩き 内面同心円状の当て具痕	SE1 5% 木造下窓	
11	土師質土器	内耳罐	[28.1]	(9.4)	-	長石・石英・黒色 粒子・辺付	外面黒褐 内面灰褐色	普通	内外面ヘラナデ 外面壓付唇	表土 5%	

番号	種 別	器 種	口 径	器 高	底 径	胎 土	色 調	焼成	特 徴	釉薬	產地	出土位置	備 考
12	青磁	碗	-	(2.9)	-	緻密	灰オーバー	燒造弁文		青磁釉	龍泉窯	表土 5% PL 5	

番号	種 別	径	孔幅	厚さ	重 量	材 質	燒 烤 年	特 徴	出土位置	備 考
13	重水道管	25	0.6	0.2	303	陶	1636年	1期古窯水 (1636 ~ 1639年) 背面無文	表土 PL 5	

## 第4節 総括

### 1 はじめに

当遺跡から、掘立柱建物跡3棟、土坑1基、土坑墓1基、井戸跡3基、道路跡1条、溝跡6条、ピット群2か所を確認した。それらの遺構は、古墳時代以降における、断続的な土地利用の状況が明らかとなった。ここでは、時代順と特徴のある遺物と遺構について概観し、さらに時期の確定できなかった遺構と遺物についても成果や課題の検討を加え、総括とする。

### 2 古墳時代

当時代の遺構としては掘立柱建物跡2棟と土坑1基を確認した。第3号掘立柱建物跡と第4号土坑の時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。第1号掘立柱建物跡についても、第3号竪穴建物跡の主軸方向や規模がほぼ同一であることから、古墳時代後期と考えられる。また、どちらも規模が小さく、性格は倉庫などと考えられる。

管見の限り、県内の例としては、つくば市熊の山遺跡第120号掘立柱建物跡<sup>〔註〕</sup>がある。台地の南西縁辺部に位置し、

規模は、一辺の長さ 4.80 m、柱間寸法は 2.30 ~ 2.50 m で、中央に柱をもつ桁行 2 間、梁行 2 間である。桁行方向は N - 33° - W で総柱建物跡で、時期は 6 世紀後半である。総柱建物と側柱建物の違いはあるが、規模や形状が類似し、時期も近いことから、同様な性格の建物であったと考えられる。

県外の類例としては、群馬県渋川市（旧北群馬郡子持村）黒井峯遺跡<sup>2)</sup>がある。当遺跡は、6 世紀の中頃に榛名山二ツ岳の噴火により降積もった砾石の下から発見された遺跡として有名である。通常の遺跡では検出しづらい畠や水田造構も確認されており、古墳時代のムラの様子を再現できる貴重な資料の遺跡である。参考となる遺構は、B - 103 号高床式建物と B - 113 号高床式建物がの 2 棟である。B - 103 号は東西 3.2 m、南北 3.0 m、桁行 2 間、梁行 2 間の総柱建物跡、B - 113 号は東西 3.2 m、南北 3.2 m、桁行 2 間、梁行 2 間の総柱建物跡である。周囲には畠や水田造構や道などが確認されていることからも、性格は穀物倉庫と推定されている<sup>3)</sup>。

### 3 奈良・平安時代

当時代の遺構としては道路跡 1 条を確認した。調査の結果、2 期に亘る構築面が確認できた。構築時期は、出土遺物から第 1 期面は 8 世紀後葉、第 2 期面は 9 世紀前葉と考えられる。第 2 期面は、直線状に延びている第 1 期面を約 1.90 m 押張して構築され、南側へ緩やかに彎曲させていることが判明した。さらに、側溝を埋めて 50cm ほど拡張した痕跡も確認できた。道路構築土中からは、多量の細かく破碎された須恵器の破片が出土していることから、構築土強化のための混和材と考えられる。

また、掘方では、波板状凹凸面が確認できた。覆土が固く締まっていることから、雨水の影響を受けやすい軟弱な部分を対象に、路面の補修や強化、排水対策を施した痕跡と考えられる<sup>4)</sup>。

### 4 室町・安土桃山時代

当時代の遺構は井戸跡 1 基を確認した。第 3 号井戸跡からは、細描鑿蓮弁文が施された龍泉窯系青磁碗と石鉢が出土している。青磁碗は伝世することから、詳細な遺構の時期を決定するには困難である。上田秀夫氏の研究によると、「国内にもたらされた細描鑿蓮弁文碗は、中国陶磁の主体が染付へ移行していく 15 世紀後半以降にある。15 世紀後半に出現し、16 世紀末近くまで出土する傾向にある。」とされている<sup>5)</sup>。また、石鉢は全国的にも出土量が少なく、編年は確立されていない。県内では 15 世紀後半から 16 世紀代の遺跡で散見できる。したがって、第 3 号井戸跡は、遅くとも 16 世紀後半には廃絶しており、機能していた時期は 15 世紀 ~ 16 世紀前半の可能性がある。

### 5 江戸時代

当時代の遺構としては、土坑墓 1 基を確認した。第 1 号土坑墓からは副葬品と考えられる銭貨が 5 枚出土している。鈴木公男氏の分類によれば、古寛永と文鏡の出土から、第Ⅲ期（1668 ~ 1697 年）に当たる<sup>6)</sup>。人骨の遺存状態が悪いことから、埋葬形態を確認することは困難であるが、遺構の形状から推測する長佐古真也氏の研究がある。その研究によると、土坑墓の平面形に長軸、短軸が認められるものは臥葬、認められないものは座葬、浅い短長方形ないし、楕円形のものは、横臥屈葬とされている<sup>7)</sup>。氏の研究に当たしてみると、当遺跡の第 1 号土坑墓は、浅い隅丸長方形であることから、横臥屈葬の可能性が高い。

### 6 そのほかの遺構と遺物について

時期の決定できなかった掘立柱建物跡 1 棟、井戸跡 2 基、溝跡 6 条を確認した。特徴のある遺構と遺物について検討する。

#### (1) 掘立柱建物跡について

当遺跡の第 2 号掘立柱建物跡は西・南・北側の 3 面に庇の付いた桁行 3 間、梁行 2 間の側柱建物跡である。県内で類例をみていくと、つくば市鳥名前野東遺跡の第 21 号掘立柱建物跡がある<sup>8)</sup>。当建物跡は、桁行 3 間、梁行 2 間の側柱建物で、規模は桁行 5.15 m、梁行 3.26 m、面積は 16.79 m<sup>2</sup> である。4 面の庇が付く建物で、14 世紀前葉まで機能していたと考えられている<sup>9)</sup>。中道遺跡の第 2 号掘立柱建物跡と付属する庇の数が異なるものの、建物の形状と規模がほぼ類似していることから、当遺跡のものは、中世の居宅と考えられる。

当遺跡を含め、掘立柱建物跡は遺物の出土が少なく時期決定が難しい。松嶋直美氏による柱間寸法による研究によると、8 尺から 7 尺という幅の時期（15 世紀後葉 ~ 16 世紀中葉）、6.5 尺前後の時期（16 世紀末葉 ~ 17 世紀中頃）、6 尺使用の開始（17 世紀末葉）の 3 回の変換期を見いただしている<sup>10)</sup>。当遺跡の掘立柱建物跡は桁行 2.1 ~ 2.8 m (7

~93尺)、梁行14~22m(4.6尺~7.3尺)である。そのまま当てはまるものがないが、あえて言うならば、8尺から7尺という幅の時期(15世紀後葉~16世紀中葉)に含まれる。しかし、松崎氏の分類は福島県浜通り地方に限定していることから、今後は、県内における時期の決定ができた掘立柱建物跡を対象に、形状や柱間寸法などを、再検討することが必要である。

#### (2) 井戸跡について

第1号井戸跡は、奈良・平安時代の道路跡を掘り込んでいた。土層の断面観察から、井戸の覆土と掘方埋土の境が明瞭であることから、木製の井戸枠が存在した可能性がある。覆土と掘方埋土の境が歪んでいることから、曲物や桶を複数積み上げて井戸枠を構築する曲物組型や結桶組型の痕跡と考えられる。以上のことから、時期は中・近世と考えられる。

#### (3) 溝跡について

確認した第5号溝跡は、直線的な形状から土地を区画する溝と考えられる。当遺跡から約400m南東側に位置している安国寺と付近の敷地は大足館があったとされている<sup>11)</sup>。安国寺は寛文3(1663)年創建の曹洞宗の寺で、大足館が廃城後に創建されている。また、現存する土壘と堀状の窪地は大足館の遺構と推定されている<sup>12)</sup>。この土壘と堀跡の軸が第5号溝跡の軸方向とはほぼ一致している。大足館の一部とは断定できないが、ほぼ同時代の関連する遺構と考えられる。

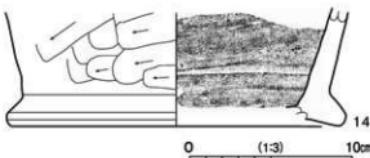
#### (4) 特徴のある遺構出土遺物について(第24図PL5)

第1号井戸跡内から、底部の張り出した無底の土師器瓶の破片が出土している。14は残存高7.0cm、復元底径20.2cm、胎土には長石・石英・雲母・赤色粒子・黒色粒子・細繰を含む。調整は外面が横位・斜位のヘラ削りで、内面は横位のヘラナデを施している。

県内の類例としては、管見に限り、結城市峯崎遺跡<sup>13)</sup>と同市下り松遺跡<sup>14)</sup>の2例がある。前者は1点、後者は9点出土している。

平石尚和氏の研究によると、県内と関東地方の類例を挙げて次のように述べている。「時期は、9世紀後葉から10世紀後半の遺跡で確認されている。性格は、羽釜と一緒に出土している例が見られるので、羽釜とセットで使用されたと推測される。また、底径20cm以上のものが多く、全形を考えると大型瓶である。一住居単位で使用した炊飯用具とは考えにくい。村落内で使用されたものなのか、儀式や行事の際に使用された特殊な瓶の可能性が考えられる。」と論じている<sup>15)</sup>。また、古川一明氏は東北地方の底部の張り出す無底の土師器瓶について、43の類例を挙げて底部形態の分類を行っている<sup>16)</sup>。それによると、A類が突尖状、B類が短く屈曲するもの、C類が錐状に広がるもの3種類に分類されている。分類したものを時期別に見ていくと、「A・B類が8世紀後半から9世紀後半、C類が9世紀中葉から10世紀前半に位置付けられる資料がある。A・BからC類への連続的な変遷を想定することができる」と述べられている。当遺跡のものは、B類に該当し、8世紀後半から9世紀後半の年代観から、第1号道路跡の構築時期とほぼ合致する。また、関東地方の出土状況にも触れ、「確かに下野、常陸、房総等の関東東部地域では、東北地方と同様、出土量は少なく、これらの地域で羽釜が日常的な煮沸具として使用されたとは考えにくい。東北地方及び関東東部地域の羽釜形土器や張出し持つ無底の瓶は、特異ともいえる上野・北武藏を中心とした実用的な土製羽釜・瓶の流通圏とは異なり、鉄製の鍋・釜が普及しつつある中で、これらを模倣元とした儀式としての煮沸用土器が限定的に生産・使用されたものとみるべきであろう。」として、平石氏同様に儀式に使う道具と考えられている。

当遺跡から出土した特徴的な土師器瓶は、後世の遺構覆土から混入したものであり、帰属する遺構は不明である。今回、県内の類例の一つとして加えることができたことは成果の一つである。



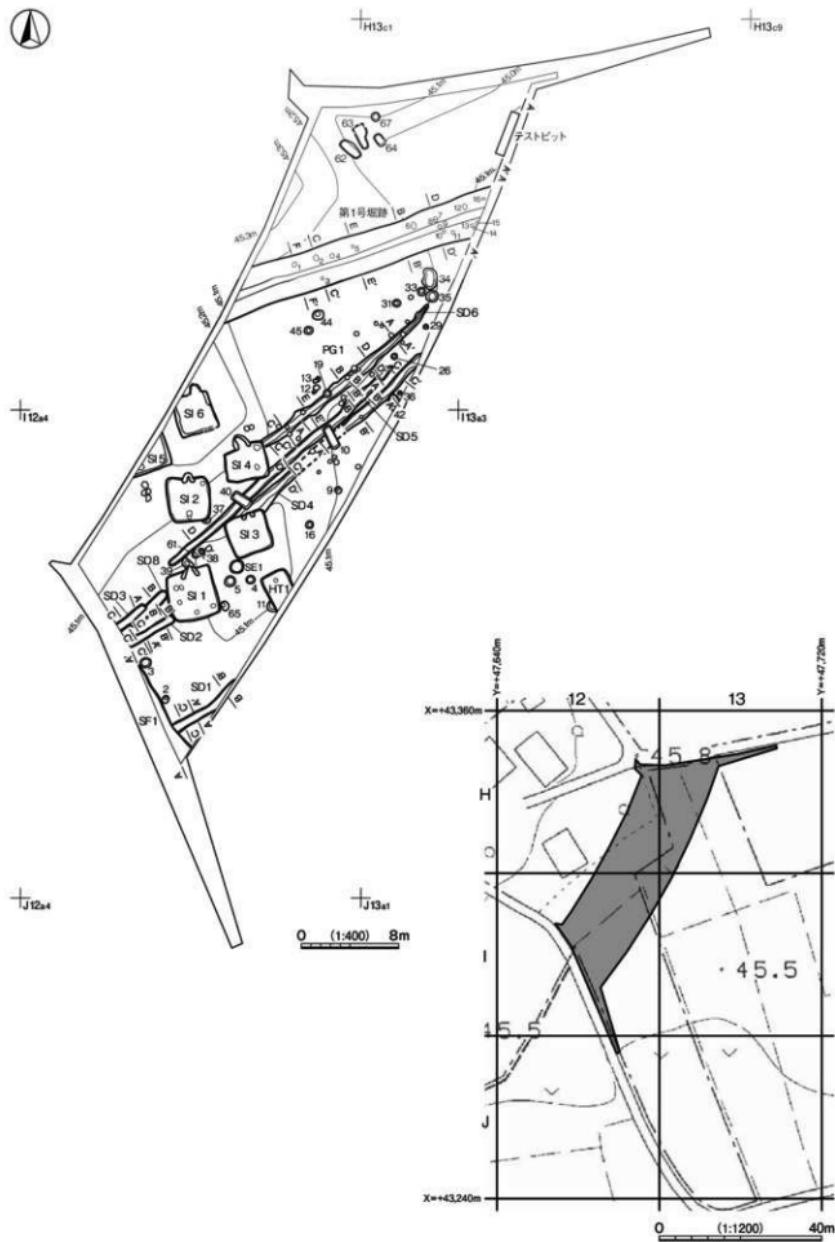
第24図 遺構外出土遺物実測図(3)

## 7 おわりに

調査区が狭小で出土遺物も少なく、不明な点も多いが、当遺跡の一端を知ることができた。また、出土例の少ない古墳時代後期の掘立柱建物の柱根を確認した。用いられた柱材の樹種同定の分析によって、当時の森林資源の利用のあり方や、遺跡周辺の自然環境についての情報を得ることができたことは、大きな成果である。今後、遺跡周辺の調査の進展に伴い、遺跡の性格がより鮮明になることを期待したい。

### 註

- 1) 藤田哲也・三谷正・原信田正夫・川上直登・福田義弘『鳥名・福田坪一体型特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 V 熊の山遺跡』茨城県教育財团調査報告第 174 集 2001 年 3 月
- 2) 石井克己・早田勉・井川達夫『黒峯遺跡発掘調査報告書』子持村文化財調査報告 第 11 集 群馬県北群馬郡子持村教育委員会 1990 年 3 月
- 3) 能登 健「黒井峯遺跡にみる古墳時代集落の様相」「歴史と地理」第 418 号 山川出版社 1990 年 6 月
- 4) 近江屋成庸『第 4 節 まとめ』『一般国道 6 号千代田石岡バイパス（かすみがうら市市川～石岡市東大橋）事業地内埋蔵文化財調査報告書 5 中津川遺跡』茨城県教育財团文化財調査報告第 338 集 2011 年 3 月
- 5) 上田秀夫「14～16 世紀の青磁碗の分類」「貿易陶磁研究」No. 2 日本貿易陶磁研究会 1982 年 8 月
- 6) 鈴木公男『出土銭貨の研究』東京大学出版会 1999 年 3 月
- 7) 長佐古真也「発掘事例による多摩丘陵の墓制」「江戸時代の墓と葬制」江戸遺跡研究会第 9 回大会発表要旨 江戸遺跡研究会 1996 年 2 月
- 8) 小松崎和治「鳥名・福田坪一体型特定区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 X IV 鳥名境松遺跡・鳥名前野東遺跡」茨城県教育財團調査報告第 281 集 2007 年 3 月
- 9) 8) と同じ
- 10) 松崎直美「福島県浜通りにおける中近世集落の諸問題」「東北南部における中近世集落の諸問題」福島県中近世部会平成 12 年度セミナー資料集 2000 年 9 月
- 11) 内原町史編さん委員会「内原町史」通史編 内原町 1996 年 3 月
- 12) 11) と同じ
- 13) 松田政基・齋藤伸明・広岡公男・里原秀夫『峯崎遺跡』結城市文化財調査報告第 7 集 結城市 1996 年 3 月
- 14) 川津法伸・平石尚和『一般国道 50 号結城バイパス改築工事地内埋蔵文化財調査報告書 下り松・油内遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告第 145 集 1999 年 3 月
- 15) 平石尚和「底部に張り出した部をもつ瓶について」「研究ノート」8 号 財団法人茨城県教育財團 1998 年 6 月
- 16) 古川一明「古代東北地方における特殊な形態の煮炊用土器について」「東北歴史博物館研究紀要」15 2014 年 3 月



第25図 寺内遺跡調査区設定図・遺構全体図

## 第4章 寺 内 遺 跡

### 第1節 調査の概要

寺内遺跡は、水戸市の北西部に位置し、桜川右岸の標高45mほどの台地上に立地している。調査面積は1,000m<sup>2</sup>で、調査前の現況は畠地である。

調査の結果、堅穴建物跡6棟（奈良時代）、方形堅穴造構1棟（時期不明）、土坑26基（時期不明）、井戸跡1基（時期不明）、道路跡1条（時期不明）、溝跡6条（時期不明）、堀跡1条（室町・安土桃山時代）、ピット群1か所（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に5箱出土している。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（細口壺）、土師器（壺・甕）、須恵器（壺・高台付壺・蓋・長頸瓶・甕・瓶）、陶器（鉢・甕）、磁器（青磁碗）、石器（砥石）、鐵滓（椀状滓）、瓦（平瓦）などである。

### 第2節 基 本 層 序

調査区北東部の台地上の平坦部(H13e4区)にテストピットを設定し、基本土層（第26図）の観察を行った。

第1層は、黒褐色を呈する表土と擾乱層である。ロームブロックを少量含み、粘性・締まりともに普通で、層厚は18~35cmである。

第2層は、褐色を呈するソフトローム層である。粘性・締まりともに普通で、層厚は28~32cmである。

第3層は、にぶい褐色を呈するハードローム層である。粘性は普通で、締まりが強く、層厚は16~38cmである。

第4層は、にぶい橙色を呈するハードローム層である。砂粒を中量含み、粘性は普通で、締まりが強く、層厚は6~34cmである。

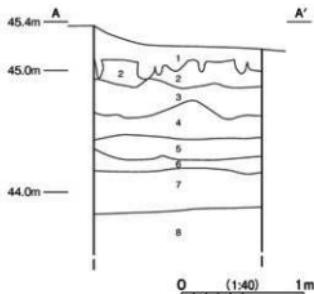
第5層は、褐色を呈するハードローム層である。鹿沼軽石粒・白色粒子を少量含み、粘性は普通で、締まりが強く、層厚は8~42cmである。

第6層は、橙色を呈する鹿沼軽石層の漸移層である。鹿沼軽石粒を少量含み、粘性は普通で、締まりが強く、層厚は7~16cmである。

第7層は、黄橙を呈する鹿沼軽石層である。粘性は弱く、締まりが極めて強く、層厚は18~36cmである。

第8層は、灰褐色を呈するハードローム層である。粘性・締まりともに非常に強い。層厚は不明であるが、50cmまで確認した。

遺構は、第2層の上面で確認した。



第26図 寺内遺跡基本土層図（遺構全体図参照）

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 奈良時代の遺構と遺物

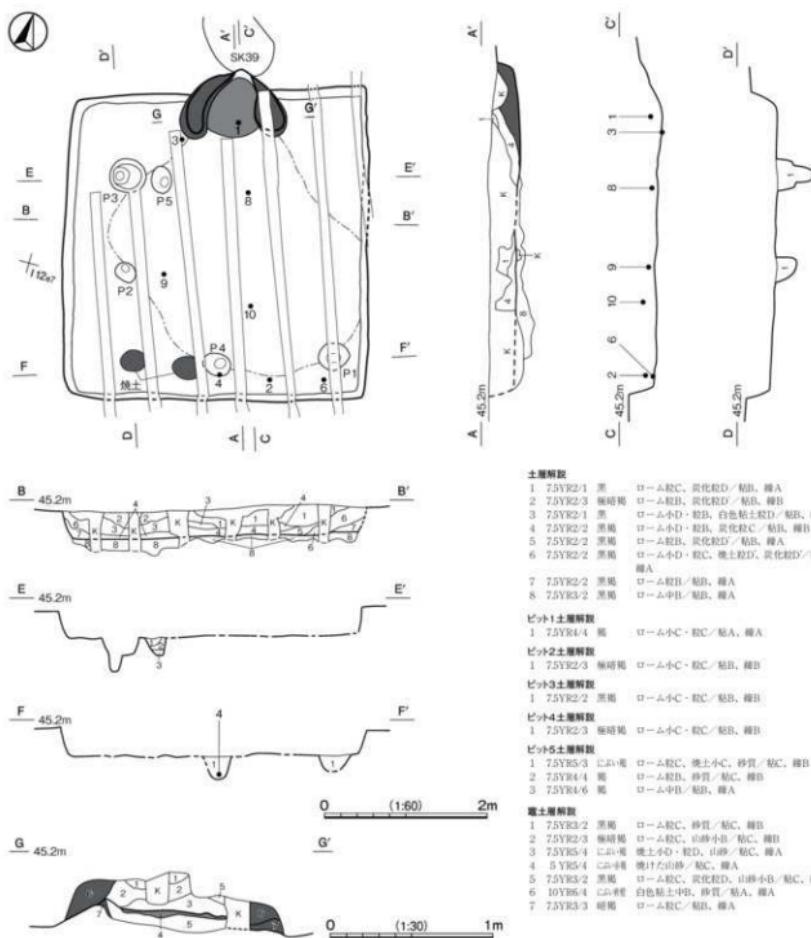
堅穴建物跡6棟を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

##### 堅穴建物跡

###### 第1号堅穴建物跡 (第27・28図 第14表 PL 7・10)

位置 調査区南部のII2d7区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第39号土坑を掘り込んでいる。



第27図 第1号堅穴建物跡実測図

**規模と形状** 長軸 4.08 m、短軸 3.74 m の方形で、主軸方向は N-11°-W である。壁は高さ 32~38cm で、ほぼ外傾している。

**床** 地山を 10~17cm 剥ぎ下げ、ロームブロックを含んだ第 8 層を埋土して構築し、ほぼ平坦で、竈前方部から南部にかけて硬化している。

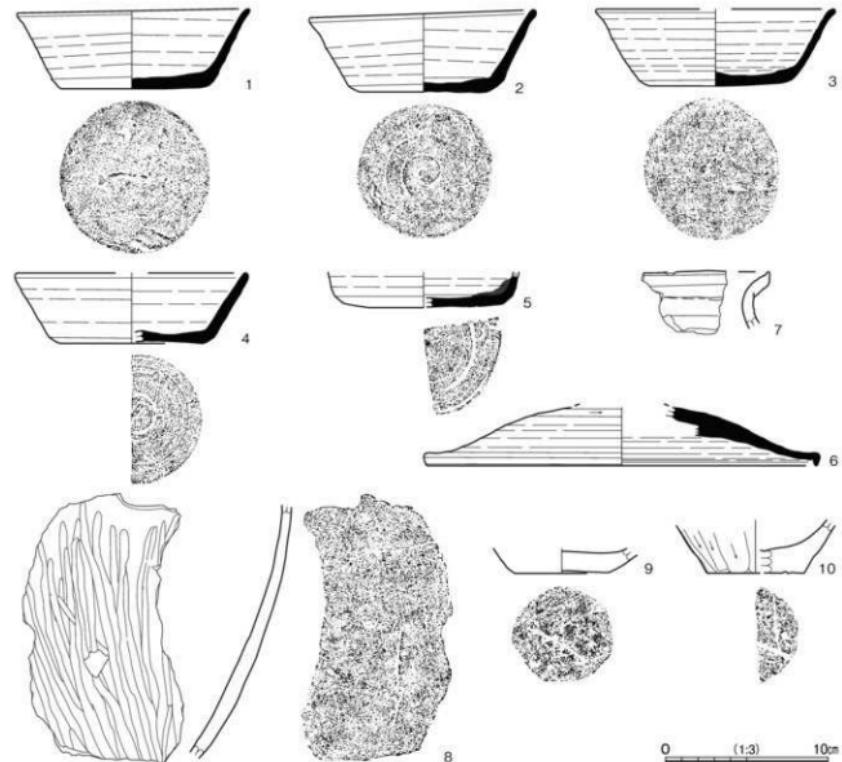
**竈** 北壁中央部に位置している。規模は焼き口から煙道部まで 84cm で、燃焼部は 53cm である。両袖部は地山の上に、白色粘土、砂、ロームブロックを含む第 6・7 層を積み上げて構築している。火床部は、楕円形に最大 12cm ほど掘りくぼめ、山砂やローム粒子、炭化粒子を含む第 5 層を埋土して整地している。火床面は、第 4 層上面で、赤変硬化している。煙道部は壁外に 25cm ほど張り出し、火床部から緩やかに立ち上がりっている。

**ピット** 5 か所。P.4 は、径 40cm、深さ 35cm で、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P.1~P.3・P.5 は、径 25~45cm、深さ 13~44cm で、性格は不明である。

**覆土** 7 層に分層できる。ロームブロックを含み、不規則な堆積状況をしていることから、人為堆積である。

**遺物出土状況** 土師器片 59 点（壺 3、甕 56）、須恵器片 109 点（壺 83・高台付壺 1、蓋 7・盤 1・長頸壺 1、甕 16）が出土している。1 は竈内から、2 は正位の状態で南壁際の覆土下層から、3 は竈付近から、4 は P.4 内から、5・7・8 は覆土中から、6 は南壁際の床面から、9・10 は中央部南側の覆土下層から、それぞれ出土している。南壁際西部で焼土を 2 か所確認した。ほかに、混入した繩文土器片 2 点（深鉢）、焼成粘土塊 1 点が覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から 8 世紀後葉と考えられる。



第 28 図 第 1 号竪穴建物跡出土遺物実測図

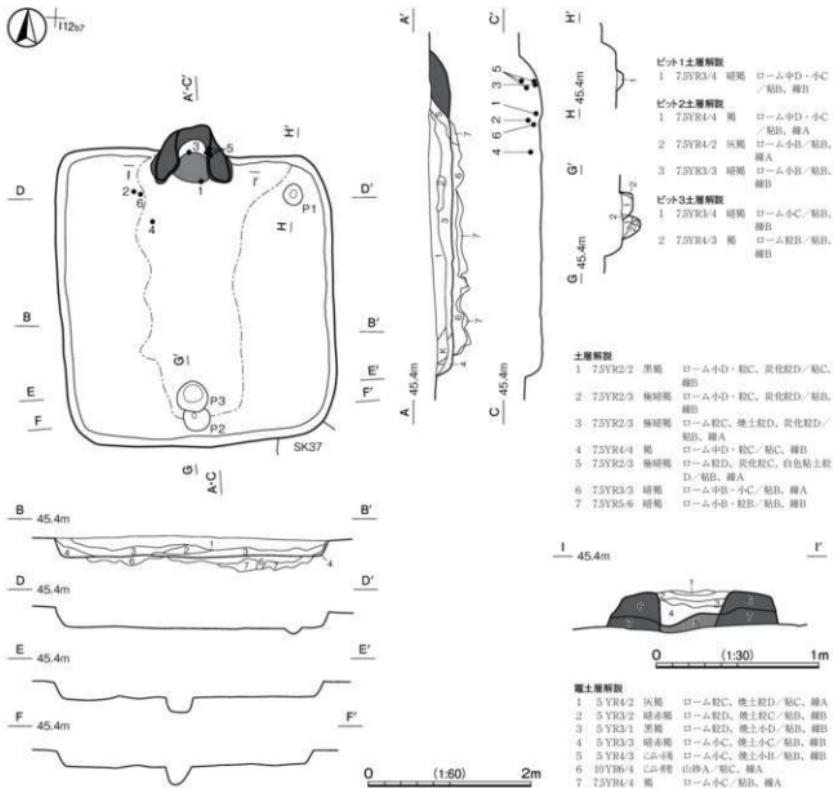
第14表 第1号竪穴建物跡出土遺物一覧（第28図）

番号	種別	形態	口径	脚高	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	环	14.2	4.9	9.0	長石・石英・雲母 繊維	灰白	普通	ロクロ成形 底部回転ヘラ削り後ヘラナダ調整	竪穴床部内 PL10	100%新泥化 PL10
2	須恵器	环	13.8	5.1	7.8	長石・白色針状鉱物 繊維	暗灰黄	普通	ロクロ成形 底部回転ヘラ削り	覆土下層 PL10	95%木葉下層 PL10
3	須恵器	环	[14.1]	4.7	8.2	長石・石英・繊維 白色針状鉱物	にぶい橙	普通	ロクロ成形 底部回転ヘラ削り後一方のヘラ削り	床面 PL10	60%木葉下層 PL10
4	須恵器	环	[14.1]	4.3	[8.7]	長石・石英・雲母 白色針状鉱物	黄灰	普通	ロクロ成形 底部回転ヘラ削り	P 4 内 PL10	30%木葉下層 PL10
5	須恵器	环	-	(2.2)	[9.8]	長石・石英・雲母 白色針状鉱物	黄灰	普通	ロクロ成形 底部回転ヘラ削り 内面保付着	覆土 PL10	10%木葉下層 PL10
6	須恵器	蓋	-	(3.6)	[24.0]	長石・石英・雲母 白色針状鉱物	褐色	普通	ロクロ成形 天井部回転ヘラ削り	床面 PL10	30%木葉下層 PL10
7	土器部	甕	-	(3.7)	-	長石・石英・雲母 黑色粒子・繊維	にぶい橙	普通	内外面ヘラナダ	覆土	5%
8	土器部	甕	-	(16.0)	-	長石・石英・雲母 半透明	にぶい赤褐色	普通	外面ヘラ削き 内面ヘラナダ	覆土	10%
9	土器部	甕	-	(1.5)	5.8	長石・石英・繊維	にぶい橙	普通	底部木葉痕	覆土下層	5%
10	土器部	甕	-	(3.3)	[6.0]	長石・石英・雲母	橙	普通	外表面のヘラ削り 内面ヘラナダ 底部木葉痕	覆土下層	5%

第2号竪穴建物跡（第29・30図 第15表 PL 8・10）

位置 調査区南部のII2b7区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長軸3.94m、短軸3.42mの長方形で、主軸方向はN-5°-Wである。壁は高さ16~24cmで、外傾している。



第29図 第2号竪穴建物跡実測図

**床** 地山を7~18cmほど掘り下げ、ロームブロックを含んだ第6・7層を埋土して構築し、ほぼ平坦で、竈前方部から南部中央にかけて帯状に硬化している。

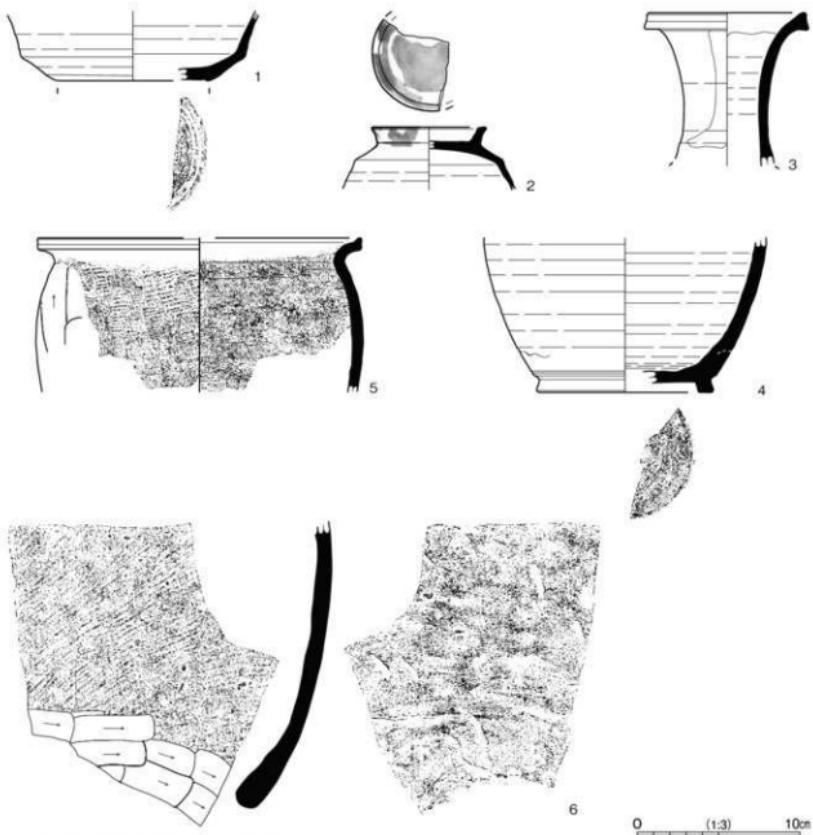
**竈** 北壁中央部に位置している。規模は焚き口から煙道部まで71cmで、燃焼部幅は34cmである。袖部は地山の上に、山砂、ロームブロックを含む第6・7層を積み上げて構築している。火床部は、楕円形に最大5cm掘りくぼめ、焼土ブロックやロームブロックを含む第5層を埋土して整地している。火床面は、第5層上面で、赤変硬化している。煙道部は、壁外に35cmほど張り出し、火床部から緩やかに立ち上がっている。

**ピット** 3か所。P 2は径32cm、深さ25cm、P 3は径37cm、深さ15cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。P 1は径24cm、深さ8cmで性格は不明である。

**覆土** 5層に分層できる。第1層は含有物が少なく、周囲からの流入を示す堆積状況から自然堆積で、第2層以下はロームブロック、焼土ブロックを含み、不規則な堆積状況をしていることから、人為堆積である。

**遺物出土状況** 土師器片55点（坏2・高台付坏1・甕52）、須恵器片46点（坏27・高台付坏3・蓋2・長頸壺1・長頸瓶2・甕9・瓶2）が出土している。1・3・5は竈内から、2・4・6は竈付近の覆土下層から、それぞれ出土している。ほかに、混入した縄文土器片1点（深鉢）が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第30図 第2号竖穴建物跡出土遺物実測図

第15表 第2号竪穴建物跡出土遺物一覧（第30図）

番号	種別	器種	口径	高さ	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	高台付环	-	(43)	(95)	長石、白灰、黑色粒子 白色針状鉱物	にぼい黄褐色	普通	クロコ形底部回転ヘラ削り 高台欠損	窓内	30%木葉下層
2	須恵器	高台付环	7.0	(38)	-	長石、石英、白色 針状鉱物	灰褐色	普通	底部外面墨直底部回転ヘラ削り 穏軸用	覆土下層	30%木葉下層 PL10
3	須恵器	長頭瓶	9.5	(9.4)	-	長石、石英、黑色粒子 白色針状鉱物	灰黃褐色	普通	部体欠損 クロコ形 内外面自然軸	窓内	30%木葉下層 PL10
4	須恵器	大頭瓶	-	(9.5)	(106)	長石、石英、黑色粒子 白色針状鉱物	黄褐色	普通	クロコ形 外面下端粘土織目痕 底部ヘラナデ調整	覆土下層	30%木葉下層
5	須恵器	甕	[19.8]	(9.4)	-	長石、石英、黑色粒子 白色粒子	褐	酸化	体部外表面縦のヘラ削り後平行叩き 内面當て具痕	窓内	30% PL10
6	須恵器	甕	-	(17.5)	-	長石、石英、黑色粒子 白色針状鉱物	黄褐色	普通	把手部欠損 外面上半斜面の平行叩き 手縫横段のへ ナ削り 内部當て具痕	覆土下層	10%木葉下層

## 第3号竪穴建物跡（第31・32図 第16表 PL7・8・10）

位置 調査区南部のII2c8区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

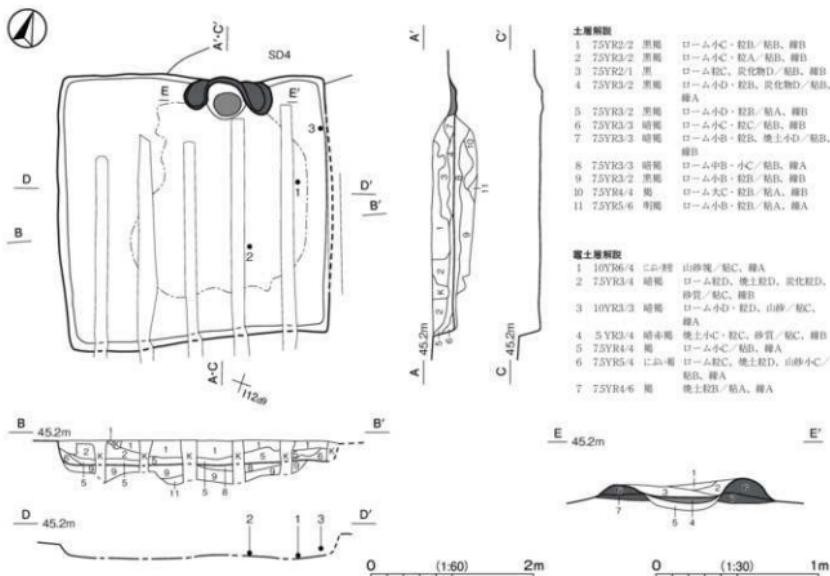
重複関係 第4号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸3.39m、短軸3.18mの方形で、主軸方向はN-18°-Wである。壁は高さ18~30cmで、外傾している。

床 地山を9~28cm掘り下げ、ロームブロックを含んだ第8~11層を埋土して構築し、ほぼ平坦で、西部と壁際を除いて硬化している。

壁 北壁中央部に位置している。規模は焚き口から煙道部まで52cmで、燃焼部幅は42cmである。両袖部は地山の上に、山砂、ロームブロック、焼土粒を含む第6・7層を積み上げて構築されている。火床部は、楕円形に最大5cm掘りくぼめ、焼土ブロックやロームブロックを含む第5層を埋土し整地している。火床面は、第4層上面で赤変硬化している。煙道部は壁外に8cmほど張り出し、火床部から緩やかに立ち上がっている。

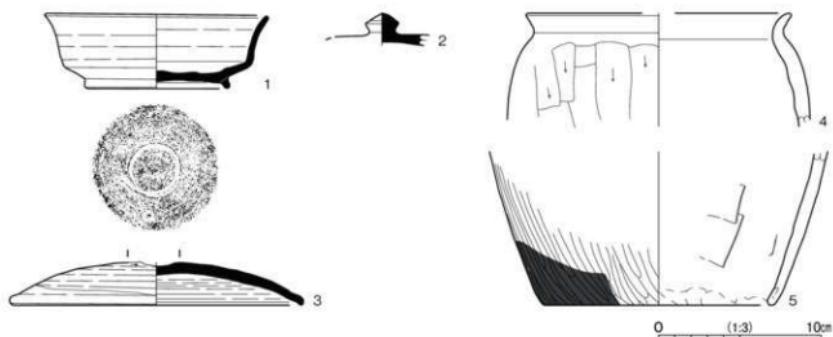
覆土 7層に分層できる。ロームブロックや炭化物を含んでいることや、不規則な堆積状況から、人為堆積である。



第31図 第3号竪穴建物跡実測図

**遺物出土状況** 土師器片 47 点（甕 46・瓶 1）、須恵器片 55 点（坏 27・高台付坏 2・蓋 7・盤 2・甕 17）が、覆土から散在して出土している。1・3は東部の覆土下層から、2は中央部やや南側の覆土下層から、4・5は覆土中から、それぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から 8 世紀中葉と考えられる。



第32図 第3号竪穴建物跡出土遺物実測図

第16表 第3号竪穴建物跡出土遺物一覧（第32図）

番号	種 別	器 形	口径	底高	底状	胎 土	色 調	焼成	特 徴	出土位置	備 考
1	須恵器	高台付坏	13.6	4.6	8.6	長石・石英・褐色 分子・白色乳状物	褐灰	普通	底部回転へラ削り 高台貼付	覆土下層	80%木柴下窯 PL.10
2	須恵器	蓋	-	(1.9)	-	長石・石英・白色 針状結晶・細縫	褐灰	普通	柄部室珠形 天井部回転へラ削り	覆土下層	5%木柴下窯 PL.10
3	須恵器	蓋	-	(2.6)	18.0	長石・石英・白色 針状結晶・細縫	内面黃灰 外面部黃褐色	普通	柄部欠損 天井部回転へラ削り 外面の縁から内面に かけて自然崩	覆土下層	80%木柴下窯 PL.10
4	土師器	小型甕	[16.0]	(7.0)	-	長石・石英・褐色	灰黃褐	普通	口縁部外面部へラナデ 体部外面部のへラ削り 内 部へラナデ	覆土	5%
5	土師器	瓶	-	(9.4)	[14.2]	長石・石英・褐色 赤色粘子	橙	普通	外面部のへラ削き 内面横部のへラナデ 下端指頭 によるナデ	覆土	10%

第4号竪穴建物跡（第33図 第17表 PL.8）

**位置** 調査区南西部のII2a8区、標高 45 m ほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第5・6号溝跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸 3.58 m、短軸 3.08 m の不整長方形で、主軸方向は N - 12° - W である。壁は高さ 35 ~ 40 cm で、外傾している。

**床** ほぼ平坦である。地山を 15 ~ 34 cm ほど掘り下げ、ロームブロックを含んだ第 7 ~ 9 層を埋土して整地している。

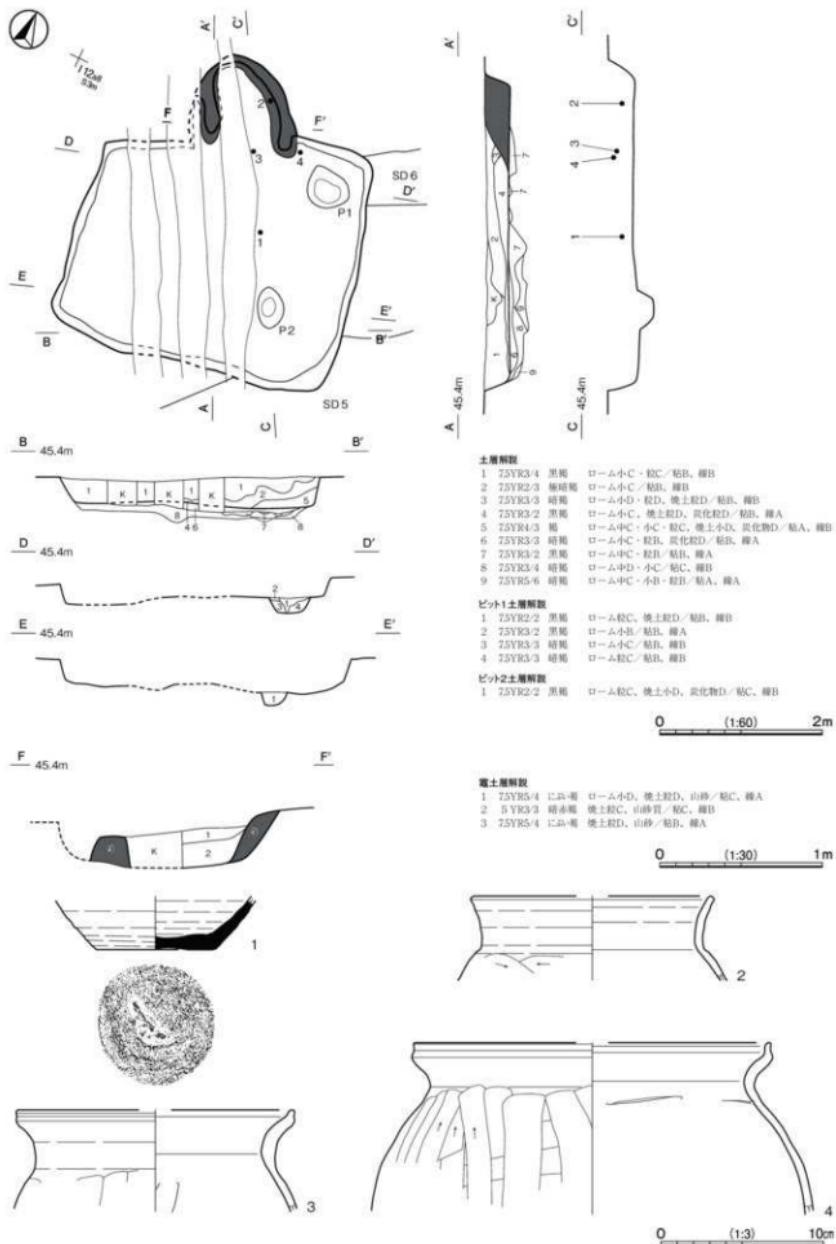
**竪** 北壁中央部に位置している。規模は焼き口から煙道部まで 124 cm で、燃焼部幅は 68 cm である。西袖部は擾乱のため遺存状況が不良である。東袖部は、山砂、焼土粒を含む第 3 層で構築している。火床部は、床面と同じ高さである。火床面は、認められなかった。煙道部は、壁外に 70 cm ほど張り出し、火床部から緩やかに立ち上っている。

**ピット** 2 か所。P.1 は長径 54 cm、短径 51 cm で、深さ 26 cm である。P.2 は長径 50 cm、短径 33 cm で、深さ 13 cm で、性格は不明である。

**覆土** 5 層に分層できる。ロームブロック、焼土ブロック、炭化物を含んでいることや、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

**遺物出土状況** 土師器片 42 点（甕）、須恵器片 53 点（坏 31・蓋 1・盤 2・甕 19）が、竪内と覆土下層から散在して出土している。1 は中央部の覆土下層から、2・3 は竪の覆土下層から、4 は北東部の覆土下層から、それぞれ出土している。ほかに、混入した磁器片 2 点（碗・急須）が出土している。

**所見** 時期は、出土土器から 8 世紀後葉と考えられる。



第33図 第4号堅穴建物跡・出土遺物実測図

第17表 第4号堅穴建物跡出土遺物一覧（第33図）

番号	種別	基種	口徑	器高	底径	胎	土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	壺	—	(33)	7.4	長石・石英・粗纖維質 (柱状斜紋質)	浅黄	普通	底部斜削ヘラ削り	覆土下層	60%本業下層	
2	土師器	甕	[143]	(5.2)	—	灰石・石英・粗纖維質 (黒い枝子・細縫)	明赤褐	普通	口端部の外側横筋のナデ 口内面ヘラ削り	覆土下層	10%	
3	土師器	甕	[170]	(6.2)	—	長石・石英・雲母・ 赤い枝子	橙	普通	口端部の外側横筋のナデ 底部外側横筋のナデ	覆土下層	10%	
4	土師器	甕	[220]	(10.5)	—	長石・石英・雲母・ 赤い枝子・葉巻形	にじみ 暗褐色	普通	口端部の外側横筋のナデ 底部外側横筋のナデ 内面ヘラ削り 底部外側横筋のナデ	覆土下層	10%	

### 第5号竪穴建物跡（第34図 第18表 PL.8）

**位置** 調査区南西部のII2a6区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 大半が調査区域外のため、確認できた規模は、南北軸3.12m、東西軸2.29mである。ほぼ方角の一部であることから、方形や長方形と推測できる。壁は高さ48~52cmで、ほぼ直立している。

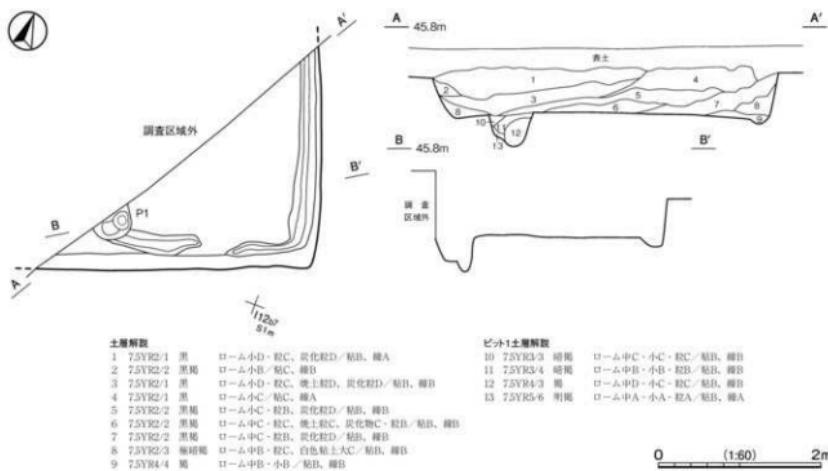
床 ほぼ平坦である。確認できた範囲での壁下には、壁癌が巡っている。

**ピット** 1か所。P.1は径45cm、深さ42cmで、底面に段を有する。配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。

**覆土** 9層に分層できる。ロームブロックを食んでいることや、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

**遺物出土状況** 土師器片 19 点（壺）、須恵器片 11 点（壺 7・蓋 2・甕 2）が出土している。1～4 は覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第34図 第5号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第18表 第5号堅穴建物跡出土遺物一覧（第34図）

番号	種 別	部 位	口幅	厚高	底径	胎 土	色 調	焼成	特 徴	出土位置	備 考
1	須恵器	环	[113]	3.1	(7.1)	長石・石英・黒鐵 粒子	灰褐	普通	体部外下面ヘラ削り 底面回転ヘラ削り	覆土	30%
2	須恵器	环	-	(4.2)	-	長石・石英・黒鐵 粒子	灰白	普通	ロクロ成形	覆土	5%
3	須恵器	环	[123]	3.1	(6.4)	長石・石英・黒色 粒子	灰黄褐	酸化	底部回転ヘラ削り	覆土	10%新治窯
4	須恵器	蓋	-	(2.3)	(17.2)	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	天井部回転ヘラ削り	覆土	10%新治窯

第6号堅穴建物跡(第35・36図 第19表 PL 8~10)

位置 検査区南西部のH12J7区、標高45mほど  
の台地平坦部に位置している。

規模と形状 北西部が検査区域外のため、確認でき  
た規模は南北軸3.89m、東西軸3.15mの長方形  
で、主軸方向はN-19°Wである。壁は高さ29  
~36cmで、ほぼ直立している。

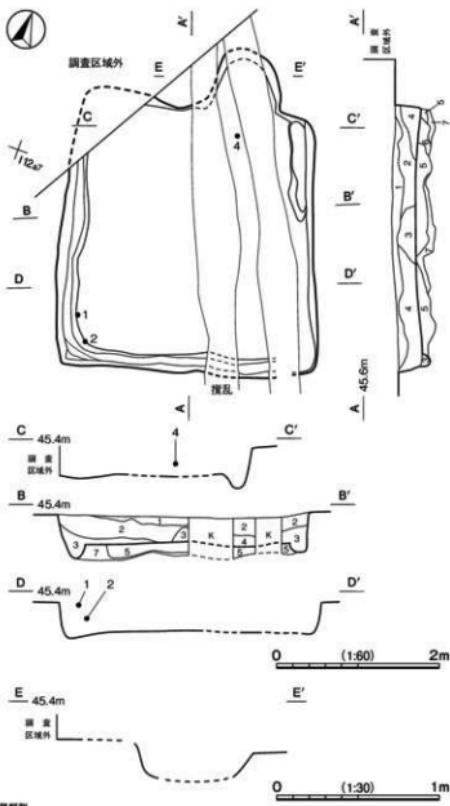
床 地山を16~24cm掘り下げ、ロームブロック  
を含んだ第5~7層を埋土して構築している。中  
央部がやや高く、顯著な硬化面は確認できなか  
つた。北壁と東壁の一部を除いて、壁下に壁溝が巡  
っている。

竈 北壁やや東寄りに位置している。確認でき  
た規模は焚き口から煙道部まで120cmで、燃焼部幅  
は70cmである。袖部は確認できなかった。確認で  
きた火床部には被熱を受けた痕跡は認められなか  
つた。煙道部は壁外に70cmほど張り出していると  
推測される。

覆土 4層に分層できる。ロームブロックを含ん  
でいることや、不規則な堆積状況から、人為堆積  
である。

遺物出土状況 土師器片29点(环5・蓋24)、須  
恵器片31点(环14・蓋2・壺13・瓶2)が出土  
している。1は南東コーナー部の覆土上層から、  
2は南東コーナー部の覆土下層から、3は覆土  
中から、4は中央部北寄りの覆土下層から、それ  
ぞれ出土している。ほかに、混入した陶器片1点  
(壺)、瓦片2点(平瓦)が出土している。

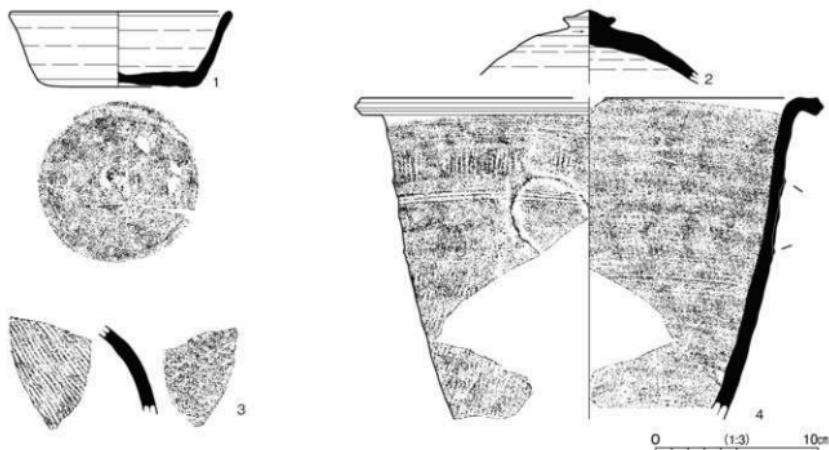
所見 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えら  
れる。



第35図 第6号堅穴建物跡実測図

第19表 第6号堅穴建物跡出土遺物一覧(第36図)

番号	種 別	部 位	口幅	厚高	底径	胎 土	色 調	焼成	特 徴	出土位置	備 考
1	須恵器	环	(13.1)	4.7	8.1	長石・石英・黒色粒 子・白色針状鉱物	灰黄	普通	底部回転ヘラ削り	覆土上層	60% 木炭下窯
2	須恵器	蓋	-	(4.4)	-	長石・石英・黒色粒 子・白色針状鉱物	黃褐	普通	横部宝珠形 天井部回転ヘラ削り	覆土下層	40% PL10
3	須恵器	蓋	-	(5.4)	-	長石・石英・白色 粒子	灰褐	普通	外側斜位の平行叩き 内面無文の当て具痕	覆土	5%
4	須恵器	瓶	[28.2]	(19.8)	-	長石・石英・黒色粒 子・白色針状鉱物	にぶい褐	普通	把手部欠損 外側斜位の平行叩き+横位の櫛書き二重 内面無文の当て具痕	覆土下層	10% PL10 木炭下窯



第36図 第6号堅穴建物跡出土遺物実測図

第20表 奈良時代堅穴建物跡一覧（第27～36図）

番号	位置	主軸方向	平面形 長軸×短軸(m)	規模 (cm)	標高 (m)	床面 壁構 壁構 土用穴 底入口 ビット 伊・蓋 蓄水穴	覆土	内部施設			主な出土遺物	時期	備考
								壁構	土用穴	底入口			
1	I12d7	N - 11° - W	方形	4.08 × 3.74	32 - 38	平坦	-	-	1	4	壇1	-	人为 烧成粘土塊
2	I12b7	N - 5° - W	長方形	3.91 × 3.42	16 - 24	平坦	-	-	2	1	壇1	-	人为
3	I12e8	N - 18° - W	方形	3.39 × 3.18	18 - 30	平坦	-	-	-	-	壇1	-	人为 土師器 瓢窓器
4	I12a8	N - 12° - W	不規則方形	3.58 × 3.08	35 - 40	平坦	-	-	-	2	壇1	-	人为 土師器 瓢窓器 磁器
5	I12a6	N - 19° - W	[方形未詳]	(3.12) × 2.29	48 - 52	平坦 [底面 全削]	-	1	-	-	-	-	人为
6	I12d7	N - 19° - W	長方形	(3.89) × 3.15	29 - 36	平坦	-	-	-	-	壇1	-	人为 土師器 瓢窓器 陶器 瓦片

## 2 室町・安土桃山時代の遺構と遺物

堀跡1条を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

## 堀跡

## 第1号堀跡（第37図 第21表 PL 6・9・10）

位置 調査区北部のI12h8～E13e3区、標高45 mほどの台地平坦部に位置している。

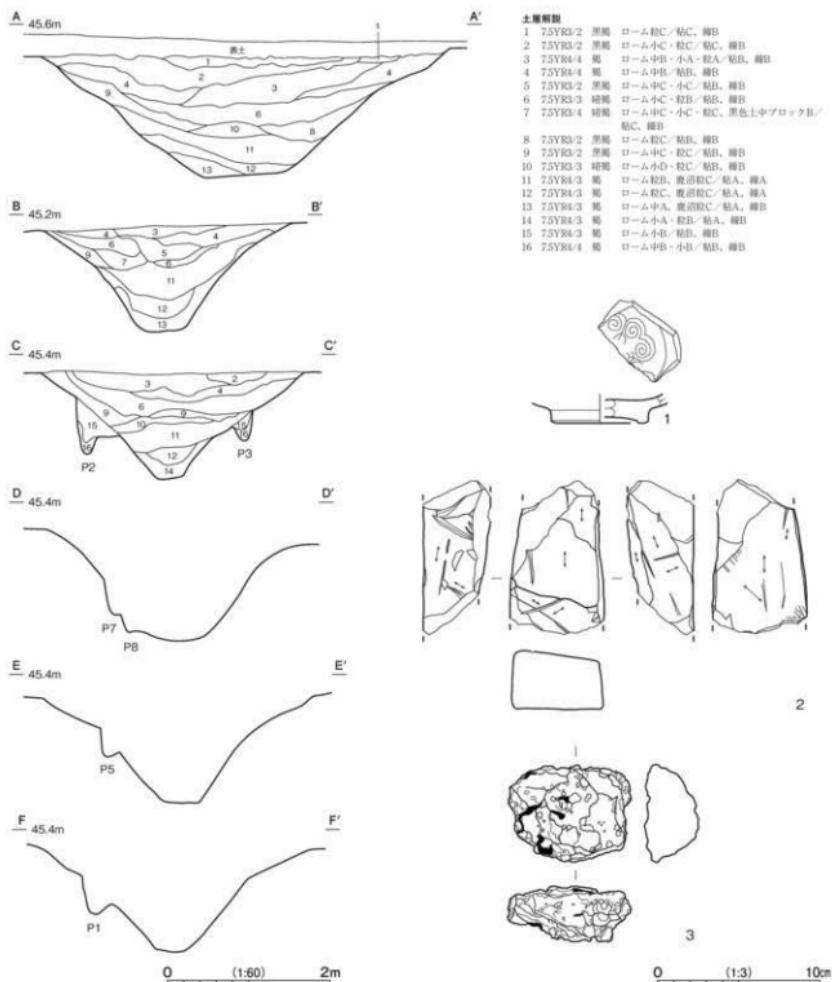
規模と形状 東西方向（N - 73° - E）へ直線状に延びている。確認できた長さは20.16 mで、上幅3.08～4.68 m、下幅0.38～0.78 m、深さ124～135 cmで、東側に向かって緩やかに傾斜している。断面形は逆台形状で、底面は平坦である。

ピット 両側面及び底面から14か所を確認した。北側面は横列状に東西2か所に分かれている。西側のピットは4か所で、径21～52 cm、深さ16～58 cmで、間隔は15～18 mである。東側のピットも4か所で、約5 m空けて東側に径24～61 cm、深さ16～32 cmで、間隔は1.6～2.7 mである。また、底面に径38 cm、深さ18 cmのピットが1か所、南側面の径28～32 cm、深さ26～34 cmである。配置が不規則であることから、性格は不明である。

覆土 ピットを含め、16層に分層できる。ロームブロックを多量に含んでいることや、不規則な堆積状況から、人为堆積である。

遺物の出土状況 磁器片1点（青磁碗）、石器1点（砥石）、鉄滓1点（椀状滓）が覆土中から出土している。ほかに混入した繩文土器片4点（深鉢）、土師器片4点（壺2・高壺1・壺1）、須恵器片214点（壺59・高台付壺19・盤1・蓋4・壺127・長頭壺3・壺1）、江戸時代後期の陶器片2点（擂鉢）が出土している。

所見 廃絶時期は、出土した磁器から、15世紀後半～16世紀末と考えられる。また、隣接する大足館跡の一部と推定されている転跡と、本跡の軸方向がほぼ一致していることから、同時性や関連性が窺える。



第37図 第1号堀跡・出土遺物実測図

第21表 第1号堀跡出土遺物一覧(第37図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	輪廻	産地	出土位置	備考
1	青磁	瓶	-	(18)	[54]	緻密	灰オーブン 見込み割花文 頸部出し高台 外気泡を除き 施釉 露胎黄灰 に古い青磁	青磁瓶	鹿児島	覆土	10% PL10
2	磁石	(94)	(59)	(41)	(299.15)	砂岩	磁面5面 刃先彫痕			覆土	
3	鉄津	7.6	6.1	3.6	196.69	鉄	極薄津 着紐 タル付着			覆土	

### 3 その他の遺構と遺物

時期や性格が明確にできなかった、方形堅穴遺構1棟、土坑26基、井戸跡1基、溝跡6条、ピット群1か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

#### (1) 方形堅穴遺構

##### 第1号方形堅穴遺構 (第38図 PL 9)

**位置** 調査区南西部のII2d9区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第11号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 南東部は調査区域外のため、確認できた規模は南北軸2.86m、東西軸2.14mである。平面形は長方形と推測できる。主軸方向はN-27°-Wである。壁は高さ55~58cmで、ほぼ直立している。

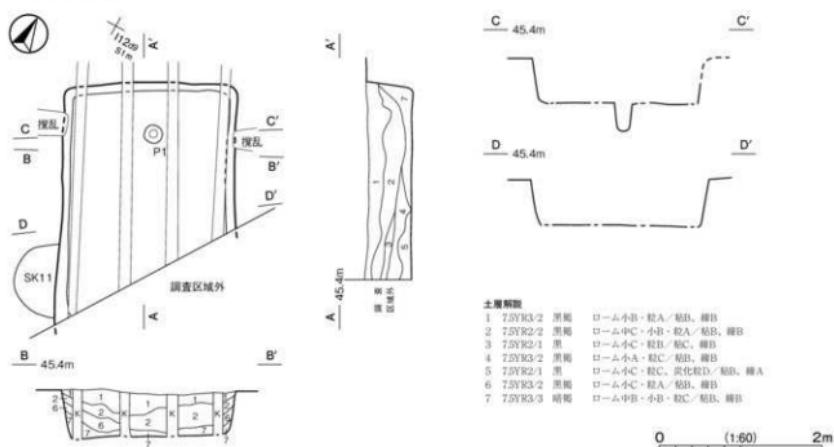
**床** 平坦で、調査区内の確認できた部分は全域に亘って硬化している。

**ピット** 1か所。P1は径42cm、深さ34cmで、形状や配置から出入り口施設のピットあるいは、主柱穴と推定できる。

**覆土** 7層に分層できる。ロームブロックを含んでいることや、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

**遺物出土状況** 混入した土師器片4点(甕)、須恵器片24点(环15・高台付1・蓋2・甕6)、石英製剝片1点が出土している。

**所見** 混入遺物しか出土していないため、詳細な時期は不明であるが、形状から中・近世の遺構で、性格は倉庫などと考えられる。



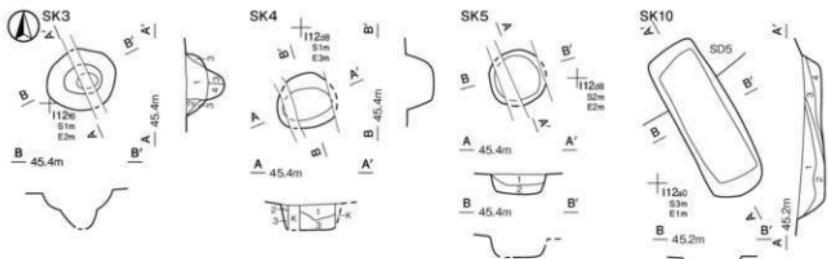
第38図 第1号方形堅穴遺構実測図

#### (2) 土坑

土坑26基は、実測図(第39・40図)と一覧(第22・23表)で記載する。

第22表 その他の土坑一覧 (1)

番号	位置	長辺方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長辺×短辺(m)	深さ(cm)					
3	II2d6 N-82°-E	楕円形	0.85×0.77	46	外傾	U字状	人為	-	-	-
4	II2d8	-	円形	0.73×0.68	34	外傾	平坦	人為/自然	土師器 須恵器	-
5	II2d8	-	円形	0.71×0.70	27	外傾	平坦	人為	土師器 須恵器	SD 5→本跡
10	II2d0 N-29°-W	長方形	2.30×0.72	34	外傾	平坦	人為	-	-	SD 4·5→本跡
11	II2d9	-	[円形] [楕円形]	0.93×0.50	14	外傾	平坦	人為	-	-
16	II2d9 N-16°-W	楕円形	0.64×0.50	18	外傾	平坦	人為	-	-	-



#### 第3号土坑土層解説

- 1 7SYR1-2 黒層 ローム小C・粘B・粘C.
- 2 7SYR1-2 黑層 粘B
- 3 7SYR1-4 黑層 ローム中A・粘B・粘A.
- 4 7SYR1-3 嗜塩 B-A・小B・粘A・粘C.

#### 第4号土坑土層解説

- 1 7SYR3-2 黑層 ローム粘C・粘C・砂質
- 2 7SYR3-1 黑層 粘C・砂質
- 3 7SYR3-3 嗜塩 B-A・粘B・粘C.

#### 第5号土坑土層解説

- 1 7SYR2-2 黑層 ローム中D・粘C・粘C・粘B.
- 2 7SYR2-2 黑層 粘C・砂質

#### 第6号土坑土層解説

- 1 7SYR2-2 黑層 ローム粘C・粘C・粘B.
- 2 7SYR2-3 梅暗層 粘B
- 3 7SYR2-3 黑層 B-A・粘B・粘C・粘A.
- 4 7SYR2-3 梅暗層 粘B

#### SK11

#### SK16

#### SK19

#### SK26

#### 第11号土坑土層解説

- 1 7SYR2-1 黑層 ローム粘C・粘C・粘B.
- 2 7SYR2-1 黑層 ローム小D・粘D・粘C・粘B.

#### 第16号土坑土層解説

- 1 7SYR3-3 黑層 ローム粘C・粘C・砂質
- 2 7SYR4-3 黑層 B-A・粘D・粘C・粘B.

#### 第19号土坑土層解説

- 1 7SYR2-2 黑層 ローム小C・粘C・粘C・粘B.
- 2 7SYR2-2 黑層 粘B・砂質
- 3 7SYR4-4 黑層 ローム小B・粘B・粘B.

#### 第26号土坑土層解説

- 1 7SYR2-2 黑層 B-A・粘B・粘C・粘B.
- 2 7SYR4-4 黑層 粘B
- 3 7SYR4-3 黑層 B-A・小D・粘B・粘B.
- 4 7SYR4-3 黑層 B-A・小C・粘C・砂質粘B・粘B.

#### SK29

#### SK33-34-35

#### 第29号土坑土層解説

- 1 7SYR2-3 梅暗層 ローム小D・粘C・粘C・粘B.
- 2 7SYR2-3 黑層 ローム小D・粘B・粘B・粘B.
- 3 7SYR4-4 黑層 ローム小B・粘B・粘B.
- 4 7SYR4-4 中B-A・粘A.

#### SK31

#### 第33号土坑土層解説

- 1 7SYR2-1 黑層 小B・粘C・粘B.
- 2 7SYR2-2 黑層 粘B
- 3 7SYR4-3 黑層 ロームD・砂質

#### 第34号土坑土層解説

- 1 7SYR2-2 黑層 粘C・砂質
- 2 7SYR3-3 梅暗層 粘B・粘B・粘A.

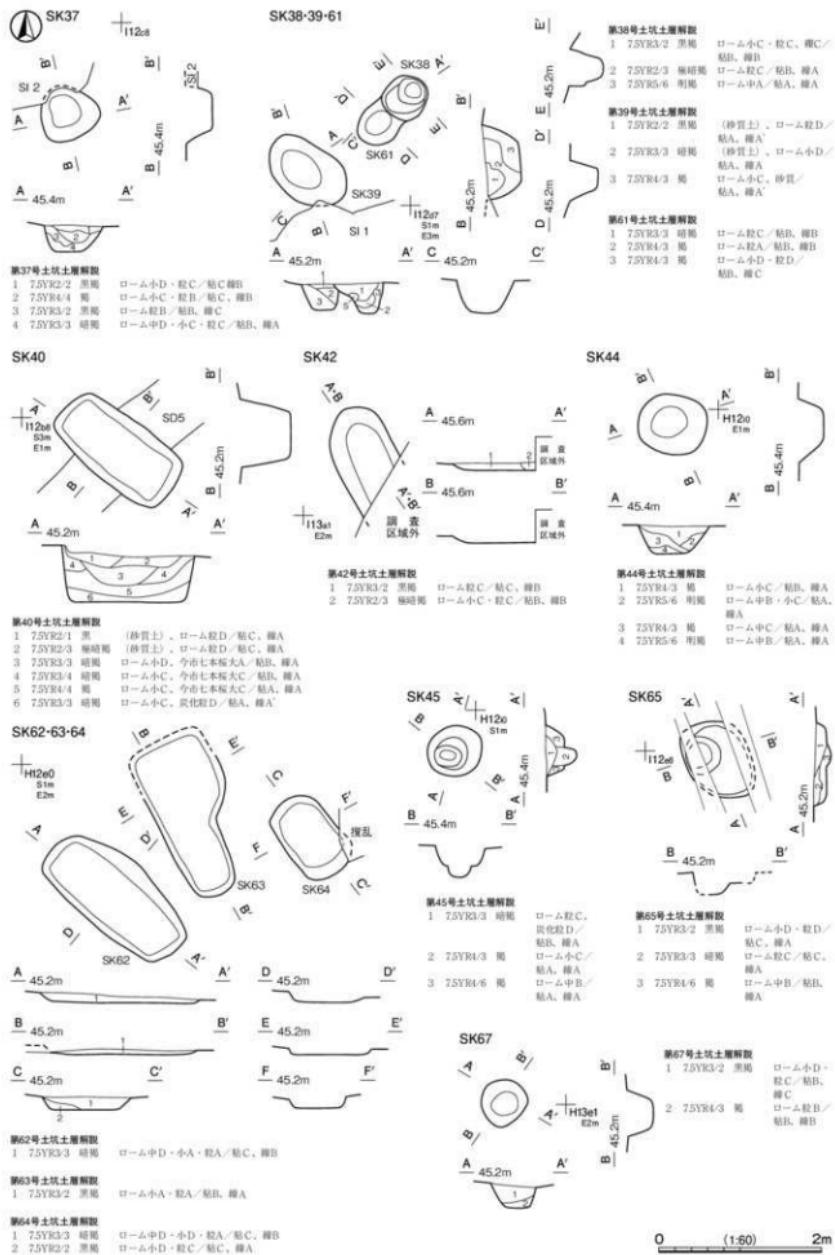
#### 第35号土坑土層解説

- 1 7SYR2-3 梅暗層 粘C・粘C・砂質
- 2 7SYR4-3 黑層 小B・粘B・粘A.

#### 第31号土坑土層解説

- 1 7SYR2-2 黑層 粘D・粘C・粘B.
- 2 7SYR2-2 黑層 B-A・粘B・粘B.
- 3 7SYR3-2 黑層 粘C・粘C・粘B.
- 4 7SYR4-6 黑層 小B・粘B.

第39図 その他の土坑実測図(1)



第40図 その他の土坑実測図(2)

第23表 その他の土坑一覧（2）

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		東 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
19	H12g9	-	円形	0.68 × 0.63	25	外傾	平坦	人為	須恵器	
26	H13g1	N - 87° - W	椭円形	0.60 × 0.50	50	外傾	平坦	人為	-	
29	H13g2	-	円形	0.46 × 0.44	32	外傾	平坦	人為	-	
31	H13g1b	N - 3° - W	椭円形	0.52 × 0.46	26	外傾	平坦	人為	-	
33	H13g2b	N - 3° - E	椭円形	0.67 × 0.55	29	外傾	平坦	人為	-	
34	H13g2d	N - 2° - E	不整圓円形	1.66 × 1.18	20	外傾	平坦	自然 / 人為	土師器 須恵器	
35	H13g2e	-	円形	0.93 × 0.90	14	外傾	平坦	自然 / 人為	-	
37	H12g7	-	円形	0.72 × 0.70	32	外傾	平坦	人為	土師器	本跡 → SI 2
38	H12g7	N - 6° - E	椭円形	0.60 × 0.54	42	外傾	有段	人為	砥石	SK61 → 本跡
39	H12g7	N - 52° - W	椭円形	1.08 × 0.70	40	外傾	平坦	人為	-	本跡 → SI 1
40	H12g8	N - 48° - W	長方形	1.66 × 0.82	62	外傾	平坦	人為	-	SD 5 → 本跡
42	H13g1	N - 25° - W	[椭円形]	(1.08) × 0.76	10	外傾	平坦	人為	-	
44	H12g9	N - 75° - W	椭円形	0.82 × 0.74	31	外傾	平坦	人為	-	
45	H12g9	N - 65° - E	椭円形	0.69 × 0.62	38	外傾	有段	人為	-	
61	H12g7	N - 74° - E	椭円形	0.58 × 0.50	34	外傾	平坦	人為	-	本跡 → SK38
62	H12g6	N - 49° - W	長方形	1.95 × 0.92	12	外傾	平坦	自然	-	
63	H13g1	N - 24° - W	[不要円形]	(1.94) × 1.02	8	外傾	平坦	人為	-	
64	H13g1	N - 33° - W	長方形	0.98 × 0.69	14	外傾	平坦	自然	-	
65	H12g8	N - 22° - W	[椭円形]	0.98 × (0.78)	28	外傾	有段	人為	-	
67	H13g1l	-	円形	0.58 × 0.57	32	外傾	平坦	自然	-	

## (3) 井戸跡

## 第1号井戸跡（第41図）

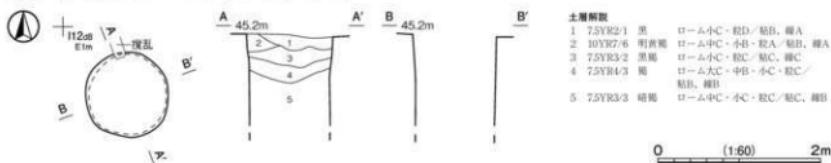
位置 調査区南部のH12d8区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

規模と形状 長径1.06m、短径1.00mの円形で、円筒状を呈し、湧水と崩落の恐れがあったため、確認面から深さ1.10mまでの調査で終了した。

覆土 5層に分層でき、ロームブロックが含まれていることから、人為堆積である。

遺物出土状況 混入した土師器片3点（甕）、須恵器片4点（环）の細片が覆土中から出土している。

所見 出土遺物がないため、時期は不明である。



第41図 第1号井戸跡実測図

## (4) 道路跡

## 第1号道路跡（第42図）

位置 調査区南端部のH12g6～H12g8区、標高45mほどの緩斜面部に位置している。

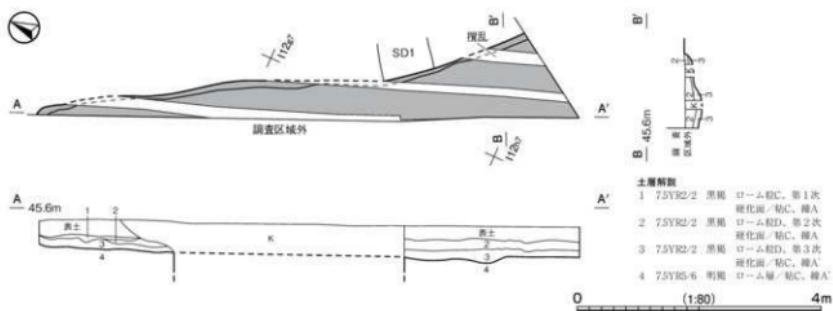
重複関係 第1号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 切土によりハードローム層まで掘り込み、断面形は浅いU字形と考えられる。大半が調査区域外のため、確認できた長さは8.86mで、幅は0.26～1.58mである。H12g7から西方向（N - 25° - W）に向かってほぼ直線状に延びているが、南東部は東側へ緩やかに弯曲している。路面はほぼ平坦で、南東側から北西側に向かって緩やか

に高くなっている。

**構築土** 3層に分層でき、各層の上面が硬化しており、最低3回の補修や改修を行っている。

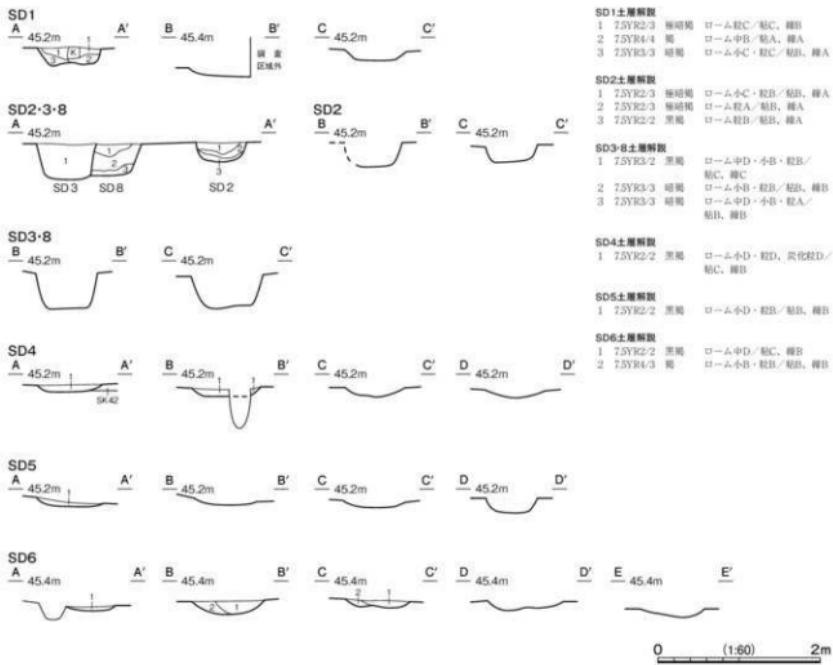
**所見** 遺物がないため、時期は不明である。



第42図 第1号道路跡実測図

### (5) 溝跡

溝跡7条は、全体図（第25図）と一覧（第24表）で記載する。



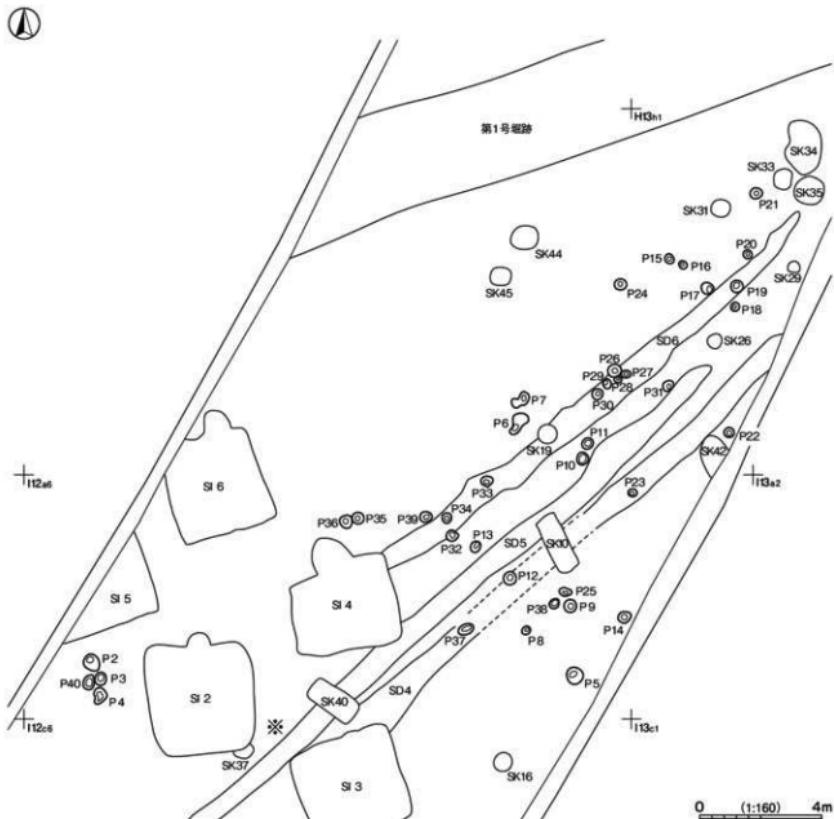
第43図 その他の溝跡実測図

第24表 その他の溝跡一覧（第25・43図）※欠番7は第1号堀跡に変更

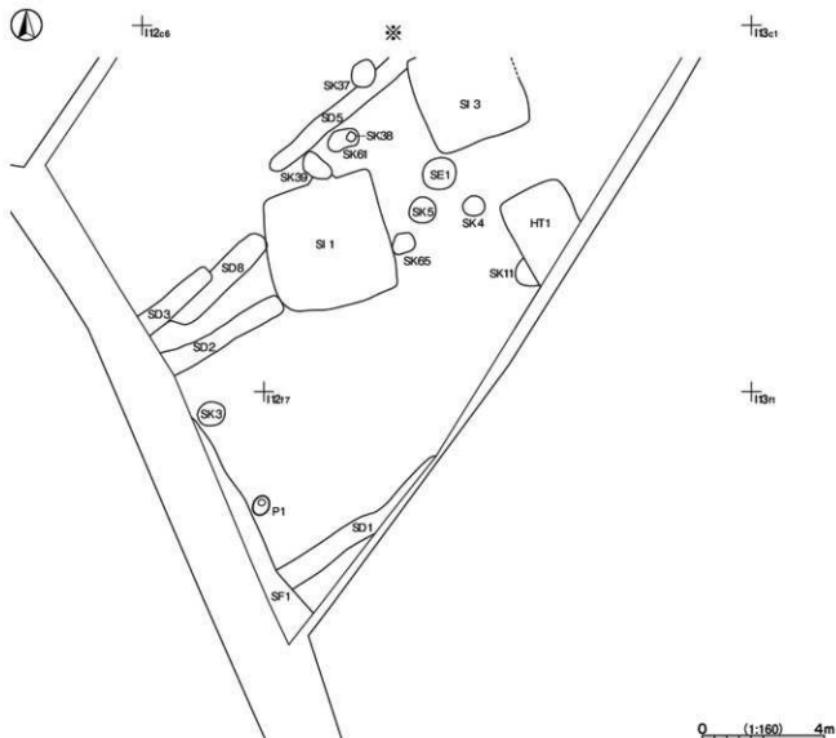
番号	位置	方 向	平面形	規 模			断面	壁面	土	主な出土遺物	備 考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)				
1	H1208 - H1207	N = 60° - E	くの字状	(6.50)	0.66 - 0.84	0.46 - 0.84	10 - 20	非-U形	直立 / 外傾	-	本跡 → SF 1
2	H1236 - H1207	N = 62° - E	直線状	(4.26)	0.56 - 0.86	0.42 - 0.64	20 - 32	U字状	外傾	人為	-
3	H1246	N = 53° - E	直線状	(6.82)	0.72 - 0.84	0.42 - 0.60	25 - 42	逆台形	外傾	人為 土壘器 頸壺器	SD 8 → 本跡
4	H1322 - H1209	N = 50° - E	直線状	19.02	0.60 - 0.86	0.28 - 0.38	8 - 12	非-U形	外傾	人為 頸壺器	本跡 → SI 3 - 4 SK19 → PG 1
5	H1361 - H1207	N = 52° - E	直線状	24.76	0.76 - 1.10	0.40 - 0.70	8 - 27	非-U形	外傾	人為 土壘器 頸壺器	本跡 → SI 4 SK19 → PG 1
6	H1302 - H1209	N = 50° - E	直線状	(17.80)	0.44 - 1.00	0.12 - 0.46	6 - 18	非-U形	外傾	人為 頸壺器 洞片	本跡 → SI 4
8	H1236 - H1206	N = 47° - E	直線状	(4.80)	0.82 - 0.84	0.42 - 0.60	38 - 42	非-U形	外傾	人為	-

#### (6) ピット群

ピット群は1か所を確認した。平面図（第44・45図）と一覧（第25表）で記載する。



第44図 第1号ピット群実測図(1)



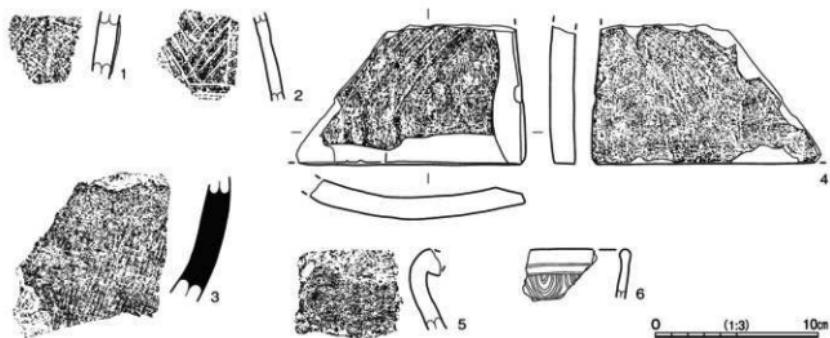
第45図 第1号ピット群実測図(2)

第25表 第1号ピット群ピット一覧 (第44・45図)

番号	位置	平面形	規 模 (cm)			番号	位置	平面形	規 模 (cm)			番号	位置	平面形	規 模 (cm)		
			幅(横) × 高(奥)	幅(横)	深さ				幅(横) × 高(奥)	幅(横)	深さ				幅(横) × 高(奥)	幅(横)	深さ
1	H126	楕円形	0.40 × 0.28	40	40	15	H131	円形	0.30 × 0.28	40	40	29	H129	円形	0.24 × 0.20	12	
2	H126	楕円形	0.47 × 0.35	68		16	H131	円形	0.30 × 0.30	19		30	H129	円形	0.30 × 0.27	40	
3	H126	楕円形	0.37 × 0.30	44		17	H131	円形	0.34 × 0.34	23		31	H130	円形	0.25 × 0.22	27	
4	H126	楕円形	0.53 × 0.28	34		18	H131	楕円形	0.26 × 0.22	44		32	H12a9	円形	0.28 × 0.24	23	
5	H126	楕円形	0.70 × 0.55	54		19	H131	円形	0.26 × 0.24	36		33	H12a9	楕円形	0.34 × 0.23	45	
6	H129	楕円形	0.28 × 0.26	35		20	H131	円形	0.19 × 0.18	30		34	H12a9	円形	0.35 × 0.27	51	
7	H129	楕円形	0.52 × 0.25	30		21	H132	円形	0.34 × 0.25	40		35	H12a8	円形	0.28 × 0.25	17	
8	H126	楕円形	0.36 × 0.26	16		22	H131	円形	0.32 × 0.30	20		36	H12a8	円形	0.33 × 0.31	10	
9	H126	楕円形	0.40 × 0.32	24		23	H12a9	円形	0.14 × 0.14	58		37	H12a9	円形	0.34 × 0.28	46	
10	H129	円形	0.32 × 0.30	36		24	H129	円形	0.35 × 0.25	23		38	H12a9	円形	0.25 × 0.23	74	
11	H129	楕円形	0.40 × 0.30	34		25	H12a9	楕円形	0.39 × 0.25	22		39	H12a9	円形	0.39 × 0.34	15	
12	H12a9	円形	0.30 × 0.30	45		26	H129	円形	0.27 × 0.20	14		40	H126	楕円形	0.42 × 0.26	58	
13	H12a9	円形	0.34 × 0.28	25		27	H129	円形	0.27 × 0.22	13							
14	H126	円形	0.37 × 0.30	32		28	H129	円形	0.24 × 0.20	27							

## (7) 遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物について、実測図（第 46 図 PL10）と一覧（第 26 表）で掲載する。



第 46 図 遺構外出土遺物実測図

第 26 表 遺構外出土遺物一覧（第 46 図）

番号	種別	器種	口径	厚さ	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考	
1	織文土器	深鉢	—	(4.1)	—	長石・石英・細繩	橙	普通	単脚 LR 施文後降帯船付	表土	5%中期後半	
2	裏手土器	縦口盃	—	(5.4)	—	長石・石英・赤色 粒子・細繩	外面部灰褐色 内面にぶい黄	普通	横子目状沈文施文残区両文	表土	5%中期末葉	
3	須恵器	甕	—	(7.2)	—	長石・石英・斜方石子 細繩・白色針状鉱物	灰黃褐	普通	外面部の平右引き 内面無文の当て其瓶 内外面白 火熱	SK27	10%木葉下窓	
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重 量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考	
4	平瓦	(8.1)	(14.2)	(1.6)	(233.77)	長石・石英	黄灰	種垂き造り 四面布目直 凸面板立のハラ崩り後斜化のハラ 引口	SD 7	10%		
番号	種別	器種	口径	厚さ	底径	胎土	色調	焼成	特徴	産地	出土位置	備考
5	陶器	甕	—	(4.8)	—	長石・石英・黒色 粒子・細繩	ぶい黄褐	口縁部下方に重下	無軸	常滑	表土	5%8形式 14世紀後半
6	陶器	鉢	—	(3.0)	—	緻密	オリーブ黄	4本単位の花弁文後二重沈線文	灰釉	印・縁	表土	5%1世紀前半

## 第 4 節 総括

### 1 はじめに

寺内遺跡からは、堅穴建物跡 6 棟、方形堅穴遺構 1 棟、土坑 26 基、井戸跡 1 基、道路跡 1 条、溝跡 6 条、堀跡 1 条、ピット群 1 か所を確認した。結果、奈良時代以降における断続的な土地利用の状況が明らかとなった。ここでは、時代順に特徴のある遺構と遺物について概観し、また、時期の確定できなかった遺構について成果や課題の検討を加え、総括とする。

### 2 奈良時代

堅穴建物跡 6 棟を確認した。内訳は、第 3 号堅穴建物跡が 8 世紀中葉に、そのほかは、8 世紀後葉の時期と考えられる。須恵器を産地別に分けると、胎土に白色針状鉱物を含む木葉下窓の製品と雲母を含む新治窯の製品が 9 対 1 の割合であった。これは、木葉下窓が、当遺跡から 3 km ほどの近い距離にあるという地理的な要因と考えられる。

堅穴建物跡の特徴としては、窓が確認できなかった第 5 号堅穴建物跡を除いて、すべて北壁に窓を付設している。そこで、窓の廃棄の方法に着目し、次の項目ごとに整理して記載する。

### (1) 窯の確認状況

第1～4号竪穴建物跡は、「天井部が崩されて、両袖が残る」もの、第6号竪穴建物跡は、「窯の構築材が残らない」の2つに分類できる。

### (2) 火床部の状況

第1～3号竪穴建物跡は、「火床部に焼土が残る」もの、第4・6号竪穴建物跡は、「火床部に焼土が残らないもの」2つに分類できる。

### (3) 遺物出土状況

第1号竪穴建物跡では、天井部崩落土の上から、ほぼ完形の須恵器壺1点が正位で置かれたような状態で出土している。第2号竪穴建物跡では、火床部の天井部崩落土の上から、須恵器高台付壺・長頸瓶・甕の破片が出土している。第3号竪穴建物跡では、窯天井部崩落層の上から須恵器甕の破片が出土している。第4号竪穴建物跡では、火床部の天井部崩落土の上から、土師器甕の破片が出土している。第6号竪穴建物跡の窯から、遺物が出土していない。

第1～4号竪穴建物跡のように、天井部崩落土の上から出土した遺物は、天井部を意図的に崩した後で、廃棄、あるいは遣棄したものと考えられる。このような窯廃棄については、堤隆氏が詳細に分析されており、「窯の機能停止後のプロセスとしては、1解体・2構築材処理・3祭祀行為の三段階」<sup>1)</sup>があると述べている。これを第1号竪穴建物跡にあてはめると、解体は「天井部」、構築材処理は「その場所に放置」、祭祀行為は、「完形土器の据置き」となる。第2～4号の解体は「天井部」、構築材処理は「その場所に放置」、祭祀行為は「土器・砾・土による封鎖」、第6号の解体は「窯全体」、構築材処理は「住居外へ廃棄」となる。

堤氏は「窯祭祀を相对的に位置付けるなら、「解体」あるいは「封鎖」こそその本質であり、それが窯神を送り出す意味をもった行為である」とし、窯の解体と封鎖そのものが、祭祀行為と考えられている。窯をめぐる祭祀や信仰を踏まえた上で、窯の廃棄過程に目を向けた調査がより一層必要である。さらに、同時期の竪穴建物跡で、窯の廃棄過程に違いがある理由やすべての窯に祭祀行為が行われていたのかなども検討すべき課題であると考える。

## 3 室町・安土桃山時代

堀跡1条を確認した。遺物の出土量が少なく、時期を決定することが困難である。そこで、宇留野主税氏の堀の断面構造の研究<sup>2)</sup>によれば、本跡の第1号堀跡は、箱根研堀であることから、水戸市白石遺跡<sup>3)</sup>の第Ⅳ期（15世紀末葉～16世紀初葉）に当たる。また、当遺跡に近接している大足館跡の一部と推定されている堀跡と、本跡の方向が一致していることから、同時性や関連性がうかがえる。藤木久志氏によると、この地域を支配していた江戸氏が、「天正18（1570）年12月に佐竹氏の水戸攻略により、追放され、佐竹氏よって再利用された水戸城、武熊城を除き、そのほかの城は廃城となっている」<sup>4)</sup>ことから、大足館と関連性のある堀跡は、16世紀後半には廃絶したと考えられる。また、遺物の出土がないため、時期を確定できなかった方形竪穴造構や、掘立柱建物の柱穴の一部と考えられるピット群についても、堀跡に伴う施設の可能性がある。

## 4 おわりに

調査区が狭小で出土遺物も少なく、不明な点が多く存在している。今後の調査によって、当遺跡と大足館跡との関連がより明確なることを期待したい。

### 註

1) 堤隆「窯の廃棄プロセスとその意味」『山梨県考古学協会誌』第7号 山梨県考古学協会 1995年5月

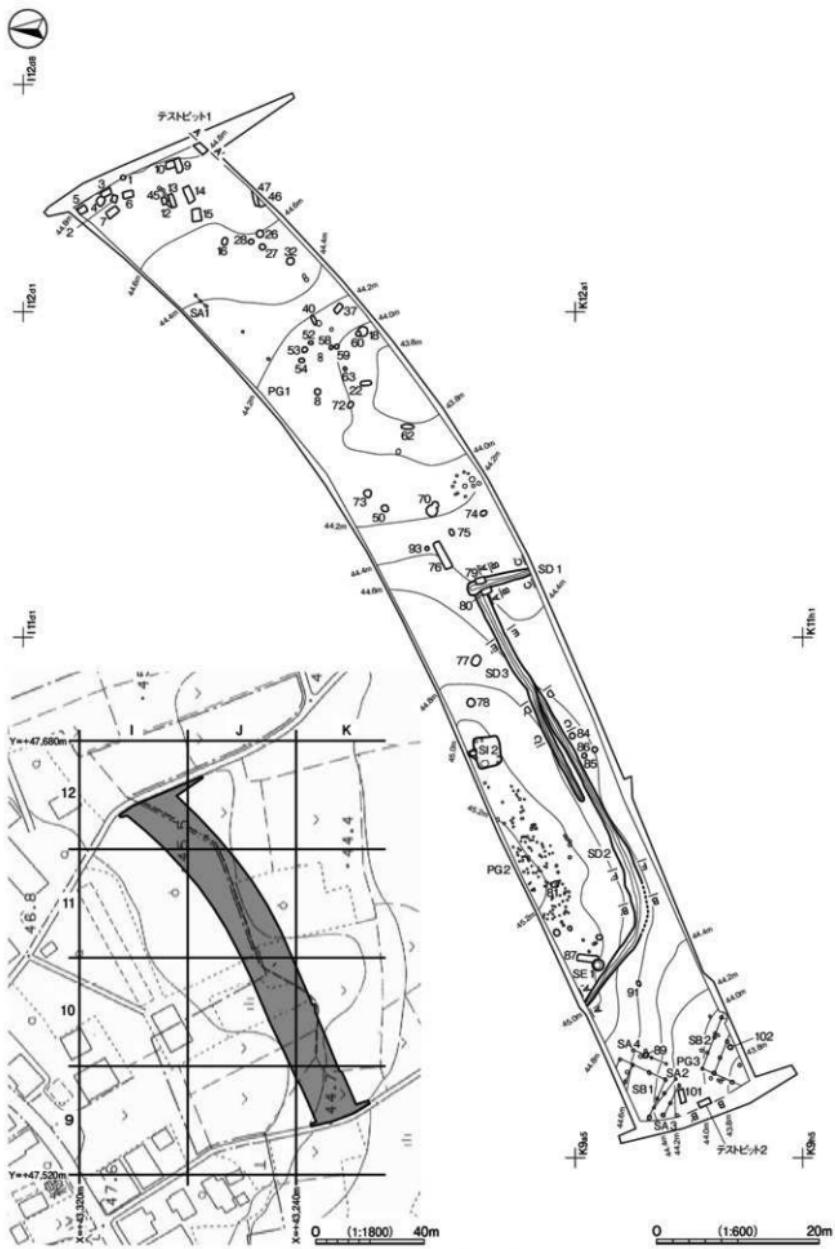
2) 宇留野主税「中世城館研究の課題」「婆良岐考古」第32号 婆良岐考古同人会 2010年5月

3) 横村宣行「白石遺跡（仮称）水戸淨水場予定地内埋蔵文化財調査報告書」茨城県教育財团文化財調査報告第82集 1993年3月

4) 藤木久志「第8章 江戸氏の水戸支配」水戸市史編さん委員会「水戸市史」上巻 水戸市 1963年10月

### 参考文献

・藤木久志「常陸の江戸氏」「江戸氏の研究」関東武士研究叢書 第1巻 名著出版 1977年7月



第47図 大城遺跡調査区設定図・遺構全体図

# 第5章 大城遺跡

## 第1節 調査の概要

大城遺跡は、水戸市の北西部に位置し、桜川右岸の標高44～45mほどの台地上に立地している。調査面積は2,379m<sup>2</sup>で、調査前の現況は畑地である。調査の結果、堅穴建物跡1棟（平安時代）、掘立柱建物跡2棟（時期不明）、土坑50基（江戸時代2・時期不明48）、井戸跡1基（時期不明）、溝跡3条（時期不明）、柱穴列4条（時期不明）、ピット群3か所（時期不明）を確認した。遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に2箱出土している。主な出土遺物は、弥生土器（広口壺）、土師器（壺・高壺・甕）、須恵器（壺・高台付壺・甕）、土師質土器（炻器）、陶器（擂鉢・瓶）、土製品（土玉）、頁岩製削片、銭貨（寛永通寶）などである。

## 第2節 基本層序

調査区東端部（I12i6区）の台地平坦部と西端部（K9d6区）の低地斜面部にテストピットを設定し、基本土層の観察（第48図）を行った。

第1層は、暗褐色を呈する表土及び搅乱層である。粘性・締まりとともに普通で、層厚は22～71cmである。

第2層は、褐色を呈するソフトローム層である。黒色粒子を少量含み、粘性・締まりとともに普通で、層厚は8～28cmである。

第3層は、褐色を呈するハードローム層である。火山ガラス粒子を微量含み、粘性は普通で、締まりが強く、層厚は12～44cmである。第4層は、褐色を呈するハードローム層である。黄色粒子を少量含み、粘性は普通で、締まりが強く、層厚は6～28cmである。第5層は、褐色を呈するハードローム層である。鹿沼軽石・白色粒子を少量含み、粘性は普通で、締まりが強く、層厚は14～28cmである。

第6a層は、鹿沼軽石層である。粘性は弱く、締まりが極めて強く、層厚は8～32cmである。第6b層は、にぶい褐色を呈するハードローム層である。砂及び褐鉄鉱を多量に含み、粘性弱く、締まりは普通である。層厚は8～24cmである。第6c層は、明褐色を呈するハードローム層である。砂を多量、褐鉄鉱を少量含み、粘性弱く、締まりは普通である。層厚は12～26cmである。（※第6b・6c層は、褐鉄鉱が帶状に沈着していることから、河川や湖沼のような水の影響で形成された層であると考えられる。）

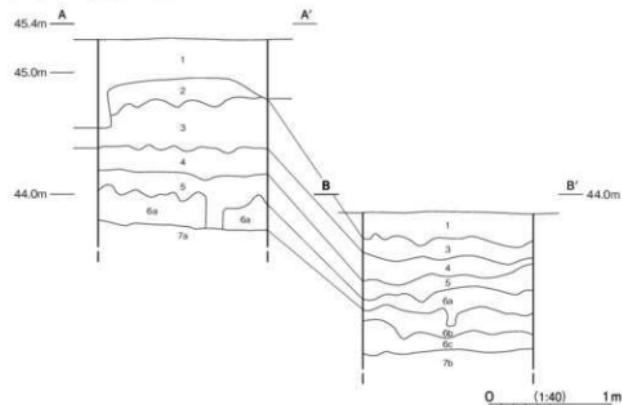
第7a層は、褐色を呈するハードローム層である。

粘性・締まりとともに非常に強く、酸化鉄を多量に含み、層厚は20cmまで確認した。

第7b層は、灰褐色を呈するハードローム層である。

粘性及び締まりとともに非常に強い。層厚は15cmまで確認した。

遺構は、第2・3層上面で確認した。



第48図 大城遺跡基本土層図（全体図参照）

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 平安時代の遺構と遺物

当時代の遺構は、竪穴建物跡1棟を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

##### 竪穴建物跡

###### 第2号竪穴建物跡 (第49・50図 第27表 PL12・13)

**位置** 調査区東部のJ10g7区、標高45mほどの台地平坦面に位置している。

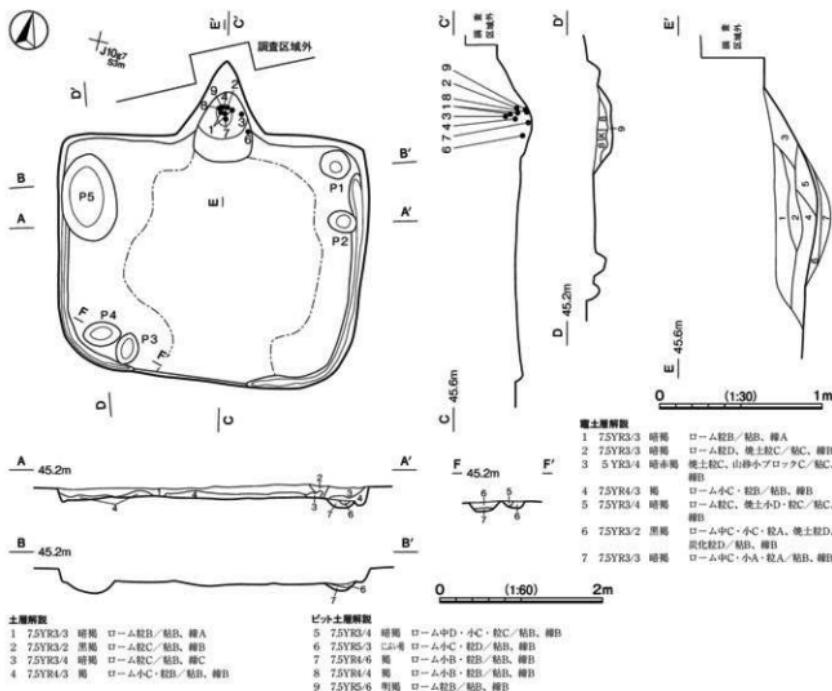
**規模と形状** 長軸3.74m、短軸3.12mの隅丸長方形で、主軸方向はN-10°-Wである。壁は高さ14~18cmで、外傾している。

**床** ほぼ平坦で、竪前方部から南部にかけて硬化している。北壁と南壁の一部を除き壁下には壁溝が巡っている。

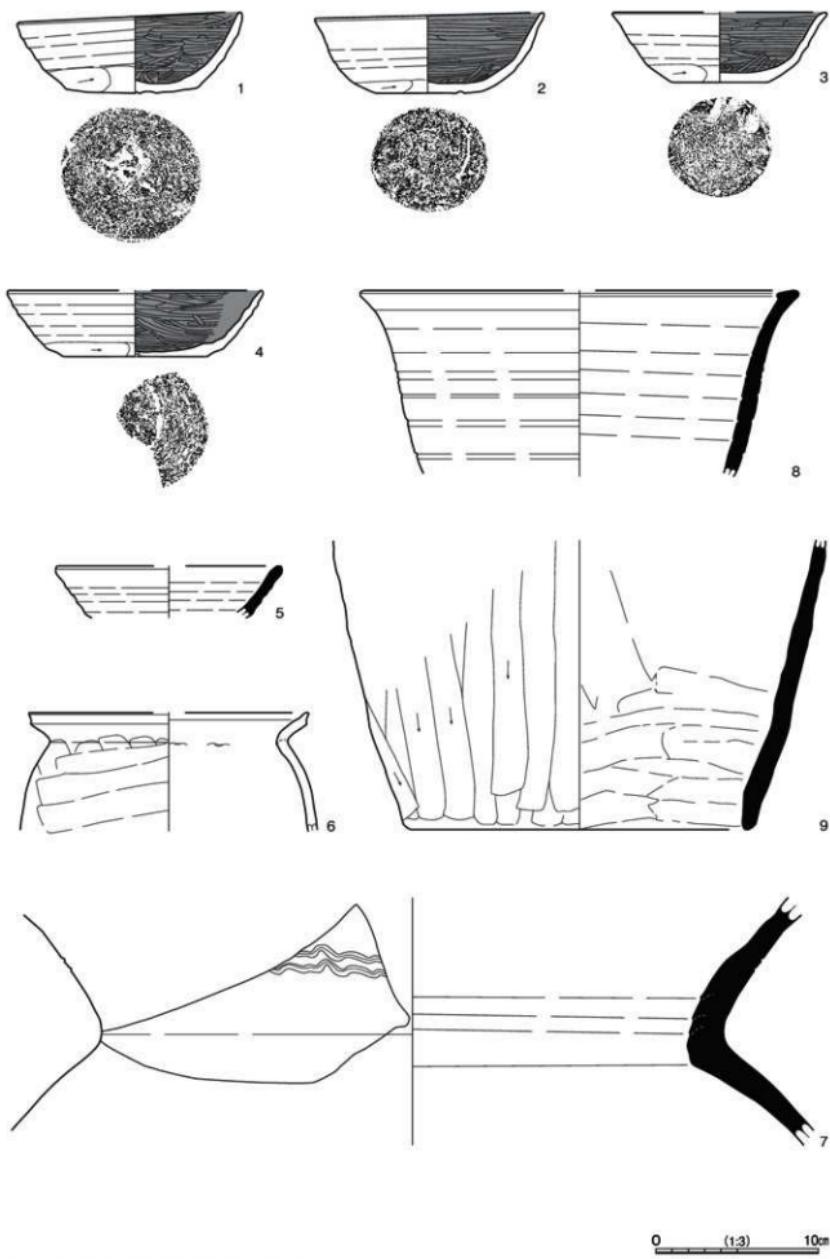
**竈** 北壁中央部に位置している。規模は焚き口から煙道部まで96cmで、燃焼部幅は70cmである。袖部は確認できなかつた。火床部は、楕円形に地山を最大で9cm掘りくぼめ、第6・7層で埋土して整地している。煙道部は壁外に80cmほど張り出し、火床部から緩やかに立ち上がっている。

**ピット** 5か所。P1~P4は、径35~48cm、深さ8~14cmで、性格は不明である。P5は、長径108cm、短径68cm、深さ18cmで、位置や形状から貯蔵穴の可能性がある。

**覆土** 4層に分層できる。不規則な堆積状況から、人為堆積である。



第49図 第2号竪穴建物跡実測図



第50図 第2号竪穴建物跡出土遺物実測図

**遺物出土状況** 土師器片34点(坏10・甕24)、須恵器片18点(坏4・甕2・瓶12)、土製品1点(支脚)、混入した頁岩製剝片1点が出土している。遺物は5を除いて、窓覆土から出土している。1・4は中層から、2は逆位で下層から、3は正位で中層から、7~9は掘方埋土から、それぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀後葉と考えられる。

第27表 第2号堅穴建物跡出土遺物一覧(第49図)

番号	種別	器種	口径	厚さ	底径	胎	土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	135	50	81	長石・石英・赤色 粒母	粗	普通	体部外面下端手持ちへラ削り 内面へラ削き後黒色施 錆 脇部側面へラ切り後 方向の下持ちへラ削り	窓内	95% PL13	
2	土師器	坏	140	49	67	長石・石英・赤色 粒母	に付い黄褐色	普通	体部外面下端手持ちへラ削り 内面へラ削き後黒色施 錆 脇部側面へラ切り後 方向の下持ちへラ削り	窓覆土下層	95% PL13	
3	土師器	坏	[130]	43	60	長石・石英・赤色 粒母	粗	普通	体部外面下端手持ちへラ削り 内面へラ削き後黒色施 錆 脇部側面へラ切り後 方向の下持ちへラ削り	窓覆土下層	70% PL13	
4	土師器	坏	[156]	41	[86]	長石・石英・赤色 粒母	に付い粗	普通	体部外面下端手持ちへラ削り 内面へラ削き後黒色施 錆 脇部側面へラ切り後 方向の下持ちへラ削り	窓内	30%	
5	須恵器	甕	[138]	(32)	-	長石・石英・赤色 粒母	灰青	普通	ロクロ成形	窓内	15%新治窯	
6	土師器	甕	[170]	(73)	-	長石・石英・赤母	に付い粗	普通	外面縦位のへラ削り後斜位のナデ 内面横位のへラナ ダ	窓内	10% PL13	
7	須恵器	甕	-	(152)	-	長石・石英・赤色 粒母	灰	普通	頭部外面二重巻沈継文 外面ロクロナダ	窓側方	5%本素下窯 PL13	
8	須恵器	瓶	[266]	(114)	-	長石・石英・赤色 粒母	に付い粗	一次 被熱	ロクロナダ 9と同一個体+	窓側方	5%新治窯 PL13	
9	須恵器	瓶	-	(178)	(204)	長石・石英・赤色 粒母	に付い粗	二次 被熱	外面縦位のへラ削り 内面上半斜位のへラナダ 下手 側位のへラナダ 8と同一個体+	窓側方	10%新治窯 PL13	

## 2 江戸時代の遺構と遺物

当時代の遺構は土坑1基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

### 土坑

#### 第9号土坑(第51図 第28・30表 PL12・13)

**位置** 調査区北部のII2h5区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第10号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸1.68m、短軸0.83mの長方形で、主軸方向はN=60°~Eである。深さは50cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。

**覆土** 3層に分層できる。不規則な堆積状況から、人為堆積である。

**遺物出土状況** 銭貨1点(寛永通寶)が覆土中から出土している。ほかに、混入した土師器片1点(甕)、須恵器片3点(坏1・甕2)が出土している。

**所見** 形状、覆土の状況、銭貨の出土などから、幕の可能性がある。時期は、出土銭貨から、江戸時代と考えられる。

第28表 第9号土坑出土遺物一覧(第51図)

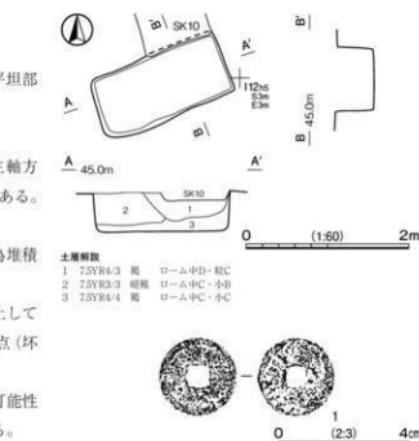
番号	種類	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鉄年	特徴	出土位置	備考
1	寛永通寶	25	06	0.1	336	鋼	1636年	1期古寛永(1636~1659)+ 背面無文	覆土	PL13

#### 第79号土坑(第52図 第29・30表 PL12・13)

**位置** 調査区北部のJ11h2区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第1号溝跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸1.26m、短軸0.58mの長方形で、主軸方向はN=12°~Wである。深さは58cmで、底面は平坦である。壁はほぼ直立している。



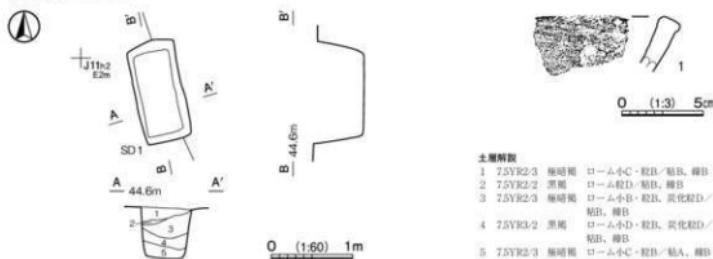
第51図 第9号土坑・出土遺物実測図

番号	種類	径	孔幅	厚さ	重量	材質	初鉄年	特徴	出土位置	備考
1	寛永通寶	25	06	0.1	336	鋼	1636年	1期古寛永(1636~1659)+ 背面無文	覆土	PL13

**覆土** 5層に分層できる。ロームブロックが含んだ不規則な堆積状況から、人為堆積である。

**遺物出土状況** 土師質土器片1点(焰烙)が覆土中から出土している。ほかに、混入した須恵器片8点(环1・蓋1・壺6)、石器片1点(砾石)、頁岩製剥片1点も出土している。

**所見** 形状、覆土の状況が、第9号土坑と類似していることから、墓の可能性がある。時期は、出土土器から江戸時代と考えられる。



第52図 第79号土坑・出土遺物実測図

第29表 第79号土坑出土遺物一覧(第52図)

番号	種別	器種	口径	基高	底径	胎	土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	土師質土器	焰烙	-	(34)	-	長石・石英・赤色 粒子・苦鉛	にぶい黄褐色	普通	内外面ナデ 外面に擦付着	覆土	5% PL13	

第30表 江戸時代の土坑一覧(第51・52図)

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物		備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
9	J12h5	N-60°-E	長方形	1.68×0.83	30	直立	平坦	人為	土師器 須恵器 銭貨		本路→SK10 PL12
79	J11h2	N-12°-W	長方形	1.26×0.58	38	直立	平坦	人為	須恵器 土師質土器 砂石 剥片	SD 1→本路	

### 3 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期や性格が明確にできなかった掘立柱建物跡2棟、土坑48基、井戸跡1基、溝跡3条、柱穴列4条、ピット群3か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

#### (1) 掘立柱建物跡

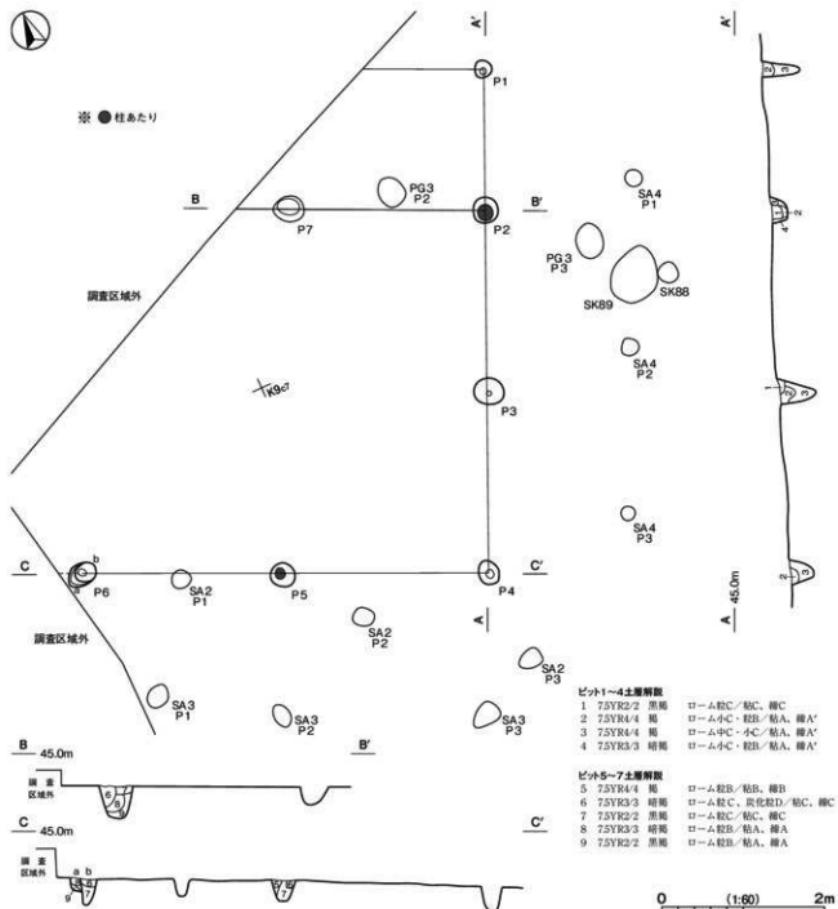
##### 第1号掘立柱建物跡(第53図 第31表 PL12)

**位置** 調査区西部のK9c7区、標高44~45mなどの台地の緩斜面部に位置している。

**規模と構造** 西部が調査区域外のため、確認できた桁行は2間、梁行2間の北部に庇の付いた側柱建物跡で、桁行方向N-67°-Wの東西棟と推定される。確認できた規模は、桁行約5.40m、梁行約4.45m、面積は24.30m<sup>2</sup>でP3と対応する柱穴が、調査区域内で確認できないことから、さらに桁行が延びていくものと考えられる。柱間寸法は、桁行が北妻から210m、215m、梁行が西妻から245m、245mで柱筋は掘っている。

**柱穴** 7か所。掘方の平面形は、円形または楕円形で、長径18~44cm、短径18~28cmである。深さ16~45cmで、掘方の断面形はU字状または逆台形である。第1~7層は柱抜き取り後の流入土で、第8・9層はP6aからP6bに柱を替えた時の埋土である。P2、P5の底面で、柱のあたりを確認した。

**所見** 出土遺物がないため、時期は不明である。性格は平面形や規模から、居宅と考えられる。



第53図 第1号掘立柱建物跡実測図

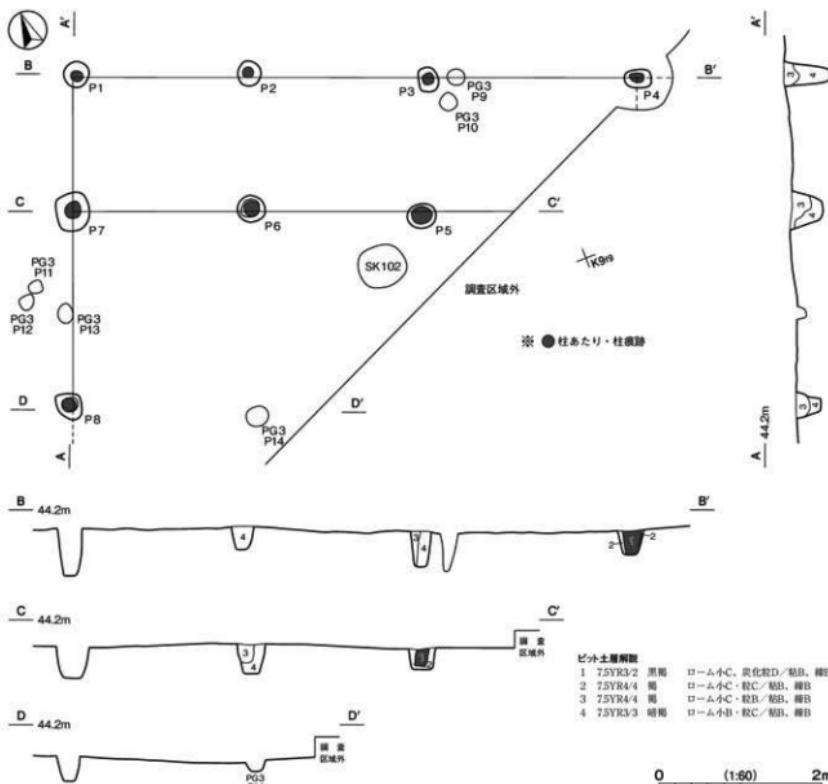
#### 第2号掘立柱建物跡 (第54図 第31表 PL12)

**位置** 調査区西部のK9e8区、標高44~45mほどの緩斜面部に位置している。

**規模と構造** 東部が調査区域外のため、確認できた桁行は3間、梁行1間の北部に庇が付く側柱建物跡で、桁行方向N-69°-Wの東西棟である。確認できた規模は、桁行約6.95m、梁行約2.10mで、面積は20.15m<sup>2</sup>である。柱間寸法は、南桁行が2.20m、北桁行が北妻から2.15m、2.20m、2.60m、東梁行が北妻から1.65m、西梁行が北妻から1.65m、2.45mで柱筋は描っている。さらに桁行、梁行ともに延びる可能性が高い。

**柱穴** 8か所。掘方の平面形は、円形または楕円形で、長径26~46cm、短径22~35cmである。深さ25~59cmで、掘方の断面形はU字状または逆V字形である。第1層は柱痕跡、第2層は掘方への理土である。3~4層は柱抜き取り後の埋土である。P1、P2、P5~P8の底面で、柱のあたりを確認した。なお、PG3 P14は本跡と位置的に柱筋が通るように見えるが、深さが浅く、他と比べ柱筋がずれ、柱のあたりがないことから、別遺構とした。

**所見** 出土遺物がないため、時期は不明である。性格は平面形や規模から、居宅と考えられる。



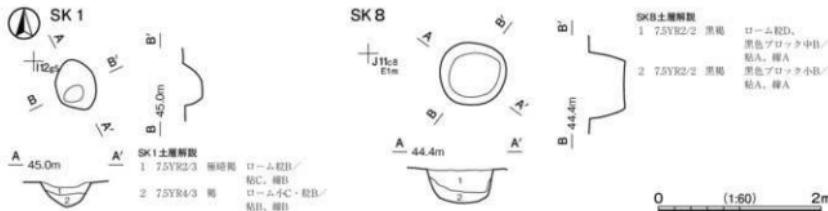
第54図 第2号掘立柱建物跡実測図

第31表 その他の掘立柱建物跡一覧（第53・54図）

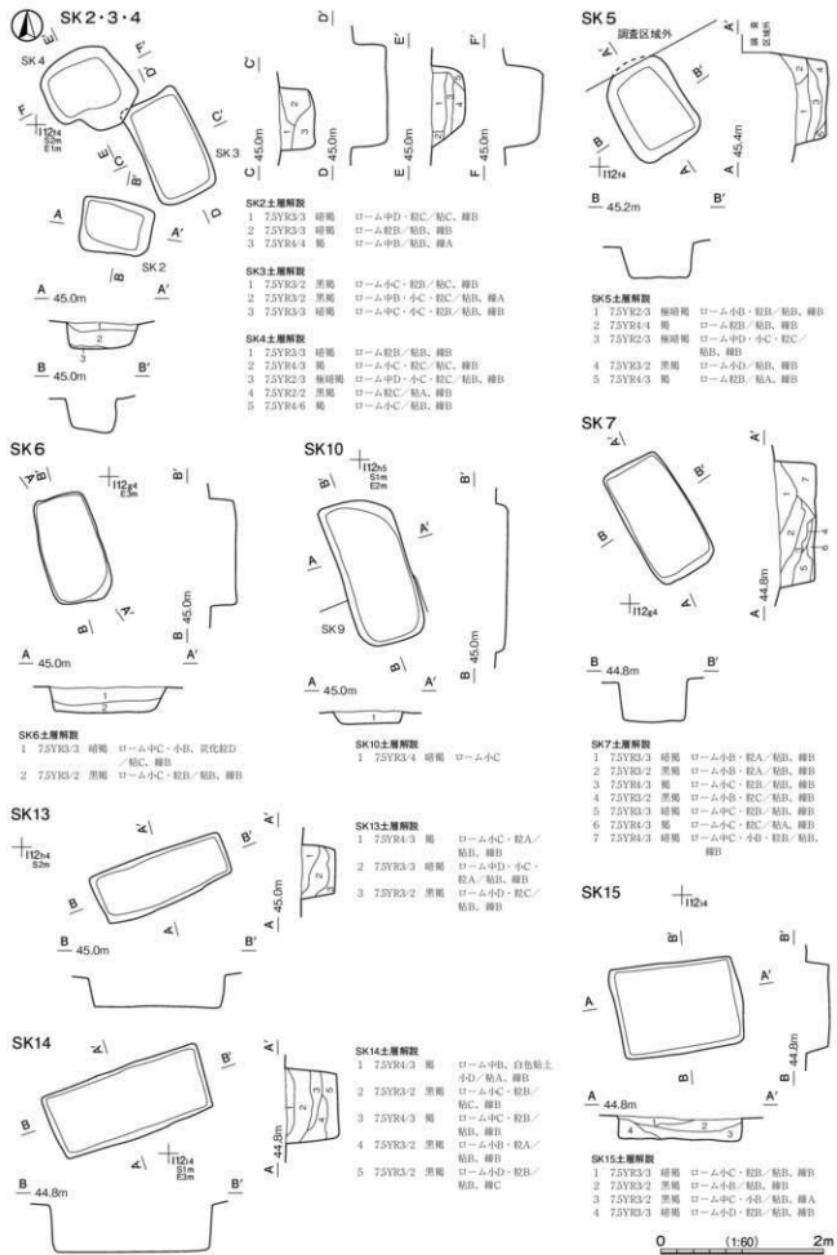
番号	位置	断行方向	柱間数	規模	調査	柱間寸法	柱穴	主な出土遺物	時期	備考	
			柱×奥(間)	柱×幅(間)	(m)	柱間(間)	(m)	柱直角 平面図	直角		
1	K9e7	N-67°-W [2 x 2]	5.40 x 4.45	[24.30]	2.10-2.15	245	側柱(7)	円形	16~45	-	不明 PL12
2	K9e8	N-69°-W [3 x 1]	6.95 x 2.10	[20.15]	2.15-2.60	165~245	側柱(8)	円形 楕円形	25~59	-	不明 PL12

## (2) 土坑

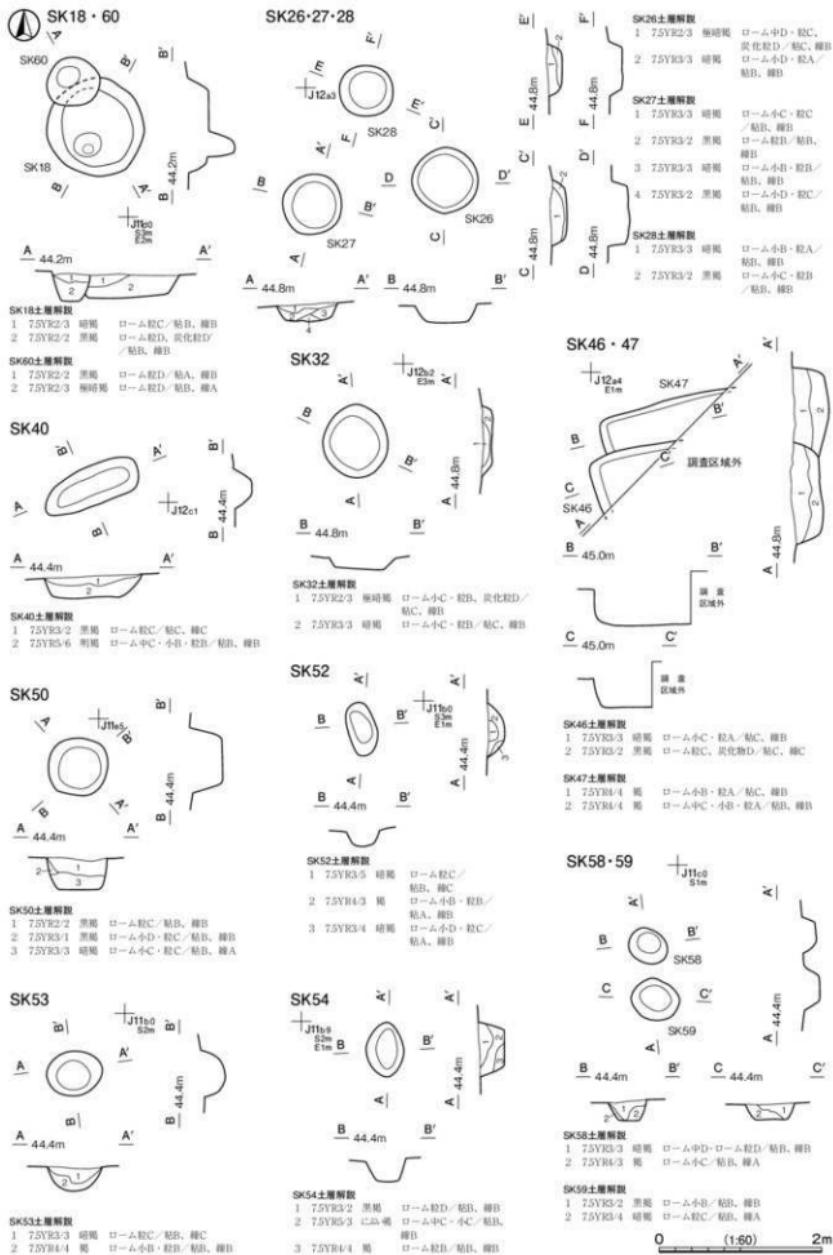
土坑48基は、実測図(第55～59図)と一覧(第32表)で記載する。



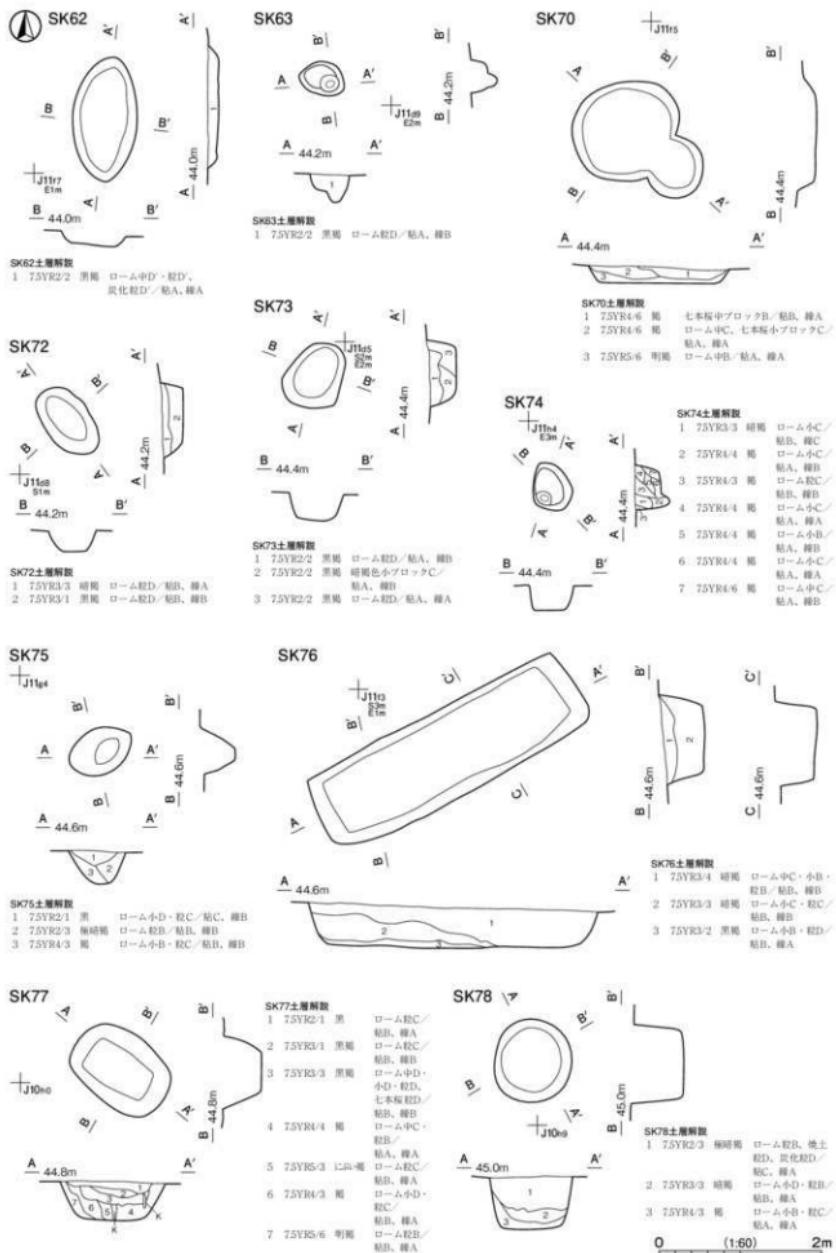
第55図 その他の土坑実測図(1)



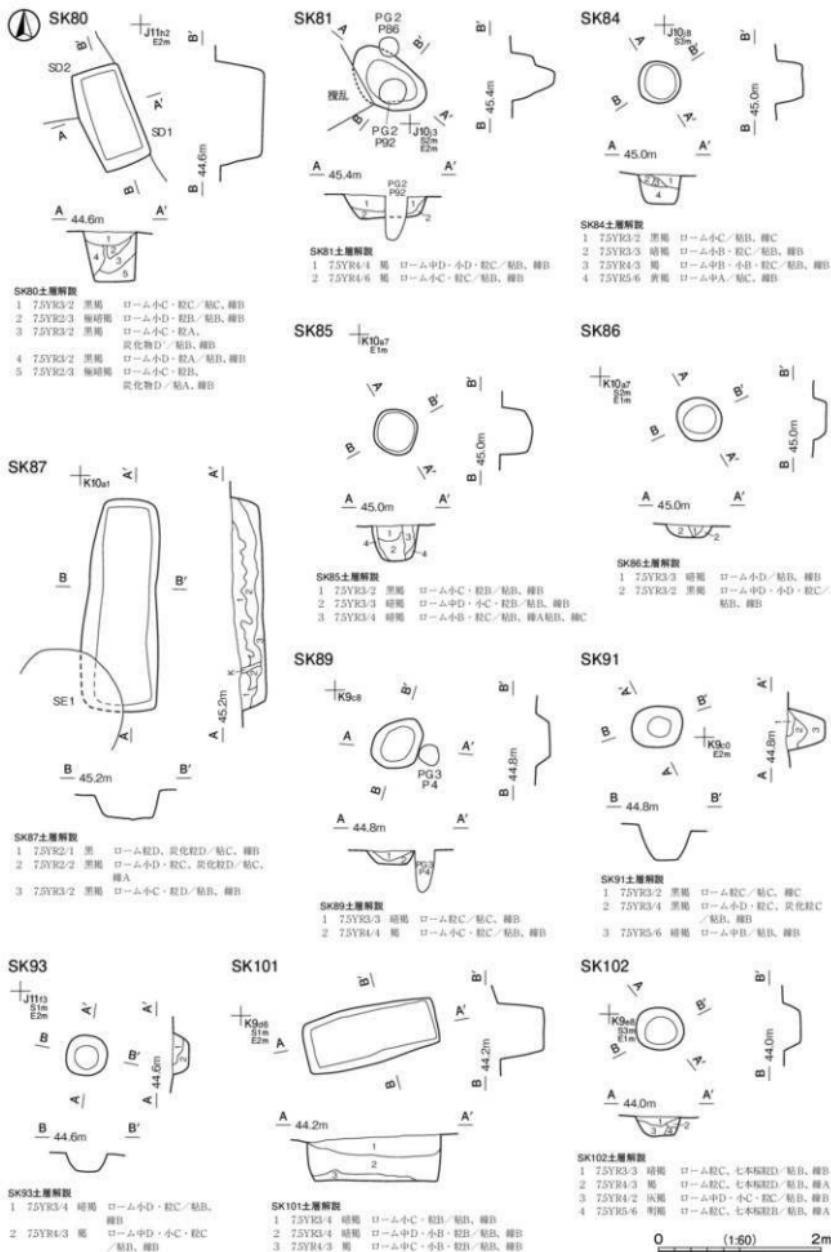
第56図 その他の土坑実測図(2)



第 57 図 その他の土坑実測図(3)



第58図 その他の土坑実測図(4)



第59図 その他の土坑実測図(5)

第32表 その他の土坑出土遺物一覧 (第54~58図)

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		齊 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径 (m)	深さ (cm)					
1	J12g5	N - 24° - W	楕円形	0.63 × 0.50	22	外傾	平坦	人為	-	
2	J12h4	N - 81° - W	長方形	0.87 × 0.66	40	外傾/直立	平坦	人為	頭蓋器	
3	J12h4	N - 23° - W	長方形	1.33 × 0.75	42	直立	平坦	人為	-	本跡→SK 4
4	J12h4	N - 32° - W	不定形	1.70 × 1.04	44	外傾	平坦	人為	-	SK 3→本跡
5	J12e4	N - 29° - W	長方形	1.16 × 0.88	42	外傾	平坦	人為	頭蓋器	
6	J12e4	N - 17° - W	長方形	1.34 × 0.76	30	直立	平坦	人為	磁器	
7	J12h4	N - 30° - W	長方形	1.55 × 0.83	52	直立	平坦	人為	-	
8	J11c8	-	円形	0.80 × 0.80	42	外傾	平坦	人為	土師器	
10	J12e5	N - 21° - W	[長方形]	[1.16] × 0.86	26	外傾	平坦	人為	土師器 頭蓋器 鉄釘	SK 9→本跡
13	J12h4	N - 70° - E	長方形	1.68 × 0.66	36	外傾	平坦	人為	頭蓋器 陶器	
14	J12h4	N - 73° - E	長方形	2.00 × 0.90	56	直立	平坦	人為	土師器 頭蓋器 陶器	
15	J12e4	N - 81° - E	長方形	1.56 × 1.12	30	直立	平坦	人為	頭蓋器	
18	J11d9	-	円形	1.20 × 1.16	26~58	外傾	有段	人為	土師器 頭蓋器	本跡→SK60
26	J12a3	-	円形	0.80 × 0.80	24	外傾	平坦	人為	-	
27	J12a3	-	円形	0.74 × 0.72	22	外傾	平坦	人為	頭蓋器 磁器	
28	J12a3	-	円形	0.64 × 0.62	16	外傾	平坦	人為	-	
32	J12b2	N - 3° - E	楕円形	0.90 × 0.78	14	外傾	平坦	人為	-	
40	J11b6	N - 68° - E	楕円形	1.22 × 0.48	24	外傾	平坦	人為	-	
46	J12a4	N - 76° - W	椭/丸形	(1.00) × (0.60)	32	直立	平坦	人為	-	SK47→本跡
47	J12a4	N - 76° - E	[長方形]	(1.50) × (0.50)	40	外傾	平坦	人為	-	本跡→SK46
50	J11e4	-	円形	0.72 × 0.70	40	外傾	平坦	人為	土師器 頭蓋器	
52	J11b6	N - 72° - E	楕円形	0.56 × 0.34	20	外傾	平坦	人為	-	
53	J11b9	N - 84° - E	楕円形	0.69 × 0.56	30	外傾	平坦	人為	-	
54	J11b9	N - 3° - E	楕円形	0.70 × 0.48	26	外傾	平坦	人為	-	
58	J11c9	N - 44° - W	楕円形	0.50 × 0.40	18	外傾	平坦	人為	-	
59	J11c9	N - 85° - W	楕円形	0.60 × 0.40	22	外傾	平坦	人為	土師器 頭蓋器	
60	J11d0	-	円形	0.66 × 0.62	36	外傾	平坦	人為	-	SK18→本跡
62	J11e7	N - 3° - E	楕円形	1.54 × 0.80	16	外傾	平坦	人為	土師器 頭蓋器	
63	J11c9	N - 71° - W	楕円形	0.58 × 0.42	20~34	外傾	有段	人為	-	
70	J11f4	N - 47° - W	瓢箪形	1.78 × 1.38	20	外傾	平坦	人為	-	
72	J11d8	N - 43° - W	楕円形	0.96 × 0.58	24	外傾	平坦	人為	-	
73	J11d5	N - 15° - E	楕円形	0.80 × 0.68	34	外傾	平坦	人為	頭蓋器	
74	J11h1	N - 25° - W	楕円形	0.64 × 0.48	30~42	外傾/直立	有段	人為	-	
75	J11g4	N - 62° - E	楕円形	0.82 × 0.56	40	外傾	平坦	人為	-	
76	J11h3	N - 64° - E	長方形	3.52 × 1.06	48	直立	平坦	人為	頭蓋器	
77	J10g9	N - 50° - W	長方形	1.30 × 0.90	38	外傾	平坦	人為	-	
78	J10g8	-	円形	1.02 × 1.00	62	直立	平坦	人為	-	
80	J11h2	N - 16° - W	長方形	1.28 × 0.65	56	外傾/直立	平坦	人為	-	SD1-2→本跡
81	J10j3	N - 50° - W	楕円形	1.00 × 0.64	32	外傾	平坦	人為	-	本跡→PG 2 P86・92
84	J107	-	円形	0.52 × 0.50	40	直立	平坦	人為	-	
85	K10a7	-	円形	0.54 × 0.52	40	直立	平坦	人為	-	
86	K10a7	-	円形	0.52 × 0.52	16	外傾	平坦	人為	-	
87	K10a1	N - 2° - E	長方形	2.60 × 0.96	34	外傾	平坦	人為	-	本跡→SE 1
89	K9c8	N - 18° - E	楕円形	0.70 × 0.56	19	外傾	平坦	人為	-	
91	K9b6	N - 88° - E	楕円形	0.62 × 0.49	42	外傾	平坦	人為	土師器 頭蓋器 陶器	
93	J11j3	-	円形	0.50 × 0.50	22	外傾	平坦	人為	-	
101	K9d6	N - 76° - E	長方形	1.64 × 0.72	56	直立	平坦	人為	-	
102	K9e8	N - 59° - W	楕円形	0.60 × 0.54	22	外傾	平坦	人為	-	

## (3) 井戸跡

## 第1号井戸跡(第60図)

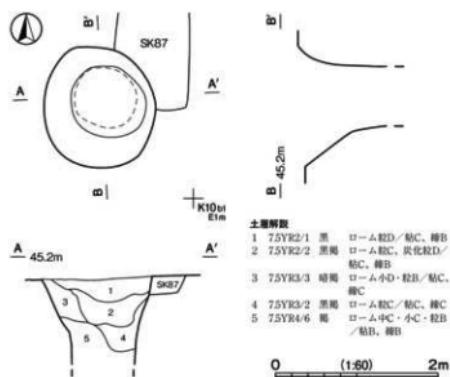
**位置** 調査区西部のK9a0区、標高45mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 第87号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長径1.48m、短径1.36mの梢円形で、漏斗状を呈している。湧水と崩落の恐れがあったため、確認面から深さ1.10mまでの調査とした。

**覆土** 5層を確認した。ロームブロックを含むことや、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

**所見** 出土遺物がないため、時期不明である。



第60図 第1号井戸跡実測図

## (4) 溝跡

溝跡3条は、全体図(第47図)と断面図(第61・62図)と一覧(第33・34表)を記載する。

## 第1号溝跡(第61図 第33・34表 PL12)

**位置** 調査区西部のJ11g2～J11i3区、標高44mほどの緩斜面部に位置している。

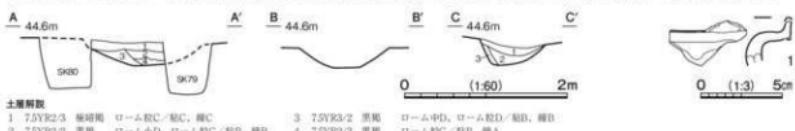
**重複関係** 第3号溝跡を掘り込み、第79・80号土坑に掘り込まれている。

**規模と形状** 調査区域外のJ11i3区から緩斜面部の等高線と直交するように北西方向(N-19°-W)に直線状に延びている。確認できた長さは7.94mで、上幅0.94～1.56m、下幅0.28～0.48m、深さ18～28cmで、断面形は浅い逆台形状である。底面は平坦で、わずかに南側へ傾斜している。

**覆土** 4層に分層できる。ロームブロックを含んでいることや、不規則な堆積状況から、人為堆積である。

**遺物出土状況** 陶器1点(甕)、焼成粘土塊1点が出土している。1は覆土中から出土している。ほかに、混入した土師器片1点(甕)、須恵器片4点(甕)、古代の瓦片1点(平瓦)が出土している。

**所見** 時期は、出土した常滑産の甕は、13世紀前半のものと考えられるが、1点のみの出土であることから、詳細な時期は不明である。性格は、形状から排水や区画溝と考えられる。位置から、第3号溝との関係が窺える。



第61図 第1号溝跡・出土遺物実測図

## 第33表 第1号溝跡出土遺物一覧(第61図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	軸土	色調	特徴	輪葉	產地	出土位置	備考
1	陶器	甕	-	(28)	-	長石	灰素燒	L字状を呈する受け口の口縁 内面自然釉	無輪	常滑	覆土	3.5型式(13世紀後半)

## 第2号溝跡(第62図 第34表)

**位置** 調査区西部のK9a9～J11h2区、標高44～45mほどの緩斜面部に位置している。

**重複関係** 第3号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** 調査区域外のK9a9区から緩斜面部の等高線と斜行するように、南東方向(N-125°-E)へ直線状に延び、K10b2区からL字状に屈曲し、北東方向(N-60°-E)へ直線状に延びている。確認できた長さは57.32mで、上幅0.68～2.04m、下幅0.20～0.56m、深さ10～38cmで、屈曲部に向かって両側から下がっている。断面形は逆台形状で、底面は平坦である。

**覆土** 7層に分層できる。ロームブロックを含んでいることや不規則な堆積状況から、人為堆積である。

**遺物出土状況** 混入した土師器片6点(甕)、須恵器片2点(甕)、鉄滓1点が覆土中から出土している。

**所見** 本跡に帰属する遺物がないため、時期は不明である。性格は形状から排水や区画の溝と考えられる。位置から第3号溝跡との関係が窺われる。

### 第3号溝跡(第62図 第34表)

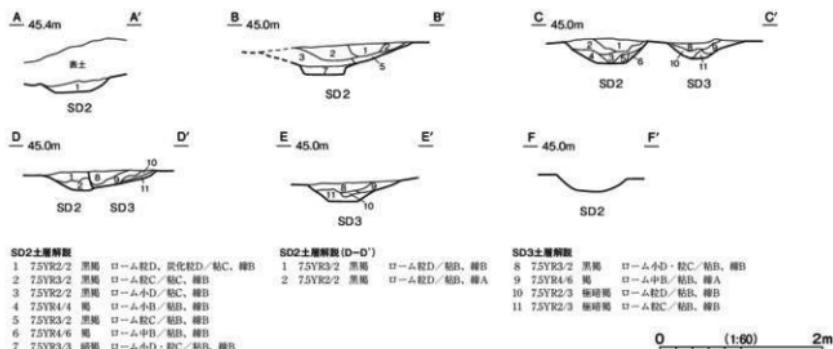
**位置** 調査区西部のK10a6～J12h2区、標高44～45mほどの緩斜面部に位置している。

**重複関係** 第2号溝跡を掘り込み、第80号土坑、第1号溝に掘り込まれている。

**規模と形状** K10a6区から等高線に沿って北東方向(N-65°-E)に直線状に延びている。東部は第80号土坑、第1号溝に掘り込まれており、確認できた長さは2084mで、上幅0.58～1.38m、下幅0.29～0.42m、深さ16～22cmで、断面形は浅いU字状である。底面は平坦で、地形に沿って西側へ傾斜している。

**覆土** 4層に分層できる。含有物が少なく周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

**所見** 出土遺物がないため、時期は不明である。性格は、形状から排水や区画溝と考えられる。また、位置から第2号溝跡との関係が窺われる。



第62図 第2・3号溝跡実測図

第34表 その他の溝跡一覧(第61・62図)

番号	位 置	方 向	平面形	規 模				断面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備 考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)				
1	J11h2～J11i3	N-19°-W	直線状	7.94	0.94-1.56	0.28-0.48	18-28	U字状	外傾	人為 土師器 須恵器 陶器 燒成粘土塊 石	SD 3→本跡 →SK87-80
2	K9d9～J11h2	N-125°-E N-60°-E	L字状	57.32	0.68-2.04	0.20-0.56	10-38	逆V形	外傾	人為 土師器 須恵器 鉄滓	本跡→SD 3
3	K10a6～J12h2	N-65°-E	直線状	2084	0.58-1.38	0.29-0.42	16-22	浅いU字状	外傾	人為	SD 2→本跡 →SK80, SD1

### (5) 柱穴列

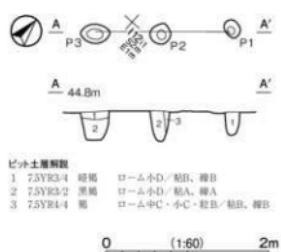
#### 第1号柱穴列(第63図 第35表)

**位置** 調査区東部のII1i1区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

**規模と構造** 全長1.80m、配列方向はN-40°-Eである。柱間寸法は北から、0.88m、0.85mで、柱筋は掘っている。

**柱穴** 3か所。平面形は円形と梢円形で、長径16～28cm、短径22～24cmである。深さ26～38cmで、断面形はU字状である。第1～3層は柱抜き取り後の流入土である。

**所見** 時期と性格は、不明である。



ピット土層解説		
1	7.5YR3-4	暗褐色
2	7.5YR2-2	黒褐色
3	7.5YR4-4	褐

第63図 第1号柱穴列実測図

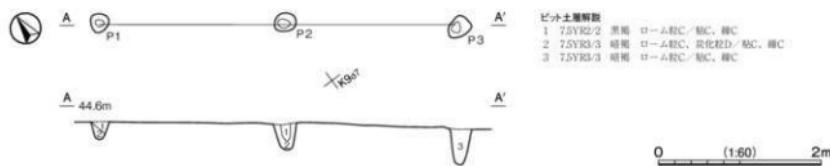
## 第2号柱穴列(第64図 第35表)

**位置** 調査区東部のK9c6～K9d7区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

**規模と構造** 全長450m、配列方向はN-120°-Eである。柱間寸法は西から235m、215mで、柱筋は揃っている。

**柱穴** 3か所。平面形は円形と楕円形で、長径24～26cm、短径18～23cmである。深さ23～44cmで、掘方の断面形はU字状である。第1～3層は柱抜き取り後の流入土である。

**所見** 時期と性格は、不明である。



第64図 第2号柱穴列実測図

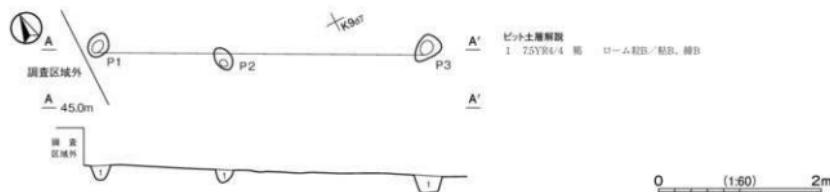
## 第3号柱穴列(第65図 第35表)

**位置** 調査区西部のK9c6～K9d7区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

**規模と構造** 全長408m、配列方向はN-112°-Eである。柱間寸法は西から155m、255mで、柱筋は揃っていない。

**柱穴** 3か所。平面形は円形または楕円形で、長径28～34cm、短径18～24cmである。深さ16～22cmで、掘方の断面形はU字状または逆台形状である。第1層は柱抜き取り後の流入土である。

**所見** 時期と性格は、不明であるが、軸方向がほぼ同一であることから、第1号掘立柱建物跡との関連が窺われる。



第65図 第3号柱穴列実測図

## 第4号柱穴列(第66図 第35表)

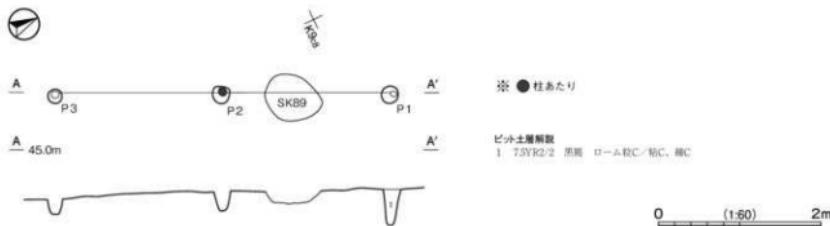
**位置** 調査区西部のK9b8～K9c7区、標高44mほどの台地平坦部に位置している。

**重複関係** 柱穴との直接的な重複はないが、列状に第89号土坑が位置している。

**規模と構造** 全長410m、配列方向はN-30°-Eである。柱間寸法は北から214mで、柱筋は揃っている。

**柱穴** 3か所。平面形は円形で、径18～20cmである。深さ18～44cmで、断面形はU字状である。第1層は柱抜き取り後の流入土である。

**所見** 時期と性格は、不明であるが、軸方向がほぼ同一であることから、第1号掘立柱建物跡との関係が窺われる。



第66図 第4号柱穴列実測図

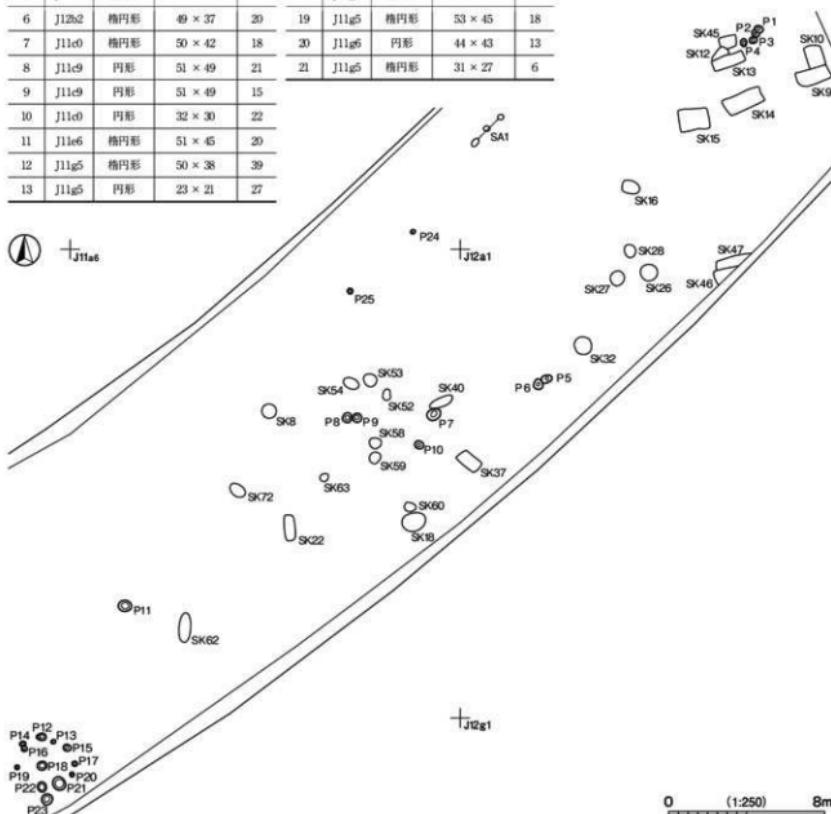
第35表 その他の柱穴列一覧（第63～66図）

番号	位 置	配列方向	長さ(m)	柱間	柱穴				主な出土遺物	備 考
					柱穴数	平面形	長径(cm)	短径(cm)		
1	I121	N - 40° - E	180	0.85 - 0.88	3	円 形 楕円形	16 ~ 28	22 ~ 24	26 ~ 38	-
2	K96- K97	N - 120° - E	4.50	2.15 ~ 2.35	3	円 形 楕円形	24 ~ 36	18 ~ 23	23 ~ 44	-
3	K96- K97	N - 112° - E	4.08	1.55 ~ 2.55	3	円 形 楕円形	28 ~ 34	18 ~ 24	16 ~ 22	-
4	K96- K97	N - 30° - E	4.10	2.14	3	円 形	16 ~ 20	-	18 ~ 44	-

### (6) ピット群

ビット群は3か所を確認した。平面図は(第67~69図)と一覧(第36~38表)で記載する。

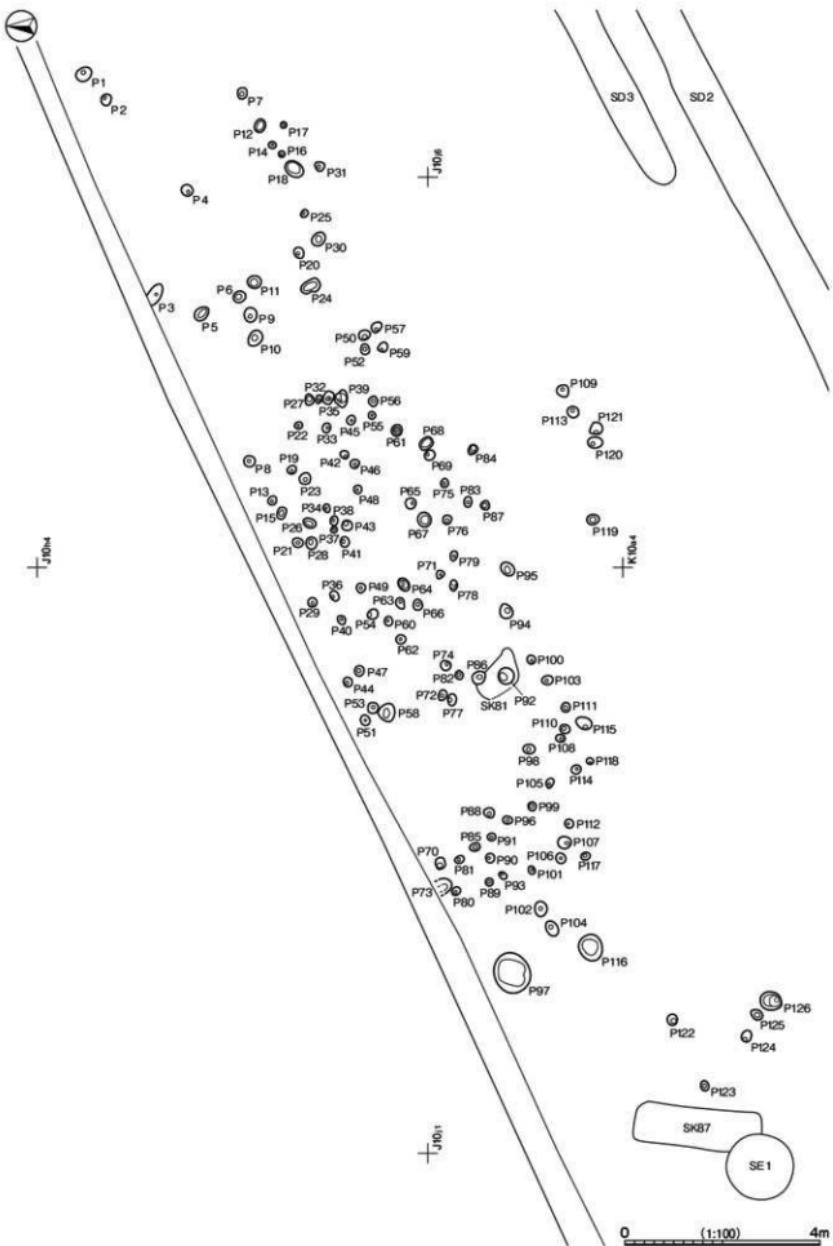
第36表 第1号ビット群ビット一覧（第67図）



第67図 第1号ピット群実測図

第37表 第2号ピット群ピット一覧（第68図）

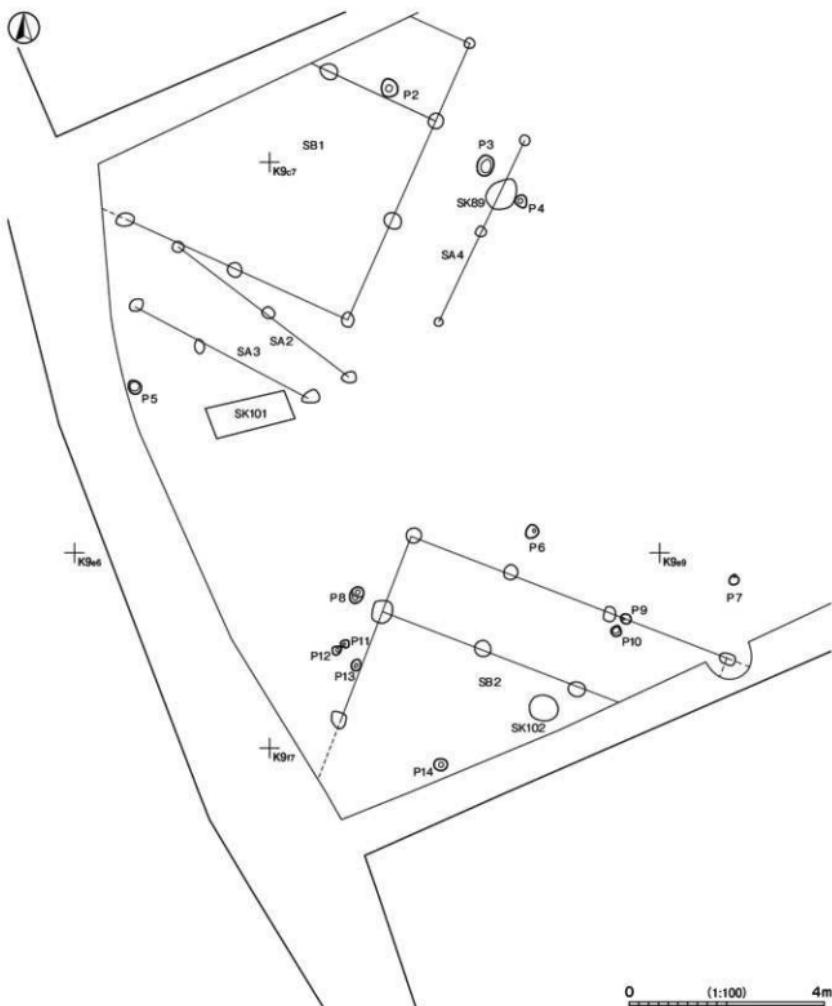
番号	位置	平面形	規 模 (cm)			番号	位置	平面形	規 模 (cm)			番号	位置	平面形	規 模 (cm)		
			[長] (cm)	[幅] (cm)	[深さ] (cm)				[長] (cm)	[幅] (cm)	[深さ] (cm)				[長] (cm)	[幅] (cm)	[深さ] (cm)
1	J1066	橢円形	35	27	30	43	J1084	円形	21	20	29	85	J1082	橢円形	22	16	11
2	J1086	円形	22	21	35	44	J1083	円形	18	17	22	86	J1083	橢円形	29	24	19
3	J1085	【橢円形】	(25) × 20	13	45	J1084	円形	16	16	16	87	J1084	円形	19	19	15	
4	J1085	円形	22	22	16	96	J1084	円形	20	19	14	88	J1082	円形	21	20	13
5	J1085	橢円形	33	24	20	47	J1083	円形	21	20	15	89	J1082	円形	16	15	17
6	J1085	円形	25	24	22	48	J1084	円形	16	16	13	90	J1082	橢円形	19	17	23
7	J1086	橢円形	23	19	18	49	J1083	橢円形	18	15	20	91	J1082	円形	17	16	12
8	J1084	円形	23	22	13	50	J1085	橢円形	23	20	14	92	J1083	円形	33	32	21
9	J1085	橢円形	28	25	13	51	J1083	円形	17	17	16	93	J1082	橢円形	18	14	25
10	J1085	橢円形	35	25	9	52	J1085	橢円形	18	15	13	94	J1083	橢円形	28	23	37
11	J1085	橢円形	28	25	10	53	J1083	橢円形	22	19	13	95	J1083	橢円形	32	23	28
12	J1086	橢円形	29	22	12	54	J1083	円形	20	20	23	96	J1082	橢円形	19	15	11
13	J1084	円形	17	16	24	55	J1084	円形	15	14	14	97	J1081	円形	46	46	21
14	J1086	円形	13	13	12	56	J1084	円形	19	18	13	98	J1083	橢円形	21	19	16
15	J1084	橢円形	26	20	15	57	J1085	橢円形	23	18	16	99	J1082	円形	17	17	14
16	J1086	円形	12	11	11	58	J1083	橢円形	35	28	27	100	J1083	橢円形	17	13	14
17	J1086	円形	13	13	10	59	J1085	橢円形	22	17	25	101	J1082	橢円形	16	12	17
18	J1086	橢円形	41	30	17	60	J1083	橢円形	18	14	14	102	J1082	橢円形	22	19	22
19	J1084	円形	18	17	17	61	J1084	円形	23	22	21	103	J1083	円形	18	18	14
20	J1085	橢円形	24	20	18	62	J1083	橢円形	19	15	17	104	J1082	橢円形	25	22	18
21	J1084	橢円形	19	16	7	63	J1083	橢円形	23	18	35	105	J1082	橢円形	20	14	20
22	J1084	橢円形	15	13	28	64	J1083	橢円形	28	23	27	106	J1082	円形	19	19	17
23	J1084	円形	23	23	12	65	J1084	円形	21	21	37	107	J1082	橢円形	30	25	36
24	J1085	不整橢円形	41	27	11	66	J1083	円形	18	18	24	108	J1083	橢円形	20	14	13
25	J1085	橢円形	16	13	9	67	J1084	橢円形	30	27	10	109	J1084	円形	24	22	19
26	J1084	橢円形	27	17	13	68	J1084	橢円形	22	21	6	110	J1083	円形	19	18	16
27	J1084	円形	21	21	17	69	J1084	橢円形	19	17	14	111	J1083	円形	18	18	13
28	J1084	円形	23	21	22	70	J1082	円形	22	21	6	112	J1082	橢円形	17	15	19
29	J1083	円形	17	17	25	71	J1083	円形	16	15	21	113	J1084	円形	22	20	19
30	J1085	橢円形	31	25	15	72	J1083	橢円形	19	17	14	114	J1082	橢円形	20	15	22
31	J1086	不整円形	16	15	14	73	J1082	【内・橢円形】	28	19(19)	9	115	J1083	橢円形	35	24	58
32	J1084	橢円形	17	13	14	74	J1083	円形	19	18	33	116	J1082	円形	47	44	17
33	J1084	円形	16	15	23	75	J1084	円形	17	15	22	117	J1082	橢円形	21	13	26
34	J1084	橢円形	14	11	22	76	J1084	円形	17	17	27	118	J1083	円形	14	13	25
35	J1084	橢円形	29	22	27	77	J1083	橢円形	21	18	12	119	J1084	円形	22	20	15
36	J1083	橢円形	21	15	41	78	J1083	橢円形	23	15	33	120	J1084	橢円形	29	22	26
37	J1084	円形	13	13	19	79	J1084	橢円形	18	13	21	121	J1084	不整円形	22	22	18
38	J1084	橢円形	18	14	13	80	J1082	橢円形	18	14	23	122	K10a1	橢円形	21	20	31
39	J1084	不定形	34	26	25	81	J1083	橢円形	20	16	11	123	K10a1	橢円形	19	16	19
40	J1083	円形	16	14	10	82	J1083	橢円形	19	14	12	124	K10a1	橢円形	22	17	28
41	J1084	橢円形	19	17	18	83	J1084	橢円形	18	15	23	125	K10a1	橢円形	22	19	21
42	J1084	円形	17	17	27	84	J1084	橢円形	21	18	28	126	K10a1	橢円形	43	38	36



第68図 第2号ピット群実測図

第38表 第3号ピット群ピット一覧（第69図）

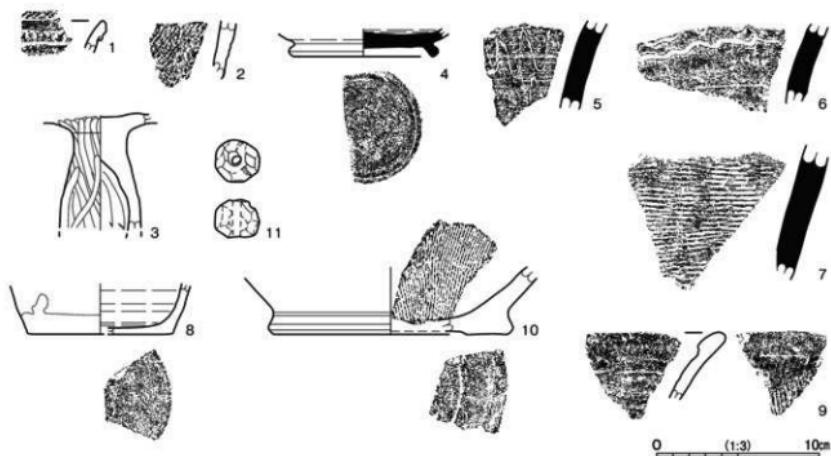
番号	位置	平面形	規 格(cm)			番号	位置	平面形	規 格(cm)			番号	位置	平面形	規 格(cm)		
			長径(幅) × 短径(幅)	深さ	長径(幅) × 短径(幅)				長径(幅) × 短径(幅)	深さ	長径(幅) × 短径(幅)				長径(幅) × 短径(幅)	深さ	長径(幅) × 短径(幅)
2	K9e7	椭円形	37 × 32	13		7	K9e9	円形	19 × 19	22		12	K9e7	不整椭円形	20 × 18	22	
3	K9e8	椭円形	42 × 34	19		8	K9e7	椭円形	33 × 28	19		13	K9e7	椭円形	21 × 19	11	
4	K9e8	不整椭円形	26 × 24	66		9	K9e8	円形	21 × 20	47		14	K9e7	椭円形	28 × 25	13	
5	K9e6	椭円形	29 × 25	21		10	K9e8	円形	20 × 20	15							
6	K9e8	円形	26 × 24	71		11	K9e7	不整椭円形	16 × 17	10							



第69図 第3号ピット群実測図

## (7) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物について、出土遺物実測図（第70図 PL13）と出土遺物一覧（第39表）で掲載する。



第70図 遺構外出土遺物実測図

第39表 遺構外出土遺物一覧（第69図）

番号	種 別	器 標	口 径	脇 高	底 径	胎 土	色 調	焼成	特 徴	出土位置	備 考
1	弦生土器	広口壺	-	(2.0)	-	長石・石英・雲母	明赤褐色	普通 折り返し口縁 口脇部単筋 RL.施文施文	口縁部斜尖 支脚	表土	5% 後期 PL13
2	弦生土器	広口壺	-	(3.5)	-	長石・石英	にぶい黄褐色	普通 附加条一種繩文施文		表土	5% 後期 PL13
3	土器器	高坏	-	(7.2)	-	長石・石英・雲母・ 鉄磁性	棕	普通 外周縁位のへラ磨き 内面ヘラナデ		SR91	20% PL13
4	須恵器	高台付环	-	(1.7)	[84]	長石・石英・白色 針状鉢物	褐灰	普通 底部削輪へラ切り後高台貼付		表土	5% 木葉下層 PL13
5	須恵器	甕	-	(5.4)	-	長石・石英・白色 針状鉢物	オリーブ灰	普通 頭部擦引き浅伐沈線文施文 外面自然釉		表土	5% 木葉下層 PL13
6	須恵器	甕	-	(4.8)	-	長石・石英・白色 針状鉢物	灰	普通 頭部擦引き波状沈線文施文		SD 2	5% 木葉下層
7	須恵器	甕	-	(8.3)	-	長石・石英・白色 針状鉢物	灰	普通 外周縁位の平行引き 内面無文の当て具痕		表土	5% 木葉下層 PL13

番号	種 別	器 標	口 径	脇 高	底 径	胎 土	色 調	特 徴	輪 周	産 地	出土位置	備 考
8	陶器	瓶	-	(3.1)	[9.0]	長石	明褐色	クロコ成形 底部下端を除き釉薬施釉	灰釉	廻転・ 美濃	表土	5%
9	陶器	罐体	-	(4.4)	-	長石	にぶい黄	10本単位の捺目	鐵釉	廻転・ 美濃	表土	5% 17世紀 前半
10	陶器	罐体	-	(4.2)	[14.4]	長石・石英	にぶい黄褐色	8本単位の捺目 底部削輪へラ切り	鐵釉	廻転・ 美濃	表土	5% 19世紀 前半

番号	器 標	径	幅	厚さ	重 量	胎 土	色 調	特 徴	出土位置	備 考
11	土玉	27	23	0.5	16.76	長石・石英・雲母	にぶい棕	一方向からの突孔		表土

## 第4節 総括

### 1 はじめに

大城遺跡では、堅穴建物跡1棟、掘立柱建物跡2棟、土坑50基、井戸跡1基、溝跡3条、柱穴列4条、ピット群3か所を確認した。主な時代は、平安時代と江戸時代であり、断続的な土地利用が明らかとなった。

ここでは、特徴のある遺構と遺物について概観し、若干の考察を加え総括とする。

### 2 遺構について

#### (1) 堅穴建物跡

9世紀後葉の堅穴建物跡1棟を確認した。第2号堅穴建物跡から出土した土師器は、ロクロ成形、内面磨き調整と、黒色処理をした坏が大半を占めるに対し、在地の木葉下窯の須恵器は壺のみの出土である。また、覆土中から出土した須恵器の坏4点は、新治窯産の製品であったことから、9世紀後葉になると、木葉下窯群における須恵器生産が減少<sup>1)</sup>していくと考えられている。窯は、天井部と袖部の構築材をはじめ、焼土なども、遺存していなかった。また、ほぼ完形の土師器坏2点がそれぞれ正位と、逆位の状態で出土している。この出土状況を堤隆氏の窯廃棄プロセスの研究<sup>2)</sup>にあてはめると、「解体は窯全体、構築材処理は住居外へ廃棄、祭祀行為は、完形土器の据置き・土器の封鎖」の状況に相当すると考えられる。

今回の調査区は、東西に細長い2,379mの限られた調査面積であることから、集落の規模や変遷などについて言及はできないが、寺内遺跡における奈良時代の堅穴建物跡の密集した状況と比べると、散在した状況に変化したと考えられる。

#### (2) 土坑

50基の土坑のうち、江戸時代と考えられるものは、2基である。第9号土坑は、錢貨（寛永通寶）が出土し、形状や覆土の状況から、墓の可能性がある。第79号土坑は、江戸時代の土師質土器（培塿）が出土し、形状、覆土の状況が第9号土坑と類似していることから、江戸時代の墓の可能性がある。

そのほかの土坑は、遺構に帰属する遺物がないため、時期は不明である。分布状況は、調査区の東部、中央部、西部に散在している。平面形が長方形基調とするものは、東部に集中している。江戸時代の第9号土坑もその中に含まれている。主軸が、東西軸ではほぼ同一のものが第13～15号土坑、南北軸のものが、第1～7・10号土坑である。第9号土坑と第10号土坑の重複関係から、東西軸の方が後出と考えられる。第9号土坑と形状や規模が似ていることから、これらの土坑も墓の可能性がある性格は不明である。

#### (3) 掘立柱建物跡

2棟は、調査区域の西端部に位置している。出土遺物がほとんどないため、詳細な時期は不明である。また、両者の主軸方向が同一であることから、同時期に機能していた建物である可能性が高い。第1号掘立柱建物跡は、北部に庇が付く側柱建物で、柱間寸法は桁行210～215m（7～7.2尺）、梁行2.45m（8.1尺）、第2号掘立柱建物跡は、北部に庇が付く側柱建物で、柱間寸法は桁行2.15～2.60m（7.1～8.6尺）、梁行1.65～2.45m（5.5～8.2尺）であった。松嶋直美氏による柱間寸法による研究<sup>3)</sup>によると8尺から7尺という幅の時期（15世紀後葉～16世紀中葉）が当てはまる。2棟の掘立柱建物跡の時期を考える上で参考になると考えられる。

#### (4) 井戸跡

1基を確認した。調査区西部の第2号溝跡に近接している。平面形が楕円形で漏斗状を呈した素掘りの井戸である。

#### (5) 溝跡

3条を確認した。調査区の中央部から西部にかけて確認し、端部は調査区域外の北側と南側に延びている。溝3条が連結しているような位置関係で、排水や区画の溝と考えられる。

#### (6) 柱穴列

4条を確認した。第3・4号柱穴列は、第1号掘立柱建物跡と軸方向がほぼ同一であることから、建物に伴う構などの性格が考えられる。

## 8 ピット群

3か所を確認した。多くのピットは、形状から、掘立柱建物の柱穴と考えられるが、掘立柱建物としての配置を確認することはできなかった。PG 2は、第2・3号溝跡の密集していることから、調査区域外を含め、第2・3号溝によって区画された掘立柱建物の存在を示している可能性もある。

## 9 おわりに

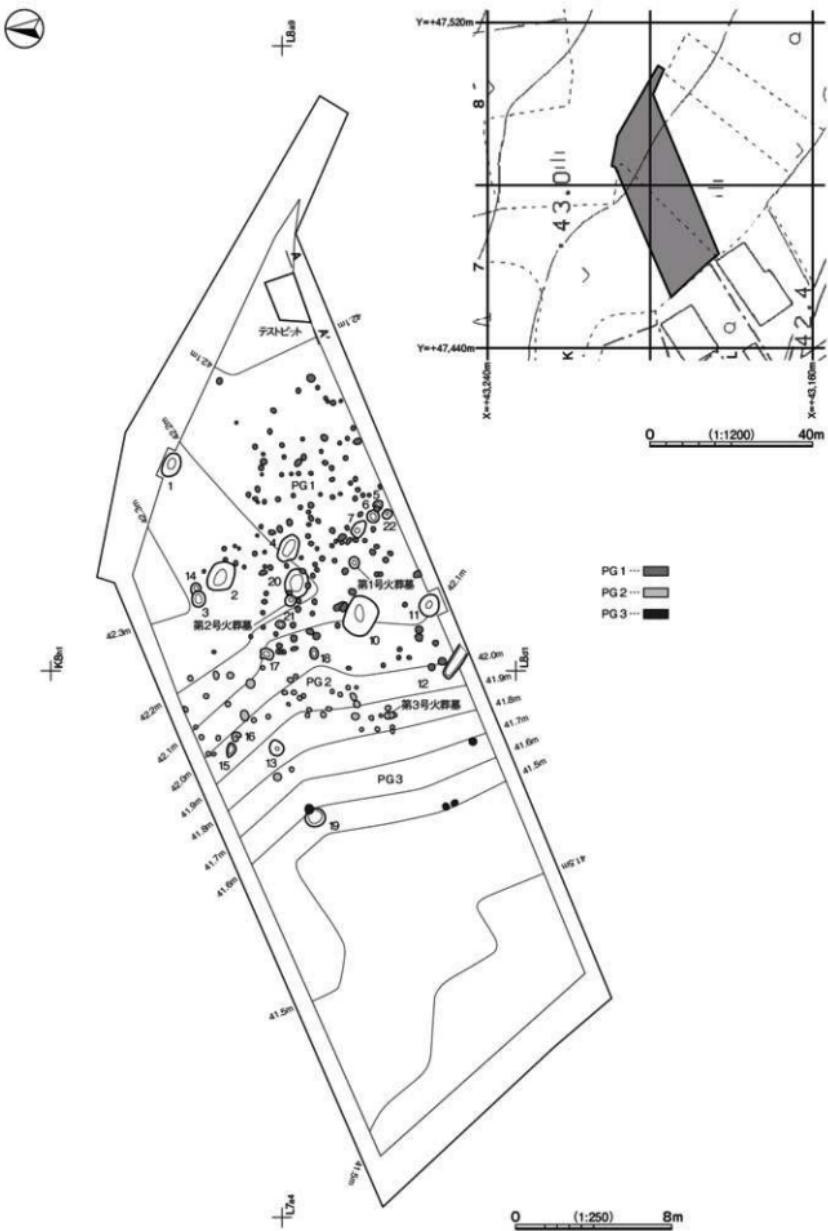
当遺跡の平安時代と江戸時代の遺構と遺物を中心に若干の考察をおこなった。調査区が狭小で、出土遺物が少量であることから、不明な点も多いが、当遺跡の一端を知ることができた。当遺跡が大足城跡・大城館跡の推定地に含まれていることから、今回の調査で時期が確定できなかった遺構は、形状から大足城跡・大城館跡と同時代やそれに続く時代の遺構の可能性がある。今後の調査で、当遺跡と隣接する中世城郭との関係がより一層究明されいくことを期待したい。

### 註

- 1) 赤井博之「須恵器技術・工人編成と生産体制－茨城県～供膳具を中心として～」『東国の須恵器』－関東地方における歴史時代須恵器の系譜－ 古代生産史研究会 「97シンポジウムレジメ」古代生産史研究会 1997年3月
- 2) 堀隆「菴の庵業プロセスとその意味」『山梨県考古学協会誌』第7号 山梨県考古学協会 1995年5月
- 3) 松崎直美「福島県浜通りにおける中近世集落の諸問題」「東北南部における中近世集落の諸問題」福島県中近世部会平成12年度セミナー資料集 2000年9月

### 参考文献

- ・ 関根達人「建物跡の年代は明確になるか－中近世掘立・竪穴の年代決定の手続き」『掘立と竪穴－中世遺構論の課題』 東北中世考古学研究会第7回研究大会資料集 東北中世考古学会 2001年6月
- ・ 関根達人「建物跡の年代は明確になるか－中近世掘立・竪穴の年代決定の手続き」『掘立と竪穴－中世遺構論の課題』 東北中世考古学叢書2 高志書院 2001年11月



第71図 舟塚古墳群調査区設定図・遺構全体図

# 第6章 舟塚古墳群

## 第1節 調査の概要

舟塚古墳群は、水戸市の北西部に位置し、桜川右岸の標高42mほどの台地から縁辺部にかけて立地している。調査面積は653m<sup>2</sup>で、調査前の現況は、畠地である。

調査の結果、火葬墓3基（奈良2・平安1）、土坑20基（時期不明）、ピット群3か所（時期不明）を確認した。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に3箱出土している。主な出土遺物は、須恵器（蓋・盤・短頭壺・長頭瓶・甕）などである。

## 第2節 基本層序

調査区南東部の台地の平坦部（K8a5区）にテストピットを設定し、基本土層（第72図）の観察を行った。

第1層は、暗褐色を呈する表土層である。粘性・締まりとともに普通で、層厚は23～28cmである。

第2層は、黒褐色を呈する砂質土である。白色粒子を微量に含み、粘性・締まりとともに普通で、層厚は24～32cmである。

第3層は、黒褐色を呈する粘質土である。ロームブロックを少量、鹿沼軽石を微量含み、粘性・締まりとともに普通で、層厚は8～27cmである。

第4層は、褐色を呈するハードローム層である。暗褐色ブロックを少量含み、粘性・締まりとともに強く、層厚は6～24cmである。

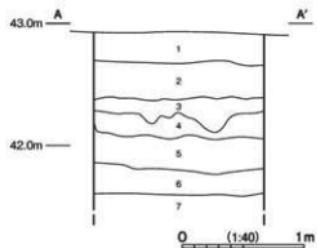
第5層は、褐色を呈するハードローム層である。黒色粒子（鉄分）と小礫を微量含み、粘性・締まりとともに強く、層厚は24～28cmである。

第6層は、明褐色を呈する粘土層で、第7層の漸移層と考えられる。黒色粒子（鉄分）を少量含み、粘性は普通で、締まりが強く、層厚は18～24cmである。

第7層は、灰白色を呈する茨城粘土層と考えられる。黒色粒子（鉄分）を少量含み、粘性・締まりとともに非常に強い。本来の層厚は不明であるが、20cmまで確認した。

遺構は、第4層の上面で確認した。

なお、本書所収の他遺跡のテストピットでは、鹿沼軽石層を確認したが、当遺跡のテストピットでは、鹿沼軽石層を確認できなかった。一方、テストピット最下層で茨城粘土層と考えられる粘土層を確認した。以上のことから、鹿沼軽石層を含むローム層の大半は、自然営力によって、流失したり、削平されたりしたと考えられる。



第72図 舟塚古墳群基本土層図（遺構全体図参照）

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 奈良・平安時代の遺構と遺物

火葬墓3基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

##### 火葬墓

###### 第1号火葬墓 (SK 8) (第73図 第40表 PL15・16)

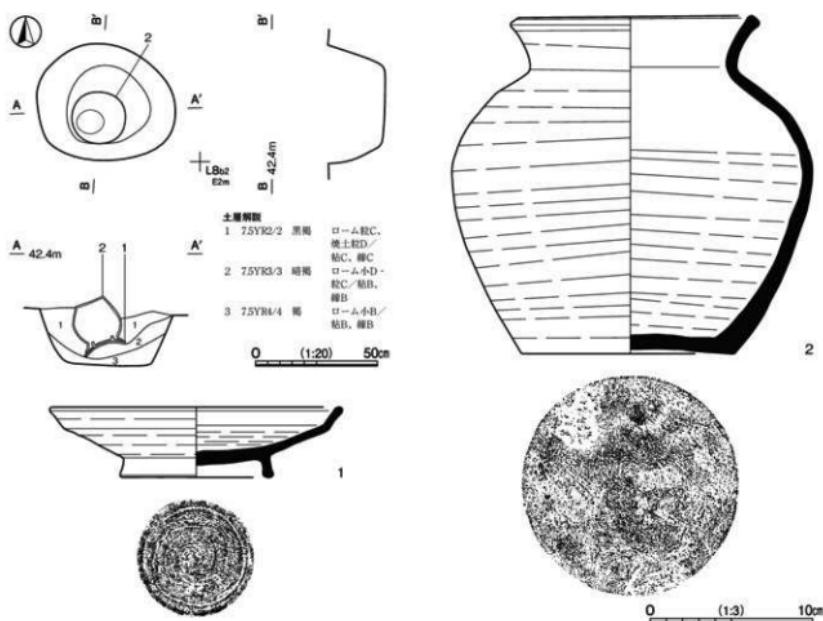
**位置** 調査区南東部のL8a2区、標高42.4mほどの台地平坦部に位置している。

**規模と形状** 長径0.58m、短径0.48mの楕円形で、長径方向はN-80°-Wである。深さは22cmで、底面は平坦である。壁は外傾している。

**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックを含んだ土で埋め戻している。

**遺物出土状況** 須恵器片2点(盤・甕)が出土している。1・2は逆位で、2の口縁部に蓋をするように、藏骨器を逆位で設置している。その内部から焼成人骨が出土している。焼成人骨は分析により、性別不明の成人一体と判明した(付章 自然科学分析参照)。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第73図 第1号火葬墓・出土遺物実測図

第40表 第1号火葬墓出土遺物一覧 (第73図)

番号	種 別	器 形	口径	器高	底径	胎 土	色 調	燒成	特 徴	出土状況	備 考
1	須恵器	盤	17.8	4.3	9.2	長石・石英・黒色粒 子・白色乳白玻璃	灰	普通	藏骨器の蓋として使用 ロクロ成形 底部削軸へラ切 口付貼り付け	覆土 中	90% 本蓋下 PL16
2	須恵器	甕	14.3	20.8	13.2	長石・石英・黒色粒 子・白色乳白玻璃	暗灰黄	普通	藏骨器として使用 ロクロ成形 口縁部内外自然釉	覆土 下蓋	100% 本蓋 PL16

### 第2号火葬墓 (SK 9)(第 74 図 第 41 表 PL15・16)

**位置** 調査区南東部のL8a2区、標高42mほどの台地平坦部に位置している。

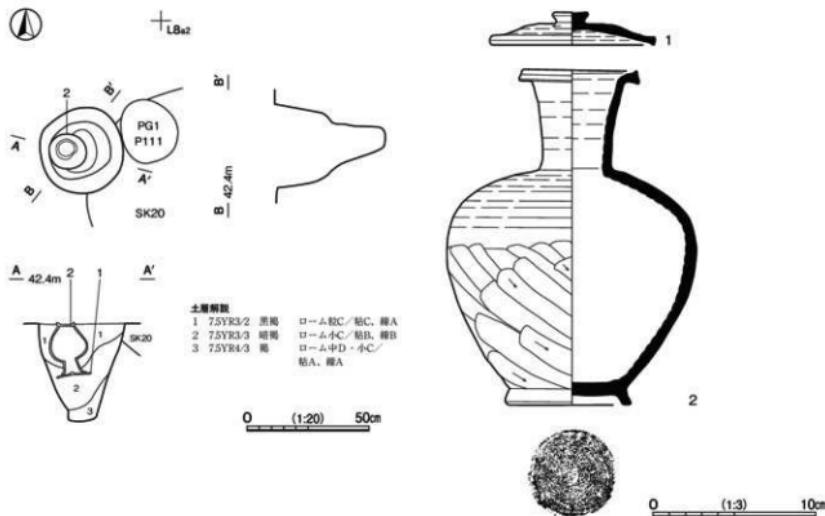
**重複関係** 第20号土坑を掘り込んでいる。

**規模と形状** 径0.35mの円形で、深さは45cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。

**覆土** 3層に分層できる。ロームブロックを含んだ土で埋め戻している。

**遺物出土状況** 須恵器片2点(蓋・長頸瓶)が出土している。2の口縁部に逆位の1を重ねた藏骨器を逆位で設置している。その内部から焼成人骨が出土している。焼成人骨は分析により、性別不明の青年以上一体と判明した(付章 自然科学分析参照)。

**所見** 時期は、出土土器から8世紀後葉と考えられる。



第74図 第2号火葬墓・出土遺物実測図

第41表 第2号火葬墓出土遺物一覧(第74図)

番号	種別	器種	口径	厚さ	底径	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	100	20	-	粘土・石英・黑色粘土	外面灰 内面灰褐色	普通 タンク状の焼み	藏骨器の蓋として使用 火葬部底部斜面へラ削り	覆土	95% 木葉下 9% PL16
2	須恵器	長頸瓶	70	[206]	[7.7]	有石・石英・黑色粘土 白色斜状粘土	灰黄	普通 底部斜面へラ削り	藏骨器と立てて使用 ロクロ成形 底部下半手持ちへラ削り 高台貼り付け	覆土	90% 木葉下 9% PL16

### 第3号火葬墓 (SK23)(第 75 図 第 42 表 PL15・16)

**位置** 調査区南東部のL7b0区、標高41~42mほどの台地の緩斜面部に位置している。

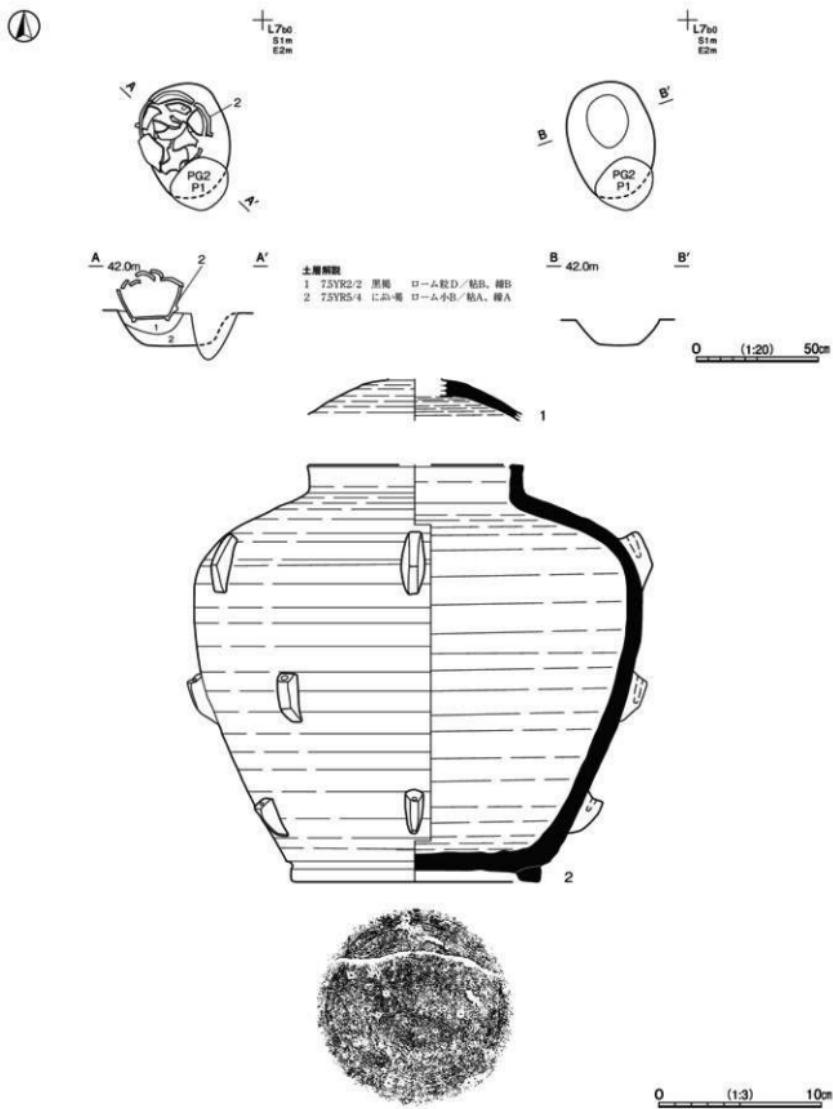
**重複関係** 第2号ピット群P1に掘り込まれている。

**規模と形状** 推定規模は長径0.47m、短径0.35mの楕円形で、深さは16cmである。長径方向はN-17°-Wで、底面は平坦で、壁は外傾している。

**覆土** 2層に分層できる。ロームブロックを含んだ土で埋め戻している。

**遺物出土状況** 須恵器片2点(蓋・短頸壺)が出土している。一部破損しているが、出土状況から復元すると、正位で設置した藏骨器2の上に1を重ねていたと推測できる。1の向きは不明である。その内部から、焼成人骨が出土している。分析したが、焼成人骨の性別と年齢、個体数は不明であった(付章 自然科学分析参照)。

**所見** 時期は、出土土器から9世紀前葉と考えられる。



第75図 第3号火葬墓・出土遺物実測図

第42表 第3号火葬墓出土遺物一覧（第75図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	地成	特徴	出土位置	備考
1	頭蓋骨	蓋	-	(26)	-	灰岩・石英・粗礫・白色針狀鉱物	暗灰黄	普通	載骨器の蓋に使用 ロクロ成形	覆土	20% 木築下 蓋 PL16
2	頭蓋骨	短頭蓋	[13.1]	(25.7)	15.1	灰岩・石英・黑色粒・白色針狀鉱物	褐灰	普通	ロクロ成形 体部装施突起18ヶ所 3条6単位の點 印付け (一段目と三段目封緘 二段目との間交叉)	覆土	20% 木築下 蓋 PL16

第43表 奈良・平安時代火葬墓一覧（第73～75図）

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	L8a2	N - 80° - W	楕円形	0.58 × 0.48	22	外傾	平坦	人為	須恵器	
2	L8a2	-	円形	0.35	45	外傾	平坦	人為	須恵器	SK20 → PG 1 P111 → 本跡
3	L7b6	N - 7° - W	楕円形	(0.47) × 0.35	16	外傾	平坦	人為	須恵器	本跡 → PG 2 P 1

## 2 その他の遺構と遺物

時代や性格を明確にできなかった土坑20基、ピット群3か所と遺構外出土遺物について記述する。

## (1) 土坑

土坑20基は、実測図(第76・77図)と一覧(第44表)で記載する。

## 第6号土坑(第76図 第44表)

位置 調査区南東部のL8b2区、標高42mほどの台地平坦部に位置している。

重複関係 第1号ピット群P143に掘り込まれている。

規模と形状 長径0.70m、短径0.60mの楕円形で、長径方向はN-22°-Eである。深さは23cmで、底面は平坦であり、壁は外傾している。

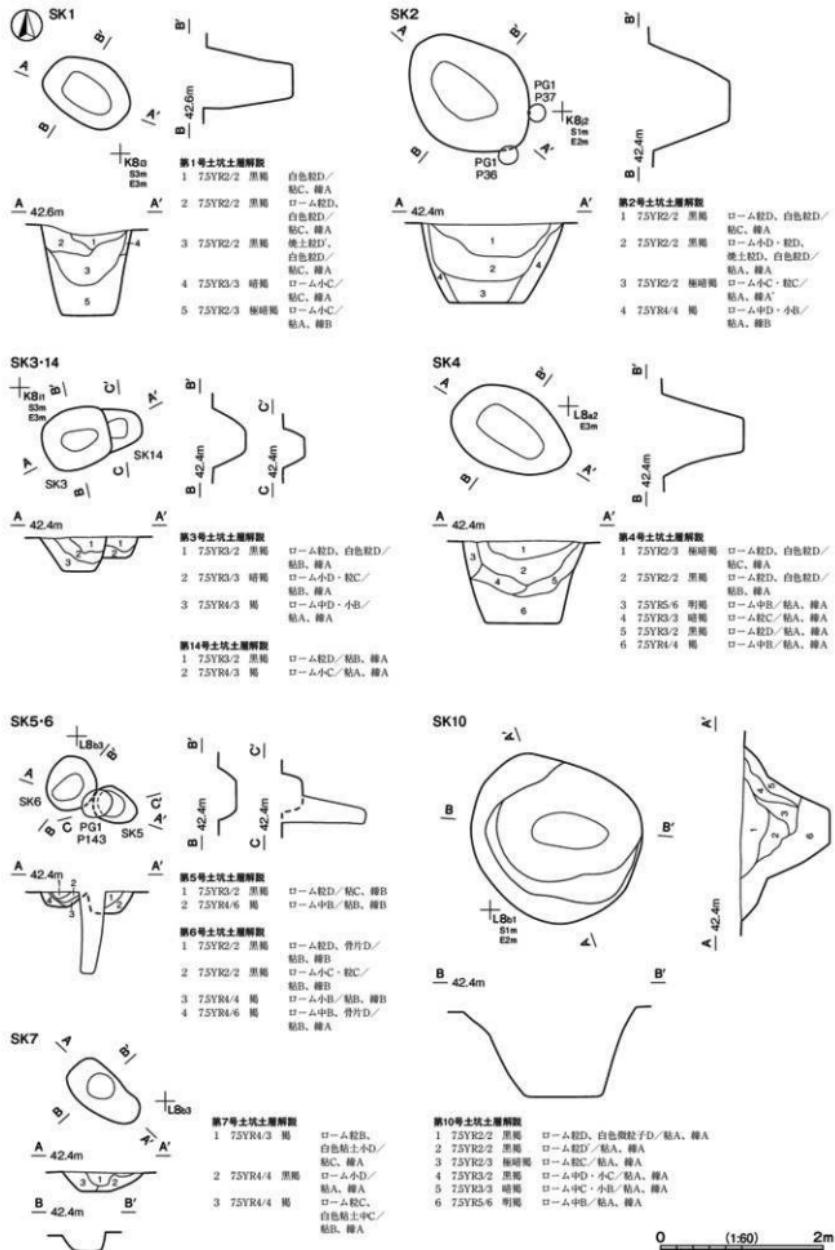
覆土 4層に分層できる。ロームブロックを含んでいることから人為堆積である。

遺物出土状況 鉄器1点(釘)が覆土中から出土しているが、錆による腐食が著しく、図示できなかった。さらに、覆土中から、焼成人骨が少量出土している。分析したが、焼成人骨の性別と年齢、個体数は不明であった。(付章自然科学研究参照)。

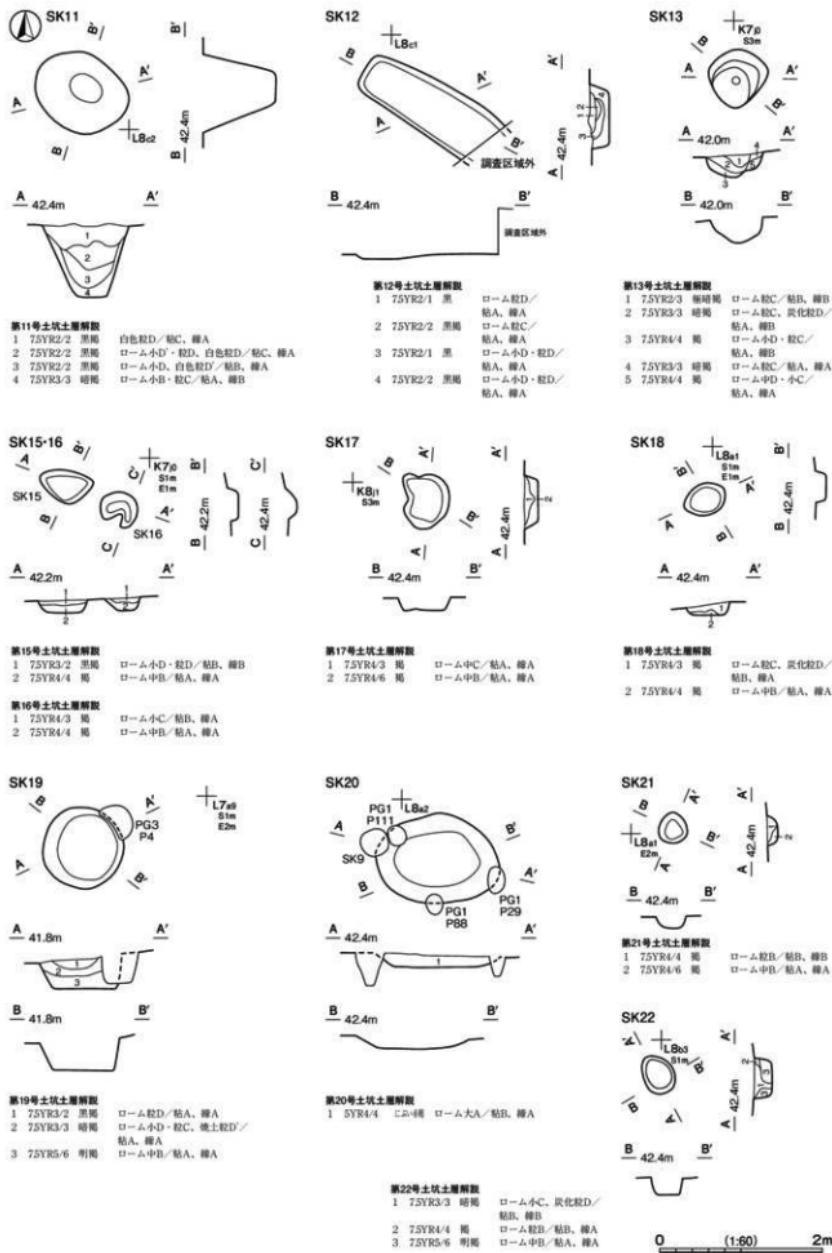
所見 性格は焼成人骨が出土していることから、火葬墓の可能性があるが、時期を含めて、詳細不明である。

第44表 その他の土坑出土遺物一覧(第76・77図)

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	K8i3	N - 45° - W	楕円形	1.14 × 0.76	118	外傾	平坦	人為	-	
2	K8i2	N - 50° - W	楕円形	1.76 × 1.36	98	外傾	平坦	人為	-	本跡 → PG 1 P36 → 37
3	K8i	N - 74° - E [長方形]	[楕円形]	(0.84) × 0.74	40	外傾	平坦	人為	-	SK14 → 本跡
4	L8a2	N - 72° - W [不整円形]	楕円形	1.56 × 1.00	100	外傾	平坦	自然 / 人為	-	
5	L8i3	N - 67° - W	楕円形	0.56 × 0.43	25	外傾 / 内傾	平坦	人為	-	本跡 → PG 1 P43
6	L8i2	N - 22° - E	楕円形	0.70 × 0.60	23	外傾	平坦	人為	-	本跡 → PG 1 P43
7	L8a2	N - 51° - W	楕円形	0.98 × 0.54	24	外傾	平坦	人為	-	
10	L8i1	N - 67° - W	楕円形	2.10 × 1.88	112	外傾	平坦	人為	-	
11	L8i1	N - 67° - W	楕円形	1.20 × 0.94	88	外傾	平坦	人為	-	
12	L8c1	N - 58° - W [長方形]	[長方形]	(1.78) × 0.70	24	外傾	平坦	人為	-	
13	K7j0	-	不整円形	0.68 × 0.64	30	外傾	平坦	人為	-	
14	K8i2	N - 81° - E [楕円形]	[楕円形]	0.52 × (0.40)	28	外傾	平坦	人為	-	本跡 → SK 3
15	K7j9	N - 82° - W [不整円形]	楕円形	0.66 × 0.42	13	外傾	平坦	人為	-	
16	K7j0	-	不整円形	0.46 × 0.44	13	外傾	平坦	人為	-	
17	K8j1	-	不整円形	0.68 × 0.64	16	外傾	平坦	人為	-	
18	L8a1	N - 68° - E	楕円形	0.52 × 0.38	14	外傾	平坦	人為	-	
19	L7a9	-	円形	1.00 × 1.00	42	外傾	平坦	人為	-	本跡 → PG 3 P4
20	L8a2	N - 89° - W	楕円形	1.52 × 1.10	16	外傾	平坦	人為	-	本跡 → SK 9, 17 P29 → 38, 11
21	K8j1	-	円形	0.38 × 0.36	14	外傾	平坦	人為	-	
22	L8i2	N - 40° - W	楕円形	0.50 × 0.38	22	外傾	平坦	人為	-	



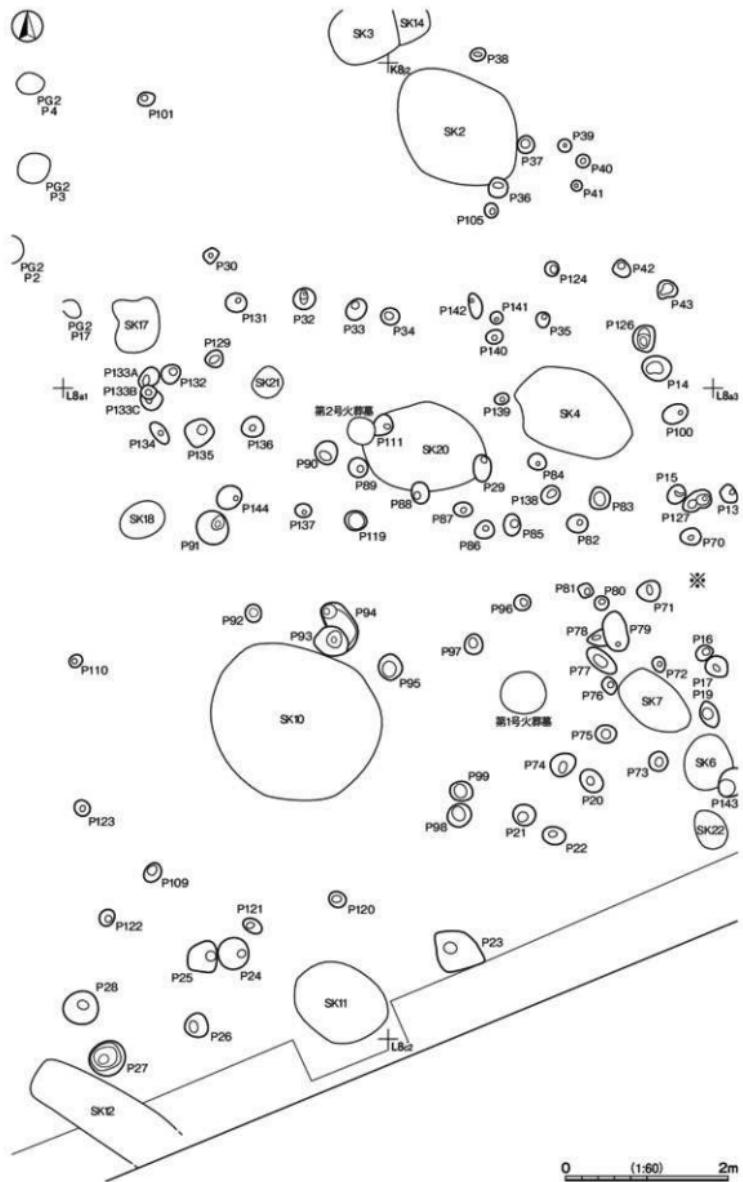
第76図 その他の土坑実測図(1)



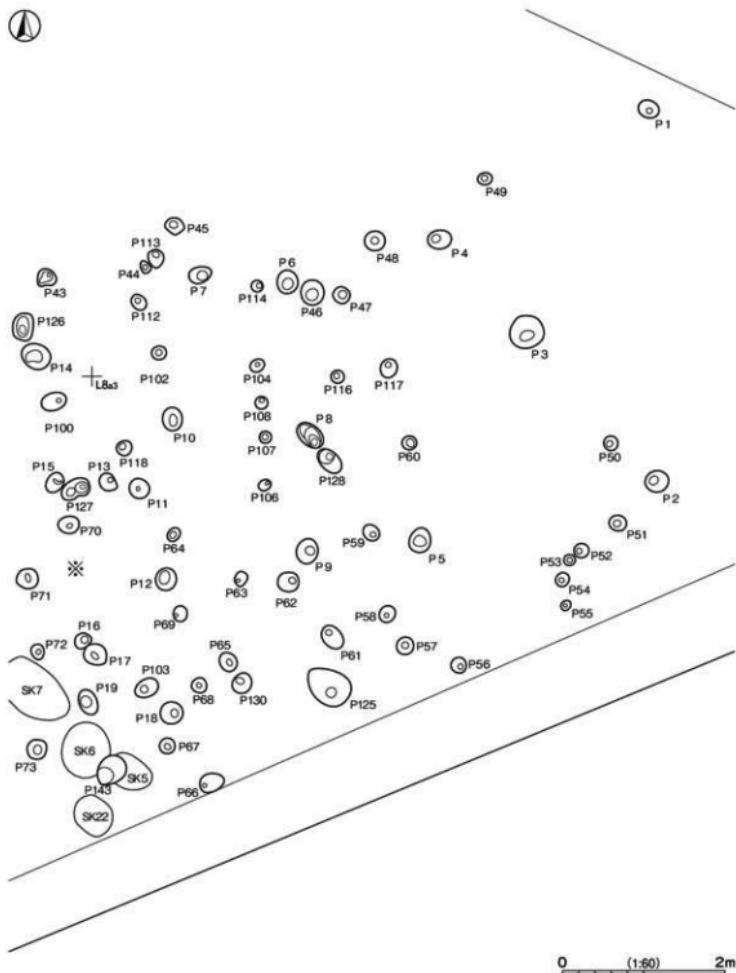
第77図 その他の土坑実測図(2)

## (2) ビット群

ビット群は3か所を確認した。平面図（第78～81図）と一覧（第45～47表）を記載する。



第78図 第1号ピット群実測図(1)

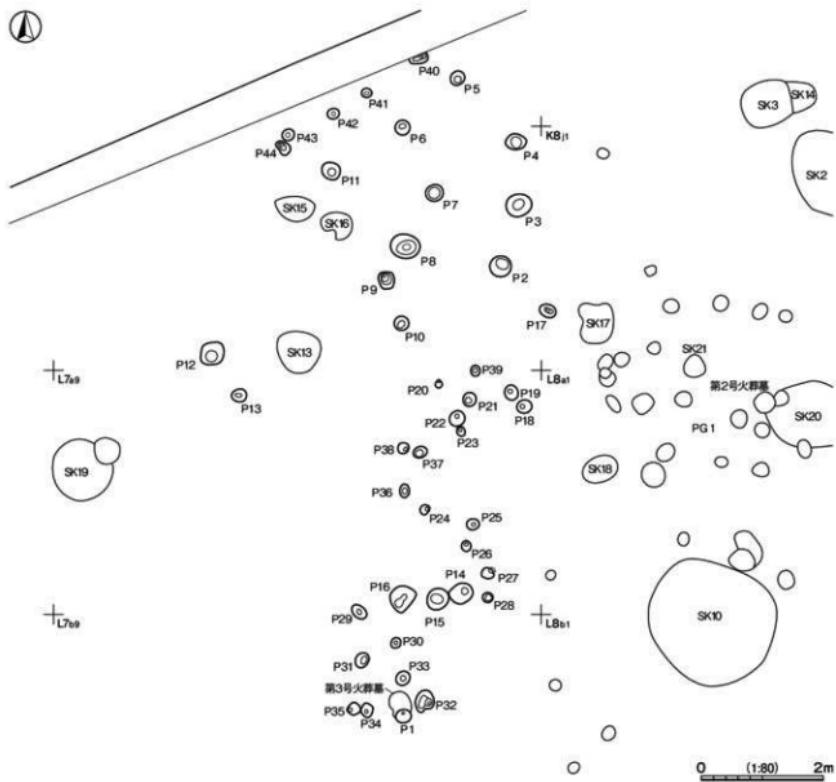


第79図 第1号ピット群実測図(2)

第45表 第1号ピット群ピット一覧 (第78・79図 PL15)

番号	位置	平面形	規 格 (cm)			番号	位置	平面形	規 格 (cm)			番号	位置	平面形	規 格 (cm)		
			長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)				長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)				長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
1	K84	椭円形	25	21	28	6	K83	椭円形	30	25	16	11	L8a3	円形	23	22	21
2	L8a4	円形	28	36	15	7	K83	椭円形	26	20	19	12	L8a3	円形	27	26	22
3	K84	円形	36	32	19	8	L8a3	椭円形	49	24	38	13	L8a3	椭円形	24	19	21
4	K84	椭円形	30	23	13	9	L8a3	椭円形	30	27	41	14	K82	円形	34	31	14
5	L8a3	円形	27	27	19	10	L8a3	椭円形	40	25	25	15	L8a2	椭円形	26	20	24

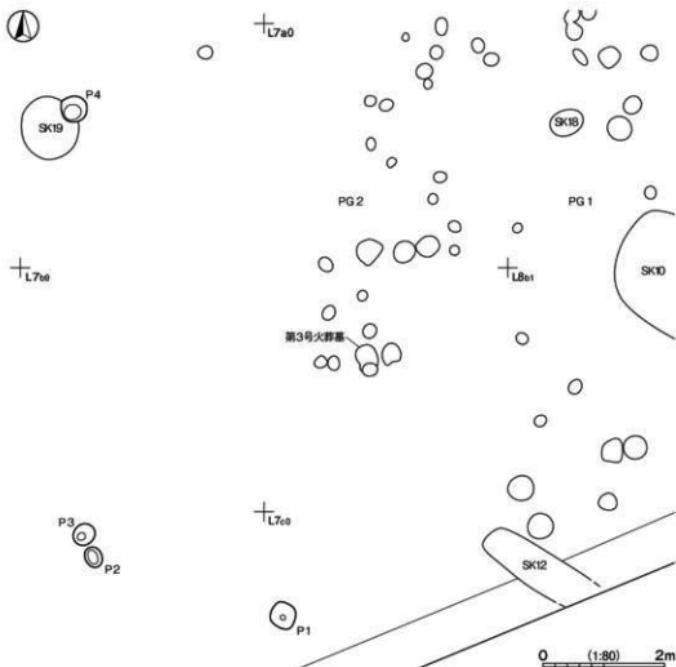
番号	位置	平面形	規 格 (cm)			番号	位置	平面形	規 格 (cm)			番号	位置	平面形	規 格 (cm)		
			長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)				長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)				長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
16	L8a2	楕円形	21 × 17	44	60	L8a3	P形	17 × 17	19	104	L8j3	楕円形	19 × 14	6			
17	L8a3	楕円形	30 × 26	30	61	L8a3	楕円形	32 × 21	56	105	L8j2	円形	17 × 15	17			
18	L8a3	円形	28 × 26	26	62	L8a3	楕円形	28 × 26	23	106	L8e3	楕円形	16 × 12	18			
19	L8a2	楕円形	44 × 21	23	63	L8a3	楕円形	18 × 16	27	107	L8a3	円形	15 × 14	12			
20	L8b2	楕円形	32 × 25	28	64	L8a3	楕円形	17 × 14	28	108	L8a3	円形	14 × 14	11			
21	L8b2	円形	30 × 28	22	65	L8a3	楕円形	24 × 20	37	109	L8e1	楕円形	27 × 20	12			
22	L8b2	楕円形	28 × 24	20	66	L8b3	楕円形	30 × 26	10	110	L8e1	楕円形	17 × 15	10			
23	L8b1	円形	53 × 50	17	67	L8b3	円形	20 × 20	13	111	L8a1	[円形・楕円形]	24 × (23)	36			
24	L8c1	円形	50 × 42	33	68	L8a3	円形	18 × 18	15	112	K8j3	楕円形	20 × 16	34			
25	L8b1	楕円形	38 × 34	35	69	L8a3	円形	20 × 19	16	113	K8j3	楕円形	41 × 20	20			
26	L8b1	円形	30 × 28	27	70	L8a2	楕円形	27 × 19	16	114	K8j3	円形	15 × 14	18			
27	L8c1	円形	45 × 40	24	71	L8a2	円形	26 × 25	14	115	K8j3	楕円形	13 × 11	16			
28	K8j1	円形	42 × 42	42	72	L8a2	楕円形	19 × 16	13	116	L8a3	楕円形	17 × 15	12			
29	L8a2	楕円形	34 × 21	24	73	L8b2	円形	25 × 24	14	117	K8j3	円形	19 × 19	21			
30	K8j1	楕円形	18 × 16	14	74	L8b2	楕円形	30 × 27	18	118	L8a3	楕円形	23 × 19	9			
31	K8j1	楕円形	21 × 17	16	75	L8b2	円形	26 × 24	12	119	L8a1	楕円形	27 × 23	52			
32	K8j1	円形	27 × 26	35	76	L8a2	楕円形	20 × 17	26	120	L8b1	楕円形	21 × 18	10			
33	K8j1	楕円形	27 × 23	30	77	L8a2	楕円形	38 × 22	11	121	L8b1	楕円形	25 × 17	24			
34	K8j2	楕円形	22 × 20	20	78	L8a2	[円形・楕円形]	(22) × 20	21	122	L8b1	円形	20 × 20	15			
35	L8j2	楕円形	18 × 16	18	79	L8a2	楕円形	50 × 38	31	123	L8b1	楕円形	20 × 18	12			
36	K8j2	楕円形	23 × 23	18	80	L8a2	円形	17 × 16	20	124	K8j2	円形	17 × 17	28			
37	K8j2	円形	21 × 20	8	81	L8a2	円形	19 × 18	30	125	L8a3	楕円形	60 × 42	37			
38	K8j2	楕円形	20 × 16	12	82	L8a2	楕円形	26 × 23	33	126	K8j2	楕円形	34 × 28	13			
39	K8j2	円形	16 × 15	11	83	L8a2	楕円形	29 × 26	18	127	L8a2	楕円形	38 × 23	19			
40	K8j2	円形	16 × 15	11	84	L8a2	楕円形	24 × 18	12	128	L8a3	楕円形	38 × 23	45			
41	K8j2	円形	22 × 22	8	85	L8a2	楕円形	28 × 21	29	129	K8j1	円形	20 × 20	19			
42	K8j2	楕円形	23 × 19	30	86	L8a2	円形	23 × 23	25	130	L8a3	楕円形	27 × 24	28			
43	K8j2	楕円形	25 × 22	20	87	L8a2	円形	22 × 20	17	131	K8j1	円形	25 × 23	29			
44	K8j3	楕円形	22 × 18	20	88	L8a2	楕円形	27 × 20	48	132	K8j1	円形	24 × 22	11			
45	K8j3	楕円形	14 × 11	14	89	L8a1	円形	25 × 25	10	133A	K8j1	[円形・楕円形]	(23) × 22	20			
46	K8j3	楕円形	32 × 28	27	90	L8a1	楕円形	30 × 27	29	133B	L8a1	円形	20 × 18	37			
47	K8j3	円形	20 × 20	20	91	L8a1	楕円形	40 × 40	20	133C	L8a1	[円形・楕円形]	27 × (25)	10			
48	K8j3	円形	24 × 23	14	92	L8a1	円形	22 × 19	20	134	L8a1	長方形	30 × 15	26			
49	K8j4	楕円形	19 × 13	21	93	L8a1	楕円形	42 × 35	30	135	L8a1	楕円形	35 × 30	26			
50	L8a4	円形	18 × 17	16	94	L8a1	楕円形	61 × 33	17	136	L8a1	円形	27 × 25	26			
51	L8a4	円形	22 × 18	30	95	L8a2	円形	32 × 29	9	137	L8a1	楕円形	20 × 17	17			
52	L8a4	円形	16 × 17	39	96	L8a2	円形	19 × 17	32	138	L8a2	楕円形	27 × 19	13			
53	L8a4	円形	14 × 13	13	97	L8a2	円形	25 × 23	17	139	L8a2	楕円形	17 × 14	27			
54	L8a4	円形	16 × 16	20	98	L8a2	円形	31 × 30	15	140	K8j2	楕円形	20 × 15	15			
55	L8a4	円形	24 × 22	20	99	L8a2	楕円形	27 × 24	11	141	K8j2	円形	15 × 14	16			
56	L8a4	円形	19 × 18	24	100	L8a2	楕円形	31 × 21	22	142	K8j2	長方形	30 × 17	25			
57	L8a3	円形	22 × 22	25	101	K8j1	楕円形	21 × 15	36	143	L8b3	楕円形	39 × 32	102			
58	L8a3	楕円形	40 × 25	30	102	K8j3	楕円形	21 × 17	26	144	L8a1	楕円形	33 × 27	27			
59	L8a3	楕円形	23 × 18	16	103	L8a3	楕円形	30 × 22	24								



第80図 第2号ピット群実測図

第46表 第2号ピット群ピット一覧 (第80図)

番号	位置	規 模 (cm)			番号	位置	規 模 (cm)			番号	位置	規 模 (cm)		
		平面形	長径 (cm)	短径 (cm)			平面形	長径 (cm)	短径 (cm)			平面形	長径 (cm)	短径 (cm)
1	L7b0	円形	25	×	23	17	16	L7a0	椭円形	45	×	37	22	
2	K7j0	円形	35	×	34	21	17	K8j1	椭円形	27	×	30	33	31
3	K7j0	椭円形	43	×	39	18	18	L7a0	椭円形	25	×	22	19	32
4	K7j0	椭円形	34	×	26	19	19	L7a0	椭円形	26	×	21	20	33
5	K7j0	円形	24	×	23	22	20	L7a0	円形	12	×	11	17	34
6	K7j0	円形	24	×	21	32	21	L7a0	円形	22	×	21	29	35
7	K7j0	円形	29	×	29	19	22	L7a0	円形	27	×	26	17	36
8	K7j0	椭円形	46	×	40	23	23	L7a0	椭円形	16	×	14	13	37
9	K7j0	椭円形	28	×	25	36	24	L7a0	椭円形	17	×	12	25	38
10	K7j0	円形	23	×	23	18	25	L7a0	椭円形	21	×	18	12	39
11	K7j0	椭円形	32	×	27	26	26	L7a0	椭円形	18	×	15	14	40
12	K7j9	椭円形	43	×	38	19	27	L7a0	椭円形	19	×	17	29	41
13	L7a0	円形	22	×	20	18	28	L7a0	円形	16	×	15	11	42
14	L7a0	椭円形	38	×	34	23	29	L7a0	椭円形	29	×	21	18	43
15	L7a0	円形	36	×	33	19	30	L7b0	円形	17	×	16	10	44



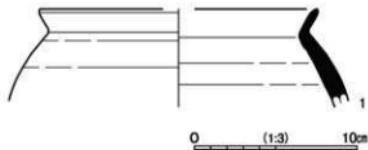
第81図 第3号ピット群実測図

第47表 第3号ピット群ピット一覧（第81図）

番号	位置	平面形	規 格 (cm)			番号	位置	平面形	規 格 (cm)		
			長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)				長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
1	L7e0	橢円形	48	43	22	3	L7c9	橢円形	35	27	10
2	L7e9	橢円形	48	41	26	4	L7a0	円形	46	44	36

## (3) 遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物について、実測図（第82図）と一覧（第48表）で記載する。



第82図 遺構外出土遺物実測図

第48表 遺構外出土遺物一覧（第81図）

番号	種 别	器 形	口 径	脚 間	底 径	始 土	色 調	焼成	特 徴	出 土 位 置	備 考
1	須恵器	甕	[17.0]	(6.0)	-	長石・石英・褐色粒子 白色斜方輝石	灰黄褐	普通	内外面クロコナテ	表土	5%木炭下層

## 第4節 総括

### 1 はじめに

舟塚古墳群からは火葬墓3基、土坑20基、ピット群3か所を確認した。主な時代は奈良・平安時代であり、墓域としての土地利用の実態が明らかとなった。

ここでは、特徴のある遺構と遺物について概観し、若干の考察を加え、総括とする。

### 2 奈良・平安時代

火葬墓3基を確認した。時期は、出土土器から第1・2号火葬墓が8世紀後葉で、第3号火葬墓が9世紀前葉である。いずれも、藏骨器を埋置している。第1・2号火葬墓は、調査区南東部の台地平坦部に位置し、近接している。第3号火葬墓は、第1・2号火葬墓と約8mほど離れた調査区西部寄りの緩斜面部に位置している。藏骨器の出土状況は、第1・2号火葬墓が逆位で、第3号火葬墓が、正位であった。いずれの藏骨器も、胎土に白色針状鉱物を含んだ木葉下窓の須恵器が使われている。また、これらの須恵器は摩擦痕などの使用痕は確認できなかった。

さらに、第3号火葬墓の藏骨器の身として使われた須恵器短頭壺は、体部に18か所の装飾突起が貼り付けられた特殊なものである。当初から藏骨器として作られたものと考えられる。以上のことから、第1・2号火葬墓と第3号火葬墓には、藏骨器の埋置方法や選択などの違いがみられる。

火葬墓についての近年の研究では、市毛美津子氏や吉澤悟氏の研究<sup>1)</sup>がある。市毛氏は、水戸市内の火葬墓を集め、藏骨器の年代や埋葬形態について論じている。それによると、水戸市内で確認されているものは、藏骨器として、既存の須恵器を使用しており、第3号火葬墓のような類例は見られない。また、埋葬方法については、伊東重敏氏<sup>2)</sup>の逆位埋葬が異常死を示すとの説に対して、水戸市内の類例を挙げ、正位埋葬が一部であり、逆位埋葬が多いことから、異常死が多いことになり、つじつまが合わないことを指摘している<sup>3)</sup>。さらに、吉澤氏の研究では、県内の古代火葬墓の分布状況を検証した結果、河川や湖岸に沿う形で広く展開し、特に、霞ヶ浦周辺と那珂川流域には圧倒的な数の火葬墓が集中していることを明らかにしている。また、これまでの研究によって、藏骨器を逆位で埋葬する方法は那珂川流域に多いのに対し、霞ヶ浦周辺ではほとんど見られないことが判明している。これが何を意味するのか、今後の課題である。

### 3 おわりに

調査区は狭小で、出土遺物が少量であることから、不明な点も多いが、この一帯は墓域として機能していたことを知ることができた。舟塚古墳群の中に火葬墓があるのは、古墳時代後期、終末期に古墳を造営した在地勢力による集団が、後に火葬を採用していたことを物語るものなのか、また、火葬墓が採用されていることから、当遺跡の周辺に公的建物や寺院が存在し、中央と係わりのある役人や僧侶がいた可能性を示しているものなのか、今後の大いな課題となる。

#### 註

- 1) a 市毛美津子「律令時代における火葬墓と藏骨器の様相－水戸市内資料を中心として－」『斐良岐考古』第10号 斐良岐考古同人会 1988年4月
- b 吉澤 悟「常陸国における古代火葬墓の分布とその背景」『考古学雑誌』西野元先生退官記念論文集 西野先生退官記念会 1996年2月
- 2) 伊東重敏「水戸地方における古代窯業の研究（そのI－序論－）水戸市木葉下町落合発見の遺構」常陸考古学研究所 1973年3月
- 3) 1) a と同じ

# 付章 自然科学分析

## 第1節 中道遺跡の掘立柱建物跡出土柱材の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

中道遺跡（茨城県水戸市牛伏町140-9ほか所在）は、桜川右岸の標高約38～54mの台地上にある。古墳・奈良・平安時代を中心とした遺跡で、掘立柱建物跡・井戸跡・道路跡や土師器・須恵器・陶磁器などの遺物が検出されている。今回は掘立柱建物跡の柱穴から検出された木材の樹種同定を行い、用材に関する検討を行う。

### 1. 試料

樹種同定用試料は、建物跡から検出された柱穴内の木材4点である。試料の詳細は結果と併せて表に示す。

### 2. 分析方法

柱材から小片を切り出したあと、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の各切片を作成する。光学顕微鏡で観察し、木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、鳥地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

### 3. 結果

結果を表1に示す。木材の保存状態はやや悪い。いずれも芯持丸木と思われるが、細片になり復元が難しいものもある（?と記載）。いずれの試料もモミ属であった。以下に検出された種類の形態的特徴を述べる。

#### ・モミ属（*Abies*）マツ科

仮道管の早材部から晚材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型。放射組織は単列で、細胞高が高い（20以上）ものが散見される。今回の試料はすべて材や節に近い部分など組織が変形しているものが多い。

### 4. 考察

柱材はいずれもモミ属である。モミ属のなかでも暖地に生育するモミは、巨木になるため、太くまっすぐな木材を得やすい。また、加工もしやすことから、建築材や器具材としての需要がある。モミは気象条件が悪い場所（気温の年較差が大きい等）や、土地条件が悪い場所（表土が流失しやすい谷頭・谷筋・河川沿いなど）にツガとともに森林を構成する。関東では自然度の高い森林において、内陸部を中心にモミ・ツガ林が生育していることから（現在は開発や植林によって大部分が失われている）、入手が容易であったと思われる。

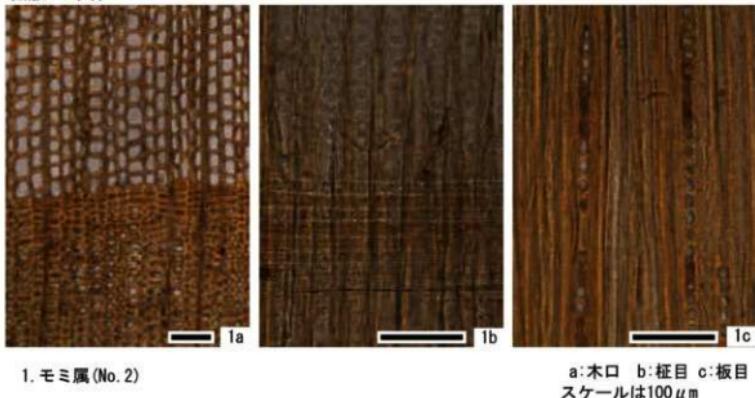
出土木製品用材データベース（伊東・山田・2012）を用いて、県内遺跡における古墳・奈良・平安時代の住居構築材の状況をみると、ほとんどが焼失住居の炭化材である。焼失住居の炭化材はコナラ節やクヌギ節が圧倒的に多い。

モミ属は、低地等で検出される非炭化の住居構築材の中にわずかに認められる程度である。コナラ節やクヌギ節は、炭として残存しやすい性質があることから、焼失住居では相対的にこれらの割合が高くなる。おそらく、当時は、モミ属をはじめとする他の樹種も住居構築材として多用されていたと考えられる。

表1. 樹種同定結果

No.	試料名	用途	木取り	種類
1	SBI P6	柱材	芯持丸木?	モミ属
2	SBI P7	柱材	芯持丸木	モミ属
3	SBI P8	柱材	芯持丸木	モミ属
4	SBI P1	柱材	芯持丸木?	モミ属

## 図版1 木材



## 引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所,  
伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.  
伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.  
伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.  
伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.  
伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.  
伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース,海青社,449p.  
Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編) 2006,針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト  
伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].  
鳥地謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.  
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

## 第2節 舟塚古墳群の出土人骨

国立科学博物館人類研究部  
中山なな・梶ヶ山真里・坂上和弘

### 1. はじめに

今回の調査では、第1～3号火葬墓、第6号土坑の4地点より、焼成を受けた人骨が出土した。第6号土坑では遺構内より、第1～3号火葬墓では火葬骨器とされる奈良・平安時代の須恵器の内部より人骨が出土した。これらの骨について、残存部位の同定、死亡年齢と性別の推定、そして形態学的観察を試みた。出土人骨は国立科学博物館人類研究部が保管している。また、遺構の位置や形態、藏骨器の詳細については第6章を参照されたい。

### 2. 方法

まず、焼成人骨を十分乾燥させたのち、9.5mm、4mm、および1mmの三種類の篩を用いて破片を大きさごとに分類した。9.5mmと4mmの篩に残った破片は、適宜骨表面をクリーニングした上で部位同定を試み、頭蓋、歯、椎骨、肋骨、寛骨、四肢骨、不明に分類した。部位不明とした破片のうち、9.5mmの篩に残った破片は「大破片」、4mmの篩に残った破片は「中破片」とした。また、藏骨器がほぼ完形の状態で出土した第1号火葬墓と第2号火葬墓については、人骨以外の混入物の有無も確認した。1mmの篩に残った破片は「細破片」、1mmの篩を通過した破片は「微細破片」とした。統いて、分類された部位・破片ごとに重量測定と色調・形態の観察を行った。

さらに、これら焼成人骨の観察を踏まえ、個体属性、埋葬部位、焼成について、以下の方法で検討した。

個体属性については、最小個体数、死亡年齢、性別を、残存部位とその形態、および総重量から推定した。最小個体数は、残存部位の重複が認められず、かつ総重量が1個体として妥当である場合、1個体とみなした。総重量については、焼成を受けた成人骨1個体分が概ね約900gから約4kgとされることから( Ubelaker 2009 )、これを1個体の目安とした。焼成人骨の死亡年齢・性別の推定は、焼成に伴う収縮や変形により一般的に困難であるが、死亡年齢は四肢骨骨端の癒合状態、頭蓋縫合の消失の程度、歯の咬耗などにより、性別は頭蓋や寛骨の形態などにより推定を試みた。

埋葬部位については、残存部位と総重量から、特定の部位に偏りがあるかどうか、また全身の骨全てが悉く埋葬されているかどうか、あるいは一部のみが埋葬されているかを検討した。

焼成については、骨片の亀裂と色調から検討した。骨は熱を受けると、長軸方向の亀裂、階段状の亀裂、螺旋状ないしは曲線の横断方向の亀裂が生じるが、この中でも特に螺旋状ないしは曲線の横断方向の亀裂は、付着する筋肉の収縮と焼失に由来するとされる(Symes et al. 2008)。こうした螺旋状ないしは曲線の亀裂の有無に基づき、骨に筋肉が付着した状態で焼成を受けたのか、あるいは白骨化した状態で焼成を受けたのか検討した。

骨の色調は、焼成の進行とともに変化するため、焼成段階の大まかな指標として有効とされる(Walker et al. 2008)。概して、焼成の初期段階では黄色ないしは明褐色、有機物の炭化が進む段階(600度程度)では黒色ないしは暗灰色、炭化物の燃焼が進む段階(800～1000度程度)では明灰色ないしは白色を呈する傾向がある。この傾向に基づき、全体としてどの程度の焼成を受けているか、また焼成が特に進んでいる部位とそうでない部位がどのように分布しているか検討した。

### 3. 出土人骨の観察所見(表1)

#### 第6号土坑

土坑内の暗褐色土中より焼成人骨片が出土した。微細な骨片や灰と、土、およびその他の混入物とを分別することが困難であったため、9.5mm、4mm、1mmの各篩に残った骨片のみを観察対象とした。

骨片の総重量は30.6gである。2～3cm程度の破片が少量残存するが、ほとんどは長さ1cm以下の破片である。詳細な部位同定は不可能であったが、大破片には四肢長骨の骨幹片と思しき破片も含まれる。色調は概ね白色を呈し、一部破片の内面では明灰色も認められた。

個体数は少なくとも1個体と考えられるが、総重量が1個体分に満たないこと、また重複部位の有無が確認できな

いことから、1個体の一部のみが残存しているのか、あるいは複数個体に由来する骨片の一部が残存しているのかは定かではない。死亡年齢・性別は不明である。

大破片では長軸方向の亀裂が認められたが、全体としては細かな破片が多く、観察が困難であった。色調から、人骨に含まれる有機物の燃焼が進むまで比較的の高温で焼成を受けたようである。

#### 第1号火葬墓（写真図版）

須恵器の甕より出土した。総重量は823.2gである。ただし、細破片・微細破片には多量の暗褐色土が含まれており、細破片・微細破片を除いた重量は279.5gである。最も大きな破片は長さ9cm程度の四肢骨片で、その他にも長さ5cm以上の破片が複数残存する。

部位同定が可能な破片は157g、部位不明の破片は大破片と中破片合わせて122.5gであった。確認された部位は頭蓋、椎骨、寛骨、四肢骨で、全身の各部位に及んでいる。重量は四肢骨が最も大きく116.8gで、次いで頭蓋が33.6g、椎骨・寛骨はそれぞれ5g以下であった。頭蓋では上顎、下顎のほか、頭蓋冠の破片が複数残存する。椎骨は、主に胸椎ないしは腰椎の椎弓片である。四肢骨では左右不明上腕骨遠位端、右左大腿骨近位部、左右不明脛骨近位・遠位端部、左右不明腓骨遠位端、左右不明膝蓋骨の破片が確認されたほか、左距骨、左踵骨、左右不明中足骨の骨頭部が確認された。いずれの部位も、1個体分のみ残存する。

四肢骨骨幹片では、長軸方向の亀裂に加え、爪状に曲線を描く横断方向の亀裂が複数認められた。色調は、外面、内面、断面いずれも概ね白色を呈するが、大腿骨近位部の前面から内側にかけて、皮質骨の外面・内面で暗灰色を呈する部分がある。また、腓骨遠位端と距骨滑車上面の骨表面で明灰色が確認されたほか、部位不明四肢骨骨幹片の皮質骨の断面で一部黒色が確認された。

以上の観察を踏まえると、重量と残存部位から、最小個体数は1個体と推定される。脛骨近位端と腓骨遠位端の癒合が完了していることから、成人と推定される。性別は不明である。残存部位から、特定の部位を選択した可能性は低いが、総重量が少なく、全ての骨が埋葬の対象とはならなかった可能性がある。なお歯、肋骨、寛骨は今回の観察では確認されなかつたが、これらの部位は変形・破損を受けやすく同定が困難な部位でもあり、不明破片に含まれているのか、もとより埋葬の対象とならなかつたのかは定かではない。焼成については、爪状に曲線を描く亀裂が認められたことから、骨に筋肉が付着した状態で焼成を受けたと推定される。大腿骨近位部など、一部焼成が進んでいない部位も見受けられるが、全体としては骨に含まれる有機物が炭化を経て十分に燃焼する程度にまで、比較的の高温で焼成を受けたようである。

#### 第2号火葬墓（写真図版）

須恵器の長頭瓶より出土した。総重量は391.4gである。炭化物片と焼土塊が合計0.2gほど混入していた。また、細破片・微細破片には暗褐色土も若干含まれる。最も大きな破片は、長さ5cm程度であるが、9.5mmの箇に残った破片の大多数は長さ1~3cmの破片である。部位同定が可能な破片は80.2g、部位不明の破片は大破片と中破片合わせて171.4gであった。

確認された部位は頭蓋、椎骨、四肢骨で、ほぼ全身に及んでいる。重量は四肢骨が最も大きく49.9gで、次いで頭蓋が27.8g、椎骨が2.5gであった。頭蓋では側頭骨錐体、上顎、下顎、頭蓋冠の破片が、椎骨では頚椎と思しき破片が、四肢骨では左右不明桡骨頭、左右不明膝蓋骨、第一中足骨（右？）の破片が確認された。いずれの部位も1個体分のみ残存する。

四肢骨骨幹片では、長軸方向の亀裂に加え、爪状に曲線を描く横断方向の亀裂が複数認められた。色調は、外面、内面、断面いずれも概ね白色を呈するが、下顎歯槽内部や四肢骨の皮質骨の断面など、頭蓋・四肢骨の一部で明灰色・暗灰色もわずかに認められた。

以上の観察を踏まえると、重量と残存部位から、最小個体数は1個体と推定される。橈骨骨頭の癒合が完了していることから、死亡年齢は青年以上と推定される。性別は不明である。総重量から、藏骨器内に残存していた破片は、1個体分全てではなく一部のみであると考えられる。残存部位がほぼ全身におよんでいることから、特定の部位を選択した可能性は低い。第1号火葬墓と同様、歯、肋骨、寛骨は確認されなかつたが、これらの部位が不明破片に含まれているのか、もとより埋葬の対象とならなかつたのかは定かではない。焼成については、爪状に曲線を描く亀裂が認められたことから、骨に筋肉が付着した状態で焼成を受けたと推定される。骨片の色調から、全体として骨に含まれる有機物が炭化を経て十分に燃焼する程度にまで、比較的の高温で焼成を受けたようである。

### 第3号火葬墓

須恵器の短頸壺より出土した。壺の大部分は破損しており、焼成人骨は多量の暗褐色土と混ざった状態で残存していた。微細な骨片や灰と、土、およびその他の混入物とを分類することが困難であったため、95mm、4mm、1mmの各節に残った人骨片のみを観察対象とした。

総重量は828gである。このうち、部位同定が可能な破片は33.4g、部位不明の破片は大破片・中破片合わせて47.8gであった。最も大きな破片は、長さ4cm程度で、95mmの節に残った破片の大多数は長さ2~3cmの破片である。

確認された部位は頭蓋、肋骨、四肢骨で、ほぼ全身に及んでいる。重量は、四肢骨が最も大きく23.9gで、次いで頭蓋が8.6g、肋骨が0.9gであった。頭蓋は頭蓋冠の破片が確認された。縫合の閉鎖はさほど進んでいない。四肢骨片は主に骨幹の破片で、詳細な部位は同定できなかった。

四肢骨骨幹片では、長軸方向の亀裂に加え、爪状に曲線を描く横断方向の亀裂もわずかに認められた。色調は、外面、内面、断面いずれも概ね白色を呈するが、主に四肢骨骨幹片の皮質骨の断面で明灰色や暗灰色も認められた。

以上の観察を踏まえると、残存部位から、最小個体数は1個体と推定される。死亡年齢・性別は不明である。総重量は成人1個体分の重量を大幅に下回るが、壺の大部分が破損しており、埋葬の時点で納められていた部位全体をうかがい知ることはできない。ただし残存部位からは、特定の部位を選択した可能性は低いと考えられる。焼成については、爪状に曲線を描く亀裂が認められたことから、骨に筋肉が付着した状態で焼成を受けたと推定される。色調から、全体として骨に含まれる有機物が炭化を経て十分に燃焼する程度にまで、比較的高温で焼成を受けたようである。

### 4.まとめ

今回の舟塚古墳群の調査では、奈良・平安時代の火葬蔵骨器とされる須恵器と土坑より焼成人骨が出土した。蔵骨器より出土した焼成人骨は、いずれも最小個体数は1個体と推定された。埋葬の対象となったのは、全身の骨全てではなく一部であったようだが、特定の部位には偏っておらず、膝蓋骨や中足骨など比較的小さな骨も含まれる。また骨片に見られる亀裂から、いずれも白骨化した状態で焼成を受けたのではなく、筋肉が付着した状態で焼成を受けたと考えられる。骨片の色調からは、全身にわたって比較的高温で焼成を受けたようである。各個体の死亡年齢と性別は、焼成による破損・変形により推定が困難で、第1号火葬墓と第2号火葬墓の大まかな死亡年齢のみ推定が可能であった。いずれも性別は推定し得なかった。

茨城県内における古代の火葬墓は、現在の水戸市を中心とする那珂川流域と、石岡市・土浦市を中心とする霞ヶ浦周辺の二地域に集中するが、これら二地域の火葬墓には、蔵骨器の器質、器種、埋納位の点で明確な違いが存在することが知られている（吉澤1995）。舟塚古墳群は那珂川流域に位置するが、霞ヶ浦周辺に位置する古代火葬墓においても、本遺跡の事例と同様に総重量が1,000gに満たず、かつ埋葬部位が特定の部位には偏らない例が報告されている（土浦市遺跡調査会1998、パリノ・サーヴェイ株式会社2017など）。蔵骨器の特徴のみならず、遺体の焼成や埋葬対象となる骨の部位や量についても地域的な差異が存在するのか、今後の検討課題としたい。

### 参考文献

- Symes, S. A., Rainwater, C. W., Chapman, E. N., Gipson, D. R., & Piper, A. L. 2008. Patterned thermal destruction of human remains in a forensic setting. In C. W. Schmidt & S. A. Symes (Eds.), *The Analysis of Burned Human Remains*. San Diego: Academic Press, pp.15–54.
- Ubelaker, D. H. 2009. The forensic evaluation of burned skeletal remains: A synthesis. *Forensic Science International*, 183(1–3), pp.1–5.
- Walker, P. L., Miller, K. W. P., & Richman, R. 2008. Time, temperature, and oxygen availability: An experimental study of the effects of environmental conditions on the color and organic content of cremated bone. In C. W. Schmidt & S. A. Symes (Eds.), *The Analysis of Burned Human Remains*. San Diego: Academic Press, pp.129–135.
- 土浦市遺跡調査会編 1998「前谷遺跡群（東原遺跡・前谷東遺跡・前谷西遺跡）東原観音塚」土浦市教育委員会  
パリノ・サーヴェイ株式会社 2017「宮中野古墳群出土人骨」公益財團法人茨城県教育財团編集・発行『宮中野古墳群』  
吉澤悟 1995「茨城県における古代火葬墓の地域性－土浦市立博物館保管の骨蔵器の資料紹介および県内事例の集成から－」土浦市立博物館紀要第6号, pp.1–42

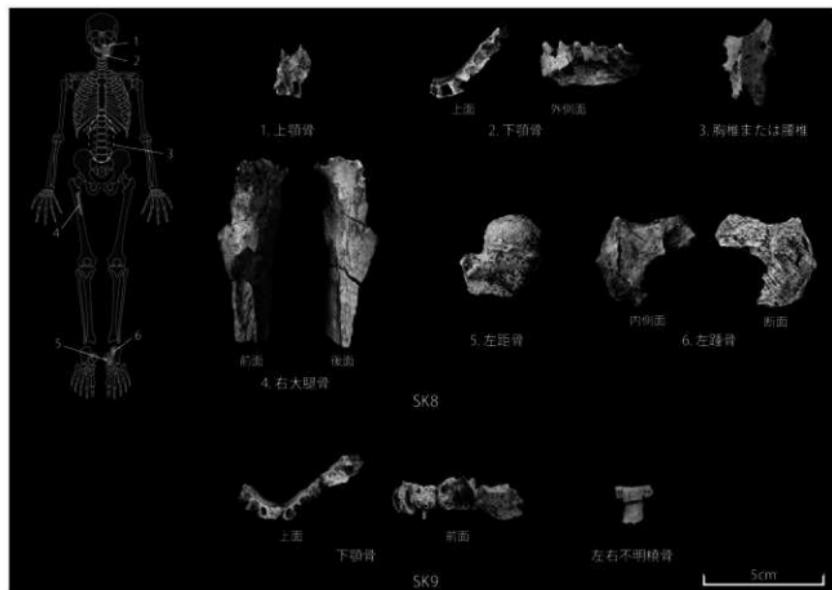
表1 出土焼成人骨の重量(g)

遺構	頭蓋	歯	椎骨	肋骨	寛骨	四肢骨	大破片	中破片	細破片	微細破片	混入物	総重量
SK6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	10.4	16.6	3.6	-	-	30.6
第1号火葬墓	33.6	0.0	5.0	0.0	1.6	116.8	80.0	42.5	92.5	451.2	0.0	823.2
第2号火葬墓	27.8	0.0	2.5	0.0	0.0	49.9	55.3	116.1	54.0	85.6	0.2	391.4
第3号火葬墓	8.6	0.0	0.0	0.9	0.0	23.9	13.8	34.0	1.6	-	-	82.8

第6号土坑（SK6）と第3号火葬墓（SK23）は、多量の暗褐色土中に少量の人骨片が散在した状態であった。微細な骨片や灰と、土、およびその他の混入物とを分類することが困難であったため、各箇に残った骨片のみを観察対象とした。

第1号火葬墓（SK8）の細破片・微細破片は、暗褐色土を多量含む。

第2号火葬墓（SK9）の混入物内訳：焼土0.1g、炭化物0.1g未満。



写真図版1

写 真 図 版





中道・寺内・大城遺跡・舟塚古墳群遠景（南から）



中道遺跡全景（南東から）

PL2



A区全景（南から）



B区全景（北から）



C区全景（北から）



第1号掘立柱建物跡



第1号掘立柱建物跡柱穴断面割り状況



第1号掘立柱建物跡柱材出土状況



第3号掘立柱建物跡



第4号土坑



第1号道路跡



第1号道路跡遺物出土状況(1)



第1号道路跡遺物出土状況(2)



第1号道路跡掘方



第2号掘立柱建物跡



第3号井戸跡



第1号土坑墓遺物出土状況（人骨）



第1号土坑墓遺物出土状況（錢貨）



第1号井戸跡



第2号井戸跡土層断面



第2号井戸跡



第6号土坑



第1号溝跡



第2~4・6号溝跡



第5号溝跡土層断面



第5号溝跡



第3号掘立柱建物跡・第4号土坑・第1号道路跡・第3号井戸跡・第1号土坑墓・遺構外出土遺物



寺内遺跡遠景（北東から）



寺内遺跡全景（南東から）



テストピット土層断面



第1号竪穴建物跡遺物出土状況(1)



第1号竪穴建物跡遺物出土状況(2)



第1号竪穴建物跡



第2号竪穴建物跡遺物出土状況



第2号竪穴建物跡



第3号竪穴建物跡遺物出土状況(1)



第3号竪穴建物跡遺物出土状況(2)



第3号竖穴建物跡遺物出土状況(3)



第3号竖穴建物跡遺物出土状況(4)



第3号竖穴建物跡遺物出土状況



第3号竖穴建物跡



第4号竖穴建物跡遺物出土状況



第4号竖穴建物跡



第5号竖穴建物跡



第6号竖穴建物跡遺物出土状況(1)



第6号竪穴建物跡遺物出土状況(2)



第6号竪穴建物跡



第1号堀跡土層断面(1)



第1号堀跡土層断面(2)



第1号方形竪穴遺構



第5号土坑



第62号土坑



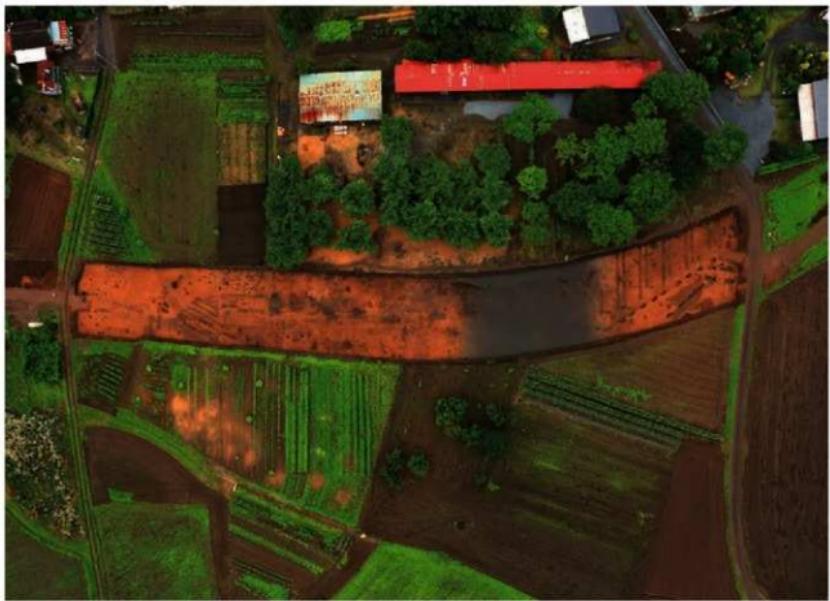
第64号土坑



第1・2・3・6号竪穴建物跡・第1号堀跡・遺構外出土遺物



大城遺跡遠景（南から）



大城遺跡全景（南東から）



第2号竖穴建物跡遺物出土状况(1)



第2号竖穴建物跡遺物出土状况(2)



第2号竖穴建物跡



第1号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡



第9号土坑



第79号土坑



第1号溝跡



第2号竪穴建物跡・第9・79号土坑・遺構外出土遺物



舟塚古墳群遠景（北から）



舟塚古墳群全景（南東から）



第1号火葬墓土層断面・遺物出土状況(1)



第1号火葬墓遺物出土状況(2)



第1号火葬墓



第2号火葬墓土層断面・遺物出土状況



第2号火葬墓



第3号火葬墓遺物出土状況



第3号火葬墓・第2号ピット群P1



第1号ピット群



第1～3号火葬墓出土土器

# 抄 錄

ふりがな	なかみちいせき てらうちいせき おおしろいせき ふなつかこふんぐん							
書名	中道遺跡 寺内遺跡 大城遺跡 舟塚古墳群							
副書名	主要地方道石岡城里線バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	茨城県教育財團文化財調査報告第465集							
著者名	近江屋成陽 国立科学博物館人類研究部 パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	公益財團法人茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2023(令和5)年1月26日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
中道遺跡	茨城県水戸市牛伏町140-9ほか	08305 - 068	36度 39分 33秒	140度 37分 78秒	38 ~ 54m	20200101 ~ 20200331	2,004 m <sup>2</sup>	主要地方道石岡 城里線バイパス 整備事業に伴う 事前調査
寺内遺跡	茨城県水戸市牛伏町271-2ほか	08305 - 071	36度 39分 66秒	140度 37分 31秒	45m	20200401 ~ 20200731	1,000 m <sup>2</sup>	
大城遺跡	茨城県水戸市牛伏町266-8ほか	08305 - 072	36度 39分 96秒	140度 36分 32秒	44 ~ 45m	20200401 ~ 20200731	2,379 m <sup>2</sup>	
舟塚古墳群	茨城県水戸市大足町1327-4ほか	08305 - 006	36度 39分 48秒	140度 36分 87秒	41 ~ 42m	20200401 ~ 20200731	653 m <sup>2</sup>	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
中道遺跡	集落跡	古墳時代	掘立柱建物跡 土坑	2棟 1基	土師器（壺・壺） 石器（砥石）			
		奈良・平安時代	道路跡	1条	土師器（高壺・手捏土器） 須恵器（高台付壺・盤・長頸瓶・壺）			
		室町・安土桃山時代	井戸跡	1基	青磁（碗） 石器（石鉢）			
	墓域	江戸時代	土坑墓	1基	銭貨（寛永通寶）			
その他	時期不明	掘立柱建物跡 土坑 井戸跡 溝跡 ピット群	1棟 9基 2基 6条 2か所	縄文土器（深鉢） 弥生土器（広口壺） 須恵器（壺・高台付壺・盤） 土師質土器（内耳鍋） 青磁（碗） 土製品（円筒埴輪） 銭貨（寛永通寶）				

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺内遺跡	集落跡	奈良時代	堅穴建物跡	6棟	土師器（壺）須恵器（杯・高台付壺・蓋・長頸瓶・甕・瓶・転用鏡）
		室町・安土桃山時代	堀跡	1条	青磁（碗）石器（砥石）鉄滓（椀状滓）
	その他	時期不明	方形堅穴造構 土坑 井戸跡 道路跡 溝跡 ピット群	1基 26基 1基 1条 6条 1か所	縄文土器（深鉢）弥生土器（細口壺）須恵器（壺）陶器（鉢・甕）瓦（平瓦）
大城遺跡	集落跡	平安時代	堅穴建物跡	1棟	土師器（壺・甕）須恵器（壺・壺）
		江戸時代	土坑	2基	土師質土器（焰塔）錢貨（寛永通寶）
	その他	時期不明	掘立柱建物跡 土坑 井戸跡 溝跡 柱穴列 ピット群	2棟 48基 1基 3条 4条 3か所	弥生土器（広口壺）土師器（高壺）須恵器（高台付壺・甕）陶器（擂鉢・瓶）土製品（土玉）
舟塚古墳群	墓域	奈良・平安時代	火葬墓	3基	須恵器（蓋・盤・短頸壺・長頸壺・甕）
	その他	時期不明	土坑 ピット群	20基 3か所	須恵器（甕）
要 約	中道遺跡では、奈良・平安時代の道路跡、寺内遺跡では、奈良時代の集落跡と室町・安土桃山時代の大足館との関連が想定される堀跡、大城遺跡では、平安時代の集落跡と江戸時代の土坑、舟塚古墳群では、奈良・平安時代の火葬墓などを確認した。				

## 印 刷 仕 様

編 集 O S Microsoft Windows 10 Pro  
編集 Adobe InDesign 2022  
国版作成 Adobe Illustrator 2022  
写真調整 Adobe Photoshop 2022  
Scanning EPSON DS-G20000, RICOH MP W4002  
使用Font OpenType リュウミンPro L-KL, 太ゴB101 Pro Bold  
中ゴシック BBB Pro Medium  
写 真 級数 カラー210線以上  
印 刷 印刷所へは、Adobe InDesign 2022 でデータ入稿

### 茨城県教育財団文化財調査報告第465集

水 戸 市

### 中道遺跡 寺内遺跡 大城遺跡 舟塚古墳群

主要地方道石岡城里線バイパス整備事業  
地 内 墓 藏 文 化 財 調 査 報 告 書

令和5（2023）年 1月26日 発行

発行 公益財團法人茨城県教育財団

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587  
H P <https://www.ibaraki-maibun.org>

印刷 いばらき印刷株式会社

〒319-1112 那珂郡東海村松平平原3115-3  
TEL 029-282-0370

